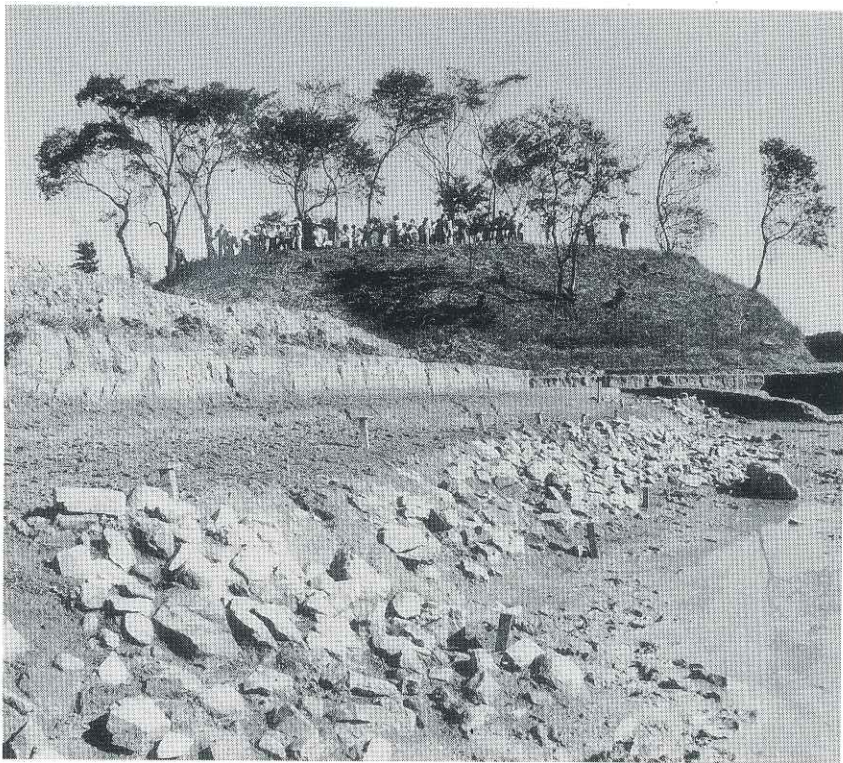


埋蔵文化財発掘調査

1990年度 年 報



財団法人栗東町文化体育振興事業団

例 言

1. 本書は、財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した、1990年度埋蔵文化財発掘調査事業の概要と、栗東町教育委員会による国庫補助事業発掘調査の概要を掲載したものである。
2. 調査にあたっては、滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東町教育委員会が調査主体となり、財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した。尚、国庫補助事業発掘調査は、栗東町教育委員会によるものである。
3. 調査担当は、平井寿一、大崎隆志、近藤 広、雨森智美、佐伯英樹、猿向敏一、橋本奈保子、木村元浩（事業団）、清水好洋（町教委兼務）が行った。
4. 本書の作成は、調査内容について各担当者が行い、編集を執筆者の意向をもとに近藤が行った。
5. 遺跡位置図（P 4）の遺跡番号は、『昭和60年度滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会 1986による。尚、各調査内容中の調査地位置図は、スケールの指定していないもの以外は、全て5000分の1に統一してある。

目

例言・目次	1
動向・活動記録	2
調査一覧表	3
遺跡位置図	4
事業団調査	
辻 遺 跡	8
高野遺跡	12
岩畑遺跡	16
狐塚遺跡	20
椿山池ノ浦遺跡	26
手原遺跡	28
蜂屋遺跡	30
野尻遺跡	34

次

総 遺 跡	40
下鈎遺跡	42
下鈎東遺跡	44
上鈎遺跡	46
中沢遺跡	48
霊仙寺遺跡	54
小柿遺跡	58
国庫補助調査	
総 遺 跡	60
岡遺跡・地山古墳群	61
小槻大社10号墳	66
中村遺跡	68
表紙の写真 地山古墳(前方部から後円部を望む)	

事業報告

動 向

1. 発掘調査事業

34件 77,509千円

内1989年度からの継続 3件

1991年度への継続 5件

国庫補助事業への職員派遣 3件

詳細は別表

2. 普及啓発事業

(1) 現地説明会

「岡遺跡 地山古墳調査」

1990年11月8日

栗東町教育委員会共催

(2) スライド報告及び速報展

「1989年度調査分」

1990年6月9日

於栗東町立図書館

(3) 部内研修 作業員等研修

「若狭街道と鳥浜貝塚」

1990年10月25日

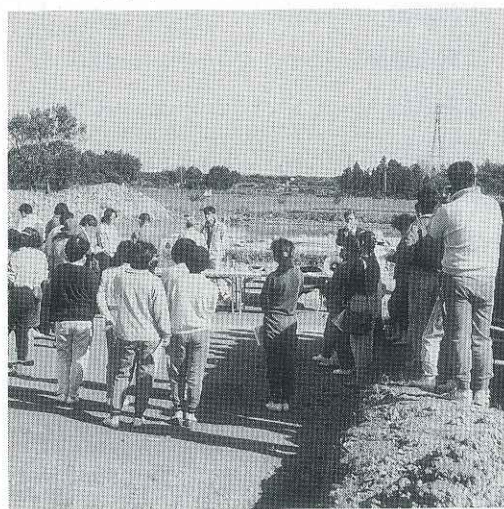
(4) 遺跡表示石柱建立

「地山古墳」

(5) 冊子等の発行

「栗東の文化」Vol.22, 23, 24

「栗東あれこれ10選」



地山古墳現地説明会 1990.11.8

本年度は、昨年度に比して調査件数は減少しているが、J R琵琶湖線の栗東駅新設に伴う周辺の整備事業、金勝川上流域の圃場整備事業に伴う地山古墳周辺の調査等大規模な調査があった。また、市街地近辺の宅地造成、及び共同住宅建設、倉庫建設等の民間開発が活発に行われ、道路整備等の公共事業も推進されている。調査面積は、昨年度と同様増大する傾向にある。

調査地は町内平野部のほぼ全域にわたっており、それぞれ大きな調査成果を上げることができた。特に、岡遺跡の調査では、官衙の周縁に展開される集落と思われる建物群が、より西方に広がっていることが確認され、同時に実施された地山古墳周辺の調査では、周濠・葺石の検出と埴輪等の出土があり、地山古墳の規模・形状・年代が明らかとなった。また、より古い埴輪を出土する2号墳の発見等新たな知見が加えられた。

野洲川扇状地中流域に位置する中沢・霊仙寺・野尻・小柿遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物の検出があり、中流域での当該期の調査資料も増加しつつある。

上流域の辻・高野・岩畑遺跡は、各々が県内でも有数の古墳時代の集落跡であり、出土遺物から、それぞれの集落の特徴が見いだされている。今日までの調査で合計600棟以上の竪穴住居跡が検出されており、本年度の調査でも予想どおりの竪穴住居跡が検出され、新たな資料が加えられた。

狐塚・蜂屋・下鉤東遺跡では、奈良時代の遺構及び遺物が確認され、古代東海道周辺の当該期の資料を加えることができた。

町内で最大の古墳である、椿山古墳の周辺で2件の調査があり、それぞれ成果が上がっている。

鶴岡東町文化体育振興事業団・埋文調査

遺 跡	調 査 地	原 因	遺 構	遺 物	頁	担当
1 辻	辻比江多456-1,457	医院建設	堅穴住居(古)、建造跡(近世)	土師器・須恵器	8	橋本
2 辻	出庭字401-1	造成工事	土墳墓(古)、掘立柱建物・土壇・溝・井戸	土師器・須恵器・黒色土器・陶器・石鏃	9	佐伯
3 辻	辻字鳥居本512-1・2,514	倉庫建設	堅穴住居(古)、掘立柱建物(奈～中世)、河道	土師器・須恵器・黒色土器・石製模造品	10, 11	大崎
4 高野	大橋4丁目295他	共同住宅建設	堅穴住居(古)、溝	須恵器	12	清水
5 高野	辻421-1・2	造成工事	堅穴住居・溝(古)、掘立柱建物	土師器・須恵器	13	大崎
6 高野	高野字イバ立176-1	倉庫建設	堅穴住居・掘立柱建物・周溝状遺構(古)、区画溝(中世)	土師器・須恵器・瓦質土器・陶器・石鏃	14, 15	近藤
7 岩畑	林字高丸308-1	倉庫建設	堅穴遺構(古)、掘立柱建物・河道	土師器・須恵器	16	大崎
8 岩畑	林字赤橋303-1	ホテル建設	堅穴住居(古)、掘立柱建物(中世)、溝	土師器・須恵器・黒色土器	17～19	大崎
9 狐塚	川辺字東浦431-1,434	宅地造成	流路(古)、掘立柱建物・区画溝・井戸・土壇(中世)	土師器・瓦質土器・陶器・磁器・木器	20～23	雨森
10 狐塚	安養寺7丁目615-5	独身寮建設	沼沢地・土壇(縄)、井戸・ピット(奈)	縄文土器・土師器・須恵器・埴輪・木器	24, 25	雨森
11 椿山池ノ浦	安養寺字柿田582-1	宅地造成	沼沢地(古)、溝・ピット	土師器・須恵器・黒色土器	26	清水
12 椿山池ノ浦	安養寺6丁目9-60	貸事務所建設	沼沢地・溝	土師器・須恵器・緑釉	27	平井
13 手原	手原3丁目928,929-2	造成工事	掘立柱建物(奈)、溝(奈・中世)	土師器・須恵器・黒色土器・瓦	28, 29	雨森
14 蜂屋	蜂屋字ニナアセ597-1	変電所施設増設	掘立柱建物・土壇(中世)	土師器・須恵器・黒色土器	30	雨森
15 蜂屋	蜂屋字坊ノ前608他	道路建設	溝・土壇(奈・中世)、ピット	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉・灰釉・軒丸瓦・獣骨	31～33	猿向
16 野尻	総字黒狭間138他	区画整理	ピット・土壇(弥)、掘立柱建物・土壇・耕作痕(中世)、大型土壇・暗渠排水路(近世～近代)	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・緑釉・灰釉・輸入陶磁器・中世陶器・近世陶磁器・銭貨	34～37	猿向
17 野尻	下鉤樋ヶ上852,853	道路改良工事	流路(古)、木堰基(中世)	土師器・須恵器・黒色土器	38, 39	橋本
18 総	総字西浦640他	幼稚・保育園舎建設	掘立柱建物・区画溝・井戸・土壇(平～鎌)	土師器・須恵器・黒色土器・施釉陶器	40, 41	清水
19 下鉤	下鉤字舟場831,832-1	貸事務所建設	暗渠排水路(中世)	土師器	42	橋本
20 下鉤	下鉤字西浦689-1	店舗建設	掘立柱建物(中世)	土師器	43	橋本
21 下鉤東	下鉤甲区土整2区6・7	実習棟建設	溝(弥)、倉庫(奈)、溝(中世)、耕作痕(近世)	弥生土器・須恵器・磁器・木器・獣骨	44, 45	佐伯
22 上鉤	上鉤字中田夫233	造成工事	掘立柱建物・井戸・土壇・溝状遺構(中世)	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・磁器・木器	46, 47	木村
23 中沢	中沢字引切172・173-1	研修棟建設	ピット・河道(弥)、古墳(古)、溝(古～中世)	弥生土器・土師器・須恵器・石鏃他	48～51	平井
24 中沢	中沢字中畑188・189・1,2	宅地造成	ピット・河道(弥)、古墳・溝(古～中世)	弥生土器・土師器・須恵器・石鏃他	52, 53	平井
25 霊仙寺	霊仙寺字南松馬鹿	道路建設	方形区画墓(古)、溝(古墳、中世)	土師器・須恵器・黒色土器	54, 55	平井
26 霊仙寺	霊仙寺字西畑93他	宅地造成	土壇・ピット(弥)、区画溝・掘立柱建物・井戸(中世)、貯水施設(近世)	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・陶器・磁器	56, 57	近藤
27 小柿	小柿字南里326-1	宅地造成	掘立柱建物(中世)、溝・土壇・河道	土師器・須恵器・黒色土器	58	大崎
28 小柿	中沢字大月113-1	共同住宅	堅穴住居・掘立柱建物・周溝状遺構・土壇・溝(弥～奈)	土師器・須恵器・石鏃・石斧	59	近藤

国庫補助事業・埋文調査

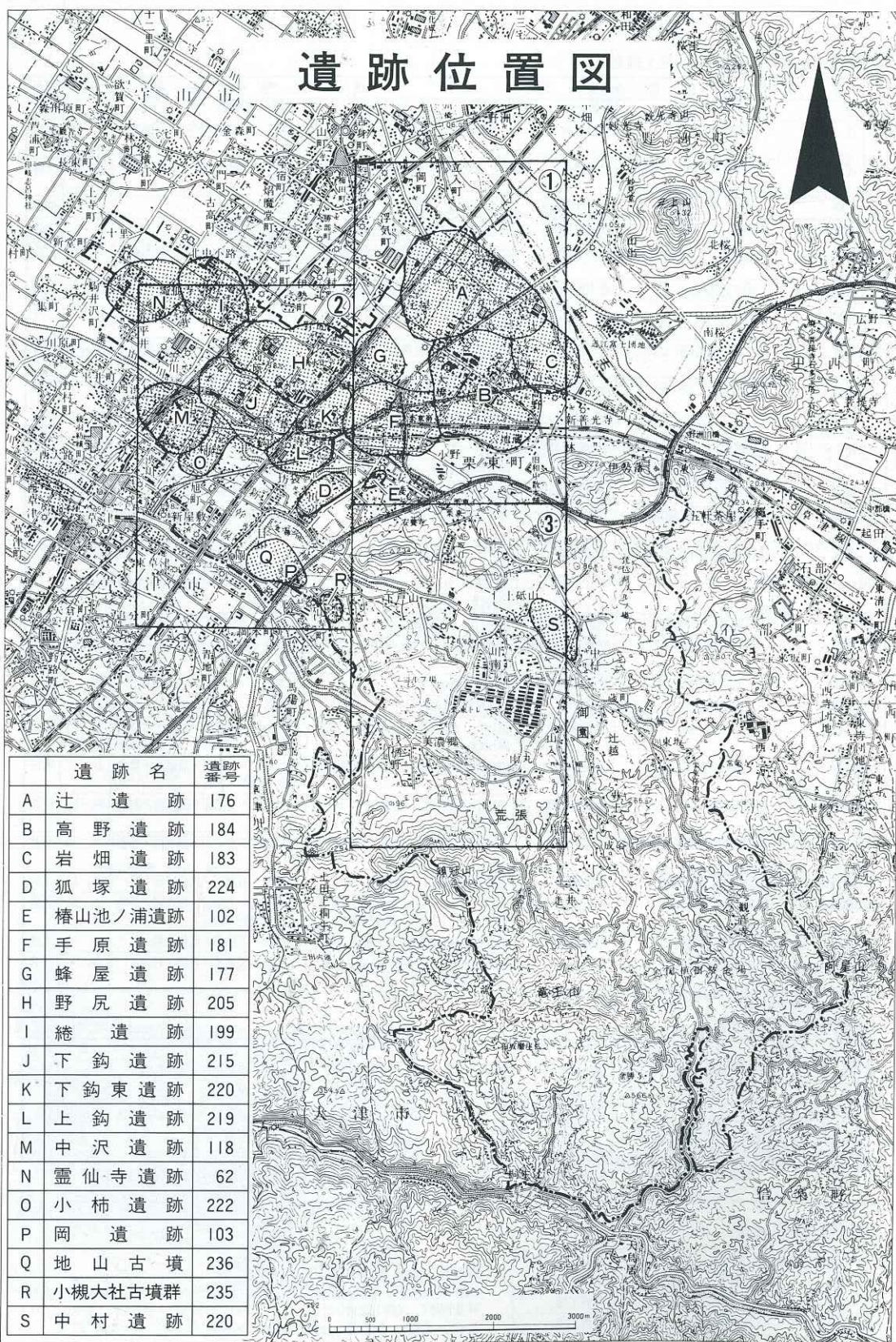
遺 跡	調 査 地	原 因	遺 構	遺 物	頁	担当
29 総	総字西浦648他	個人住宅	周溝状遺構・掘立柱建物・土壇	土師器・黒色土器・施釉陶器	60	清水
30 総	総字西浦650	個人住宅	掘立柱建物・区画溝(平～鎌)	土師器・黒色土器	60	清水
31 岡・地山古墳	岡・目川	団体営園場整備	墳丘・葺石・周溝・掘立柱建物・井戸	土師器・須恵器・埴輪・鉄器・木器・黒色土器・陶器	61～65	佐伯
32 小槻大社10号墳	下戸山字官ヶ谷	個人住宅	墳丘・周溝・主体部	土師器・須恵器・陶器	66, 67	佐伯
33 中村	御園字中村・上砥山	団体営園場整備	掘立柱建物・土壇墓・土壇・溝(中世)・暗渠排水路	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉・灰釉・玉・石鏃	68～71	木村

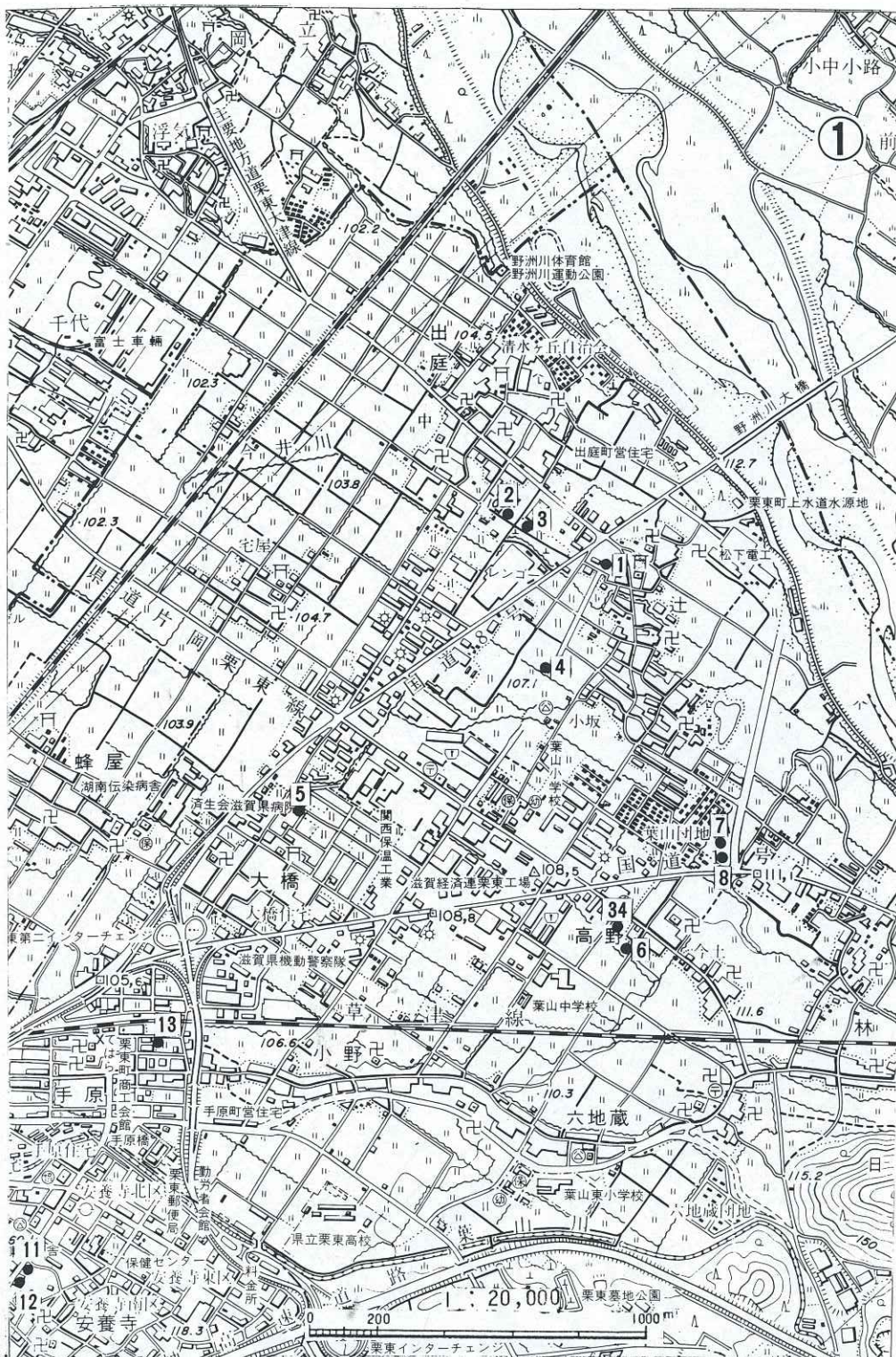
調査中(91年度へ継続)

遺 跡	調 査 地	原 因
34 高野	高野字イバ立324-1	倉庫建設
35 狐塚	安養寺7丁目593	造成工事
36 上鉤	上鉤字中田夫224-1	造成工事

遺構覧では、下記の略語を用いた。
 (縄)縄文時代、(弥)弥生時代、(古)古墳時代、(奈)奈良時代、(平)平安時代、(鎌)鎌倉時代、また、時代の選定ができないものについては、古代・中世等と表すことがある。

遺跡位置図

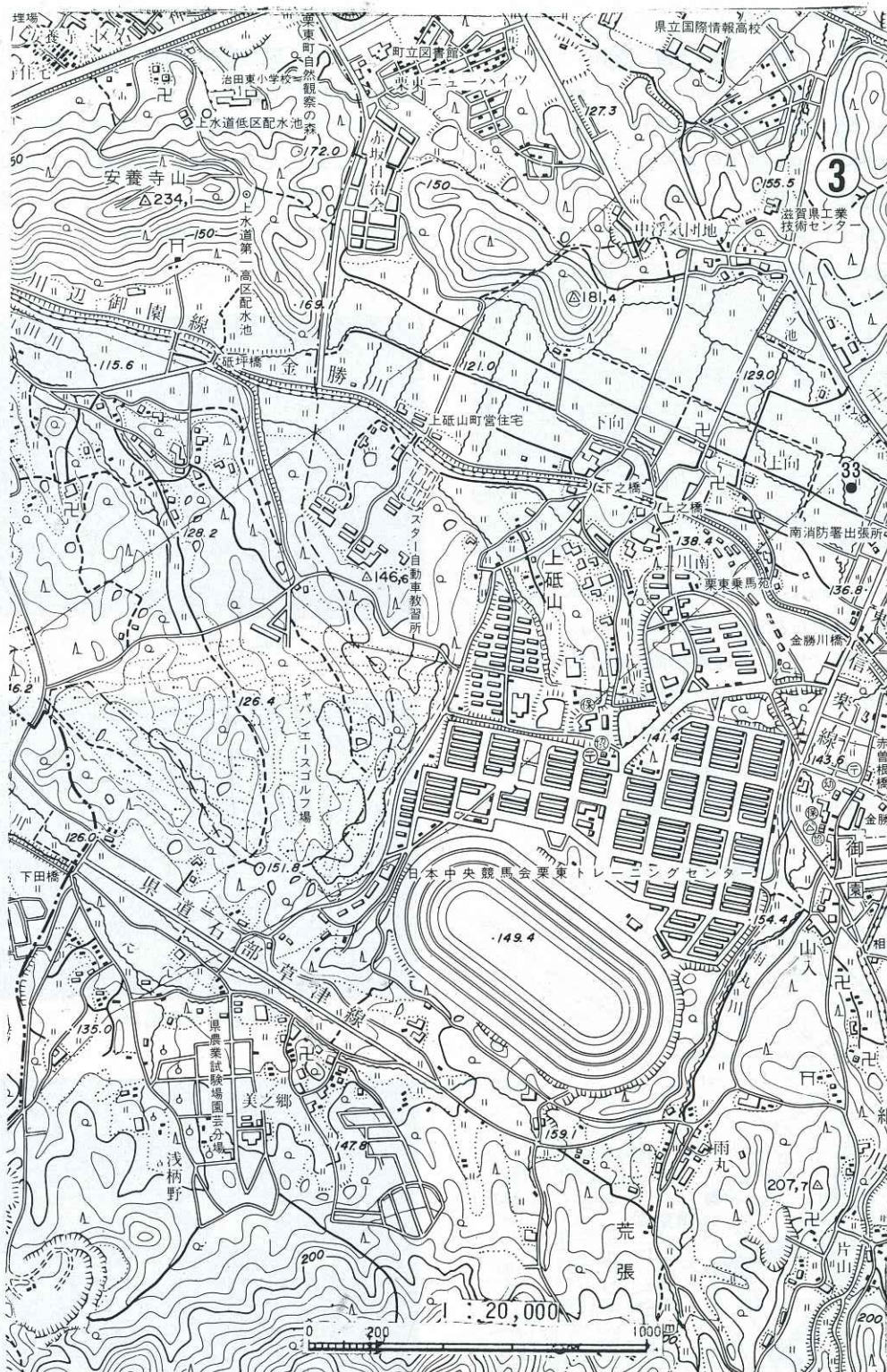




遺跡位置図①



遺跡位置図②



遺跡位置図③

① 辻遺跡

調査地 栗東町大字辻字比江田456-1、457

調査期間 1990年4月3日～4月30日

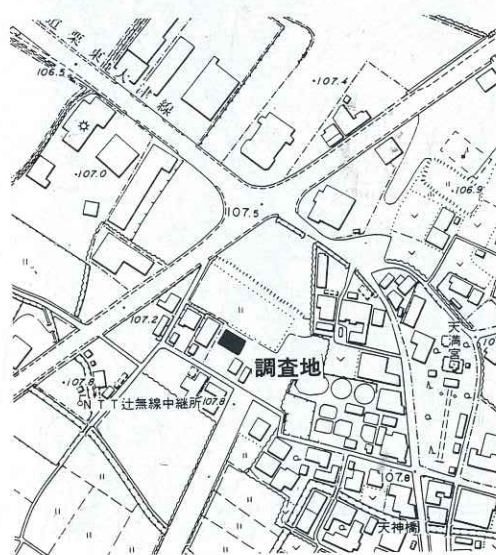
調査面積 175m²

国道8号線と主要地方道の交差する調査地周辺は、近年開発のさかんな地区の一つであり、今回の調査は歯科医院建設に伴って行われたものである。

辻は中世より『辻鋳物師』の拠点として高名であり、その関連かと思われる遺跡が確認された。鋳型と鋳造跡である。鋳型は砂型と呼ばれるもので、製品完成の際に碎かれる性格のものであるために全て破片で、何を鋳造していたのかは、わからなかった。鋳造跡は3m×1.5mほどの不成形な長方形で、底に薄く粘土が張られていたと思われる。

いずれにせよ、『辻鋳物師』の記録はわずかに文献と、彼らが作った梵鐘などにのみその存在をとどめるだけで、実体は明らかではない。また地元に残る資料としてはほとんど見られないため、今後の発掘調査における期待は大きい。

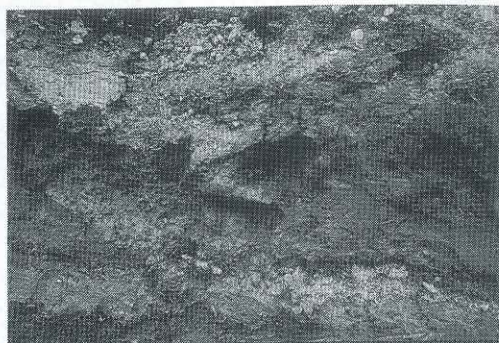
また、辻は古墳時代に集落のあったところ



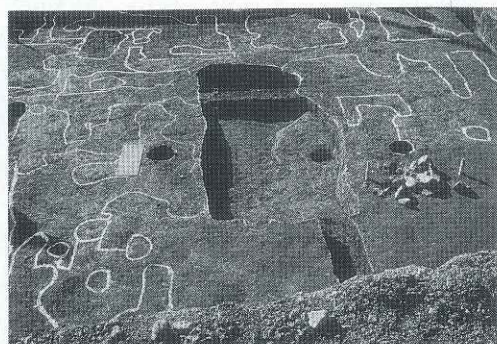
調査地位置図

で、調査地周辺からも住居が発見されている。

ここでは、鋳造跡の下面30cmから竪穴式住居1棟が確認された。一辺4mほどの付近ではよく見られる規模のものである。柱穴は確認できなかったが、かまどの跡には多少の須恵器・土師器と支柱石があった。しかし周囲の土の焼け方や、灰の量などから、短期で終わった住居のようである。(橋本)



壁面より出土の鋳型



中央部分が鋳造跡



住居内かまど跡

② 辻遺跡

調査地 栗東町大字出庭字鳥ノ元
調査期間 1991年1月16日～3月20日
調査面積 460m²

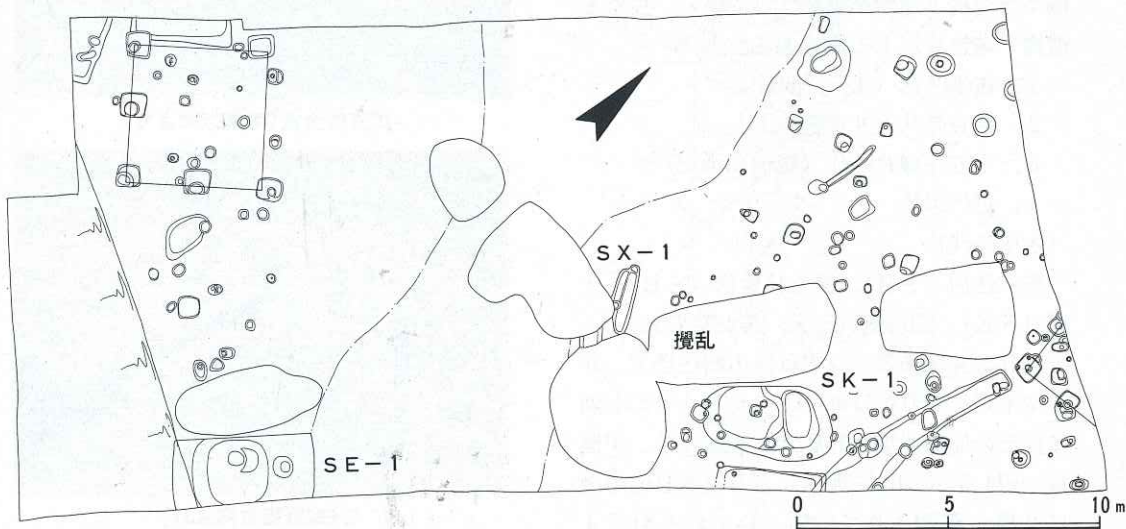


調査地位置図

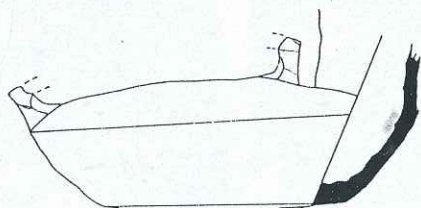
本調査地においては、中央部に遺構のない
パラス層、南端では旧河道の落込みを確認し
た。主な遺構は、古墳時代の土壌SK-1、
土壌墓SX-1（いずれも5世紀末から6世
紀初頭）、奈良時代の井戸SE-1、数棟の掘
立柱建物や溝（奈良時代から中世）、を検出
した。（佐伯）



SE-1 遺物出土状況

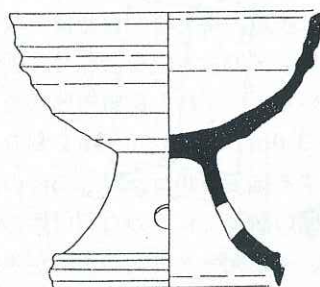


調査地遺構図



SE-1出土 須恵器 平瓶

S = 1/3



SK-1出土 須恵器 高杯

③ 辻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字辻字鳥ノ元

調査期間 1990年10月24日～1991年3月30日

調査面積 1,700m²



調査地位置図

今回の調査では古墳時代から近代に至る様々な遺構・遺物が確認されている。主たる遺構・遺物は以下の様である。

1. 古墳時代 (4～7世紀)
2. 奈良時代 (8世紀)
3. 平安～鎌倉時代 (12～13世紀)
4. 近代以降

(古墳時代)

竪穴住居 (SH)、掘立柱建物 (SB)、土壇 (SK)、旧河道 (SR) 等が見られる。

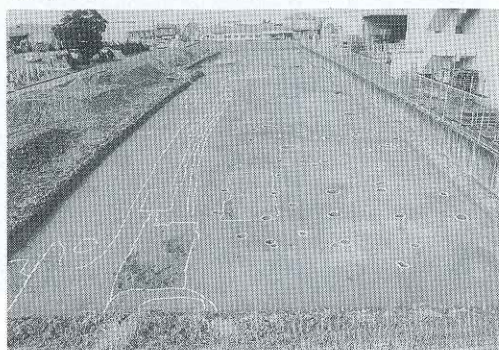
SHは4棟ある。いずれも方形住居で、北辺や東辺に造り付けカマドを有し、その右隅に円形の屋内土壇 (貯蔵穴) を設ける。規模は一辺4.5～6.0mを測る。SBはSH01の南に2棟が確認されている。いずれも桁行4間×梁間4間の総柱構造をとる。その内SB03は桁行7.4m×梁行7.0mを測る。なお共に柱穴には多量の焼土粒を含む抜き取り痕を残す。SK02・03は方位を合わせ、近接し配置されている。いずれも長楕円形状を呈し、長さ2.2～3.0m、幅0.6～0.8mを測る。SRは北西流する推定幅40m、深さ2.3mの河道である。今回の調査ではその右肩付近の検出に留まるが、4世紀～8世紀の土器が多量に出土している。

(奈良時代)

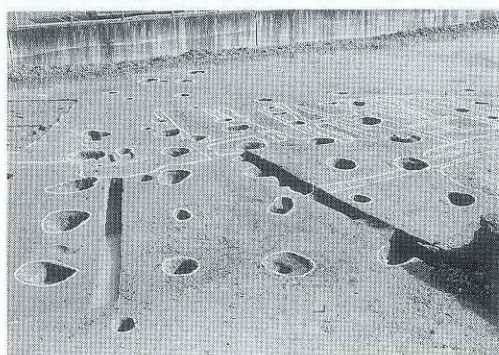
略南北方向に延びる柵列 (SA) とその東側の2棟の掘立柱建物 (SB0.5・0.6) がある。SB06は桁行3間 (8m)×梁間2間 (4.5m) の総柱構造の建物である。柱穴掘り方は一辺40cmの方形状を呈する。

(平安～鎌倉時代)

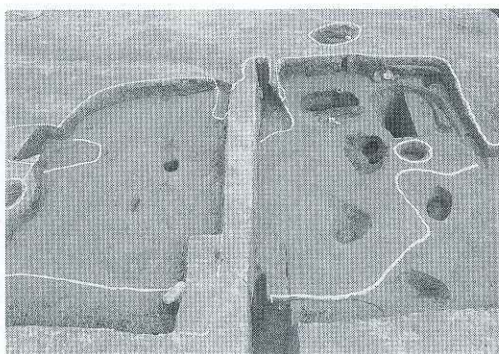
大規模な掘立柱建物 (SB) 3棟の他、木棺墓と推察される土壇3基がある。SB01は桁行6間 (14m)×梁間5間 (10m)、SB02



調査区全景(南東方向より)



SB03(西方向より)

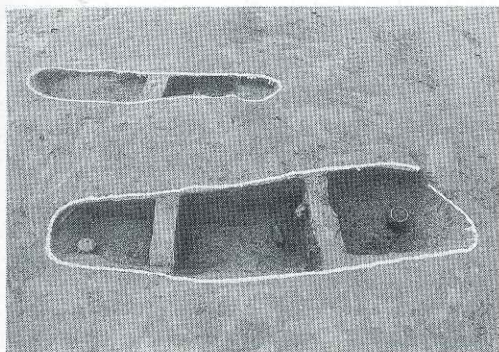


SH03(西方向より)

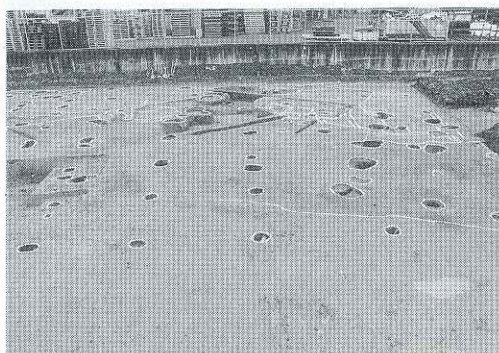
は4間(10.6m)×4間(8.2m)のいずれも
総柱構造の建物である。柱穴掘り方は径40cm
の円形を呈する。土壌の内、SK01では長さ
1.6mの組み合わせ木棺痕跡が検出され、供献
用土師皿数枚が出土している。

(近代以降)

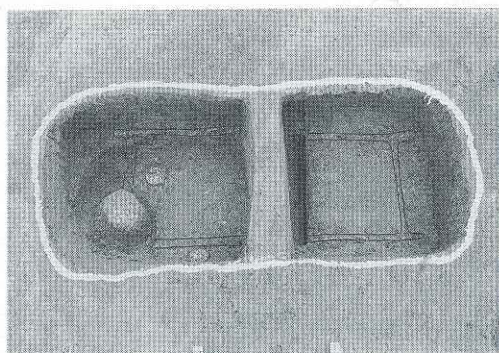
焼土やスミ、鋳型片や瓦片等の投棄された
4m×1m程度の土壌が数基確認されている。
また、現水田地割と一致して延びる小溝の多
くもこの時期のものである。(大崎)



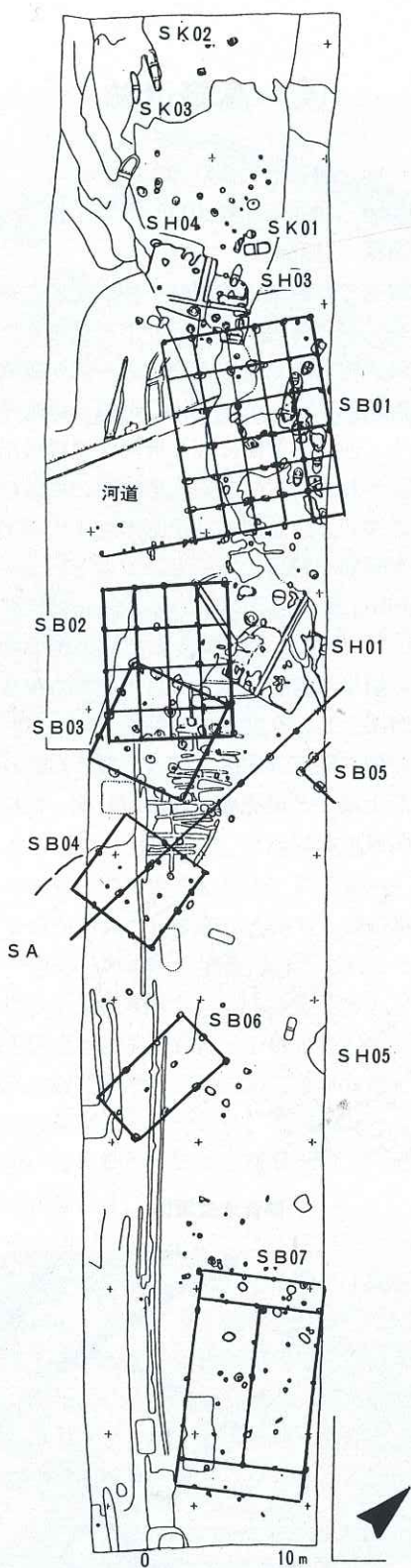
SK02・03(西方向より)



SB02(西方向より)



SK01(北西方向より)



調査地遺構図

④ 高野遺跡

調査地 栗東町大橋4-295

調査期間 1990年8月29日～9月7日

調査面積 212m²

本調査では竪穴式住居跡1棟、土壇2基、溝1条、自然流路1条、ピットを検出した。

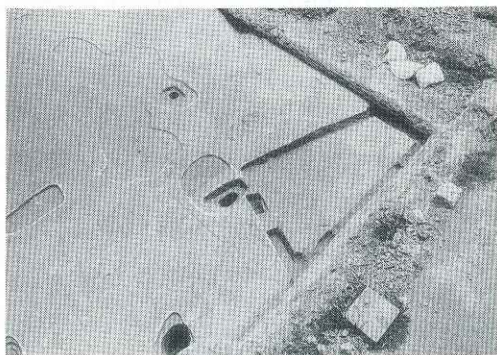
竪穴式住居跡は東辺と南辺の一部が確認でき、南辺遺存長2.5mを計る。遺構への削平は著しく、住居内壁面に巡る周溝が遺構検出面で確認された。支柱穴や内部施設の痕跡は認められない。周溝内より土師器片1点が出土するが時期を特定できるものではない。

幅10m、東から西に向いて走る自然流路は深さ0.7m程度で下層は砂または小礫で埋まり、上層は粘質土で埋まる。上層から少量の土器が出土し、9世紀頃に時期を求められる。

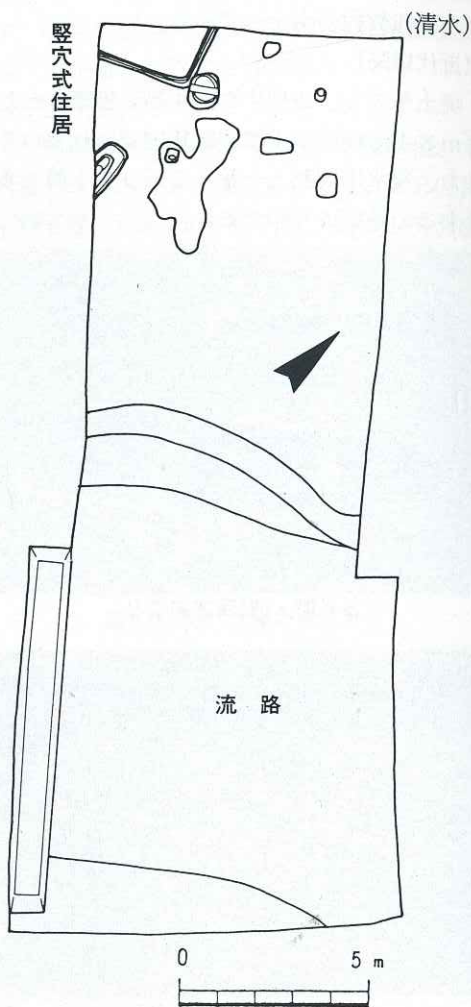
この他、竪穴式住居を切って掘り込まれる楕円形土壇などが認められるが時期、性格ともに明確でない。



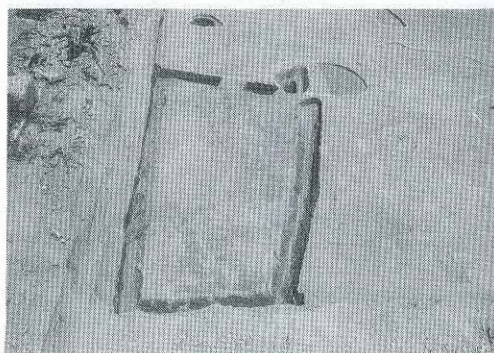
調査地位置図



後世いずれの時期にか著しい削平を受けてはいるが、本調査地一帯に竪穴式住居が存することが予想されるに至った。本結果をもって今後の調査・研究に資するものとした。



調査地遺構図



⑤ 高野遺跡

調査地 栗東町大字辻

調査期間 1990年4月23日～5月24日

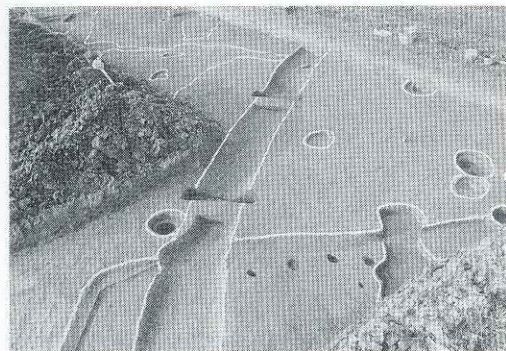
調査面積 1,000m²



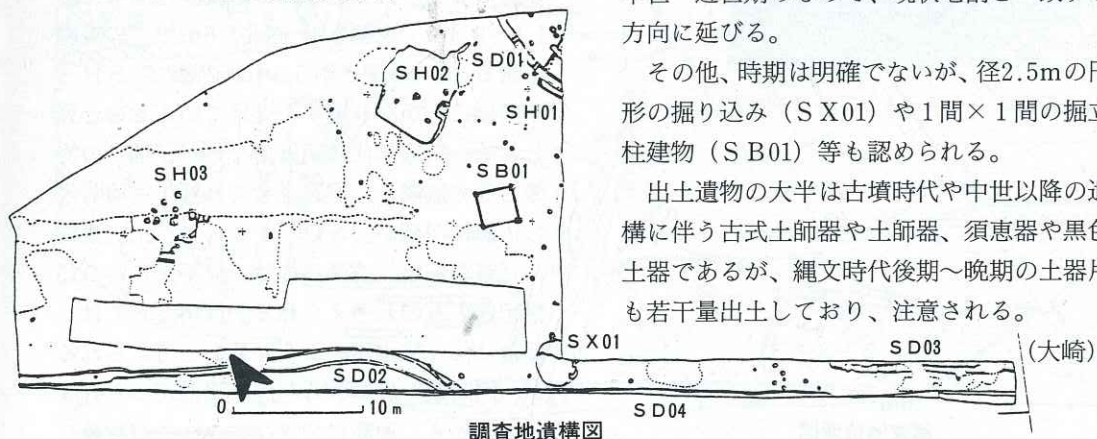
調査地位置図

今回の調査では古墳時代を中心とする遺構・遺物が多数確認されている。

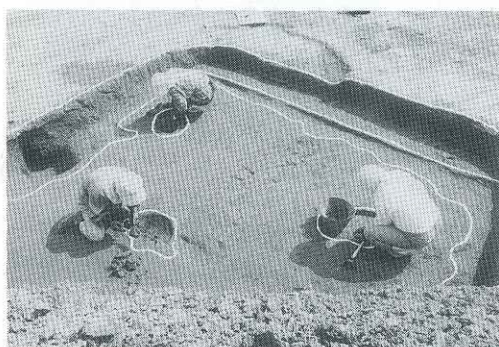
竪穴住居（SH）は3棟見られ、いずれも4世紀代のものである。その内SH02は6



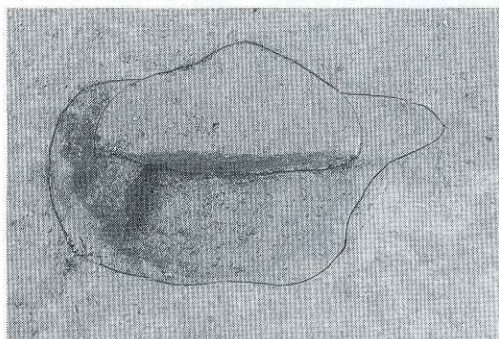
SD01(東方向より)



調査地遺構図



SH02(北方向より)



SH02地床炉

m×5mの長方形で、4支柱構造をとる住居である。残存壁高は30cm。固く踏みしめられた床面中央には地床炉を持ち、南辺沿いには一辺60cmの方形土壇(貯蔵穴)を設けている。

溝状の遺構（SD）は4条確認されている。調査区東端に見られるSD01は幅1.3m、深さ20cmの緩やかな弧状を描いて延びる溝で、古墳時代後期のものである。他の溝はいずれも中世～近世期のもので、現状地割と一致する方向に延びる。

その他、時期は明確でないが、径2.5mの円形の掘り込み（SX01）や1間×1間の掘立柱建物（SB01）等も認められる。

出土遺物の大半は古墳時代や中世以降の遺構に伴う古式土師器や土師器、須恵器や黒色土器であるが、縄文時代後期～晩期の土器片も若干量出土しており、注意される。

⑥ 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野イバ立176-1

調査期間 1990年11月1日～1991年3月5日

調査面積 約1,100m²

高野遺跡は、野洲川左岸自然堤防状微高地と、島状微高地上に形成された古墳時代前期を中心とする遺跡として周知されている。古墳時代の集落は、過去の調査結果から、県道片岡栗東線付近を境に、南北2つのグループに大別でき、当調査地は、南側に含まれる。検出された遺構は、古墳時代前期の方形周溝状遺構2基(SX-1・2)、古墳時代後期の



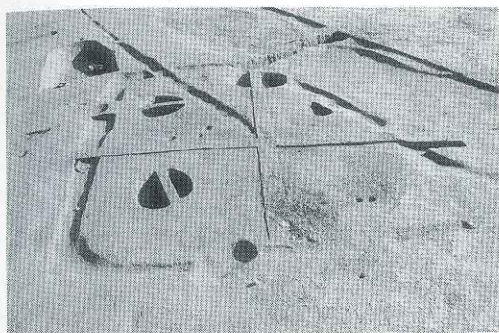
SX-1・SH-6を北方向よりみる



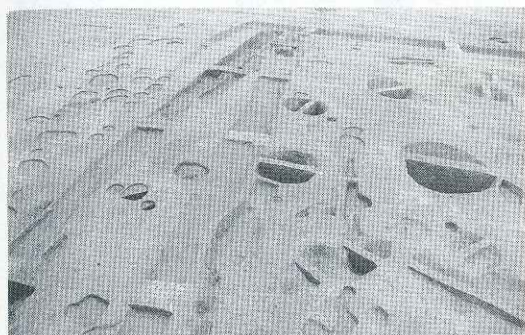
調査地位置図

竪穴式住居1棟(SH-6)の他、古墳時代と思われるものに、掘立柱建物、柵列、土壇等が存在する。古墳時代以外では、平安時代以降の旧河道(SR-1)、室町時代のL字状にのびる溝(SD-1～3)等が存在する。以下、主な遺構について概略する。

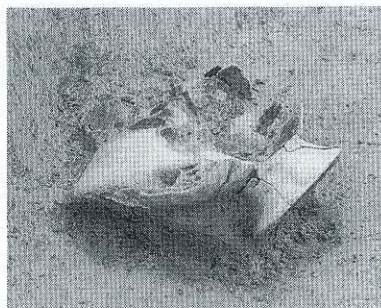
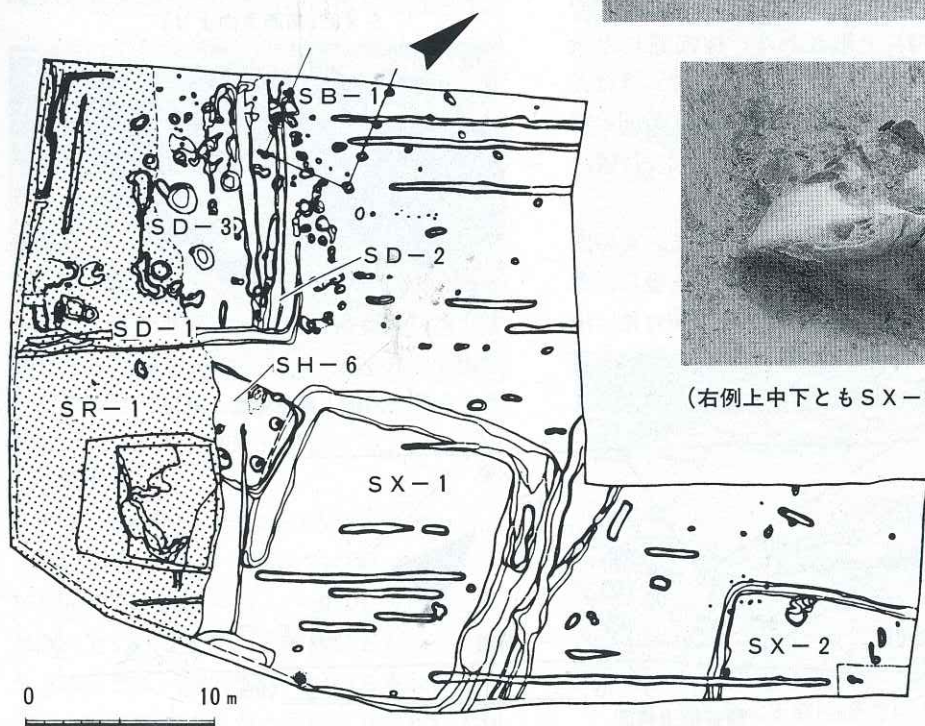
SX-1は、南辺隅に陸橋部をもつ方形周溝状遺構で、規模は約11×14m、幅約3.1～3.5m、深さ約20～60cmを測る。北辺の溝には、約1.5×3.5m、深さ40cm程の、長楕円形状の土壇が後に設けられている。遺物は、北西から西辺にかけてのコーナー周辺と南辺先端を中心に、甕、壺、高杯等のまとまった遺物が出土している。築造年代は、出土遺物より4世紀代と考えられる。SX-2は、現存で約9.5×5.5mの方形周溝状遺構である。溝幅は、約60～90cm、深さ20～40cmの小型のものである。時期は、遺物が小片で判断しにくいだが、埋土の特徴から察すれば、SX-1とほぼ同時期の所産と思われる。SH-6は、方形プランを呈する竪穴式住居で、推定約5.4×5.8mの規模をもつ。深さは、後世の削平によって1～2cm程度しか残存しない。支柱穴は、4本柱と思われるが、南辺をSR-1によって切られているため、2本しか確認できなかった。尚SH-6、SX-1が埋まった後に造られたもので、築造年代は、出土遺物より7世紀前半頃と思われる。SB-1は、3間以上×2間の掘立柱建物である。柱間は、約1.8～2.4mで東西5m、南北5.6m以上の規模を測る。柱穴の深さが5～10cm程度で、SH-6同様に、かなり削平を受けているものと思われる。築造年代は明確でないが、埋土の特徴と他の遺構との関連を考えれば、古墳時代の可能性が高い。SD-1～3は、出土遺物(瓦質の焙烙、信楽系の鉢、軒平瓦)から15世紀代のものと考えられる。性格としては、屋敷に伴う排水溝のようなものと考えられるが、同時期と思われる明確な遺構がみられないことから、速断はできない。(近藤)



SH-6 (西方向よりみる)



SD-1・2・3周辺 (西方向よりみる)



(右例上中下ともSX-1出土遺物)

調査地遺構図

⑦ 岩畑遺跡

調査地 栗東町大字林字高丸

調査期間 1990年5月28日～6月30日

調査面積 300m²



調査地位置図

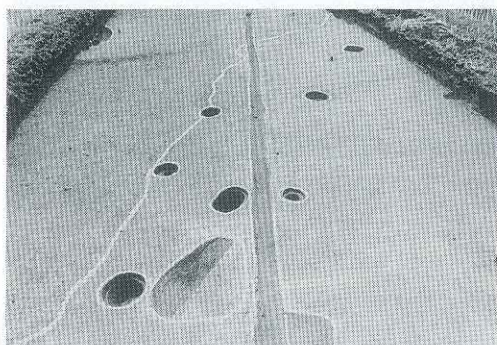
今回の調査では耕土直下(標高:109.00m)で露呈する黄灰色シルト層より掘立柱建物や竪穴遺構、溝や旧河道跡が確認され、古墳時代から中世に至る土器が出土している。

掘立柱建物(SB01)は部分的な確認にすぎないが、東西2間以上、南北3間以上の身舎の4面に庇を付す建物で、西側は幅40cmの小溝(SD01)で画される。柱穴掘り方は径50～60cmの不整円形状を呈し、柱穴径は25cm程度を測る。出土遺物に恵まれず時期は特定し得ないが、6世紀末～8世紀代に位置付けて大過ない。

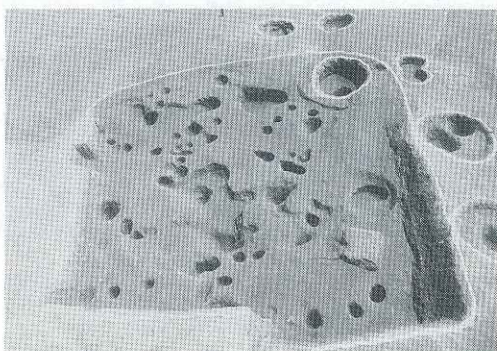
竪穴遺構(SX)は2基見られる。その内SX02は3.5m×3.0mの略方形形状を呈し、深さは50cmを測る。床面に特別な処理は見出し得ないが、ほぼ中央に地床炉柱の痕跡を残す。埋土内より多量の古式土師器が出土して

おり、4世紀代の所産と解される。

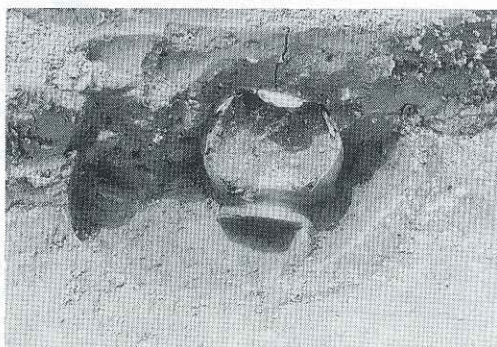
その他、中世以降のL字形小溝や北流する旧河道跡の一部も確認されている。(大崎)



調査区全景(北西方向より)



SX02(南西方向より)



河道上層遺物出土状況



調査地遺構図

⑧ 岩畑遺跡

調査地 栗東町大字林字赤橋

調査期間 1990年7月2日～11月2日

調査面積 1,100m²



調査地位置図

岩畑遺跡は古墳時代から中世に至る様々な遺構・遺物の見られる複合遺跡として知られている。特に野洲川左岸自然堤防微高地に形成された古墳時代集落址は隣接する辻・高野遺跡と共に栗東を代表する当該期集落址と言うことができ、これまでに200棟前後の竪穴住居や全長20mの前方後方形遺構等も確認されている。それらは野洲川支流と推定される旧河道を挟んで南北2ヶ所に集中しており、岩畑遺跡を現状2ヶ所の集落から成る“ムラ”として把握することが可能である。

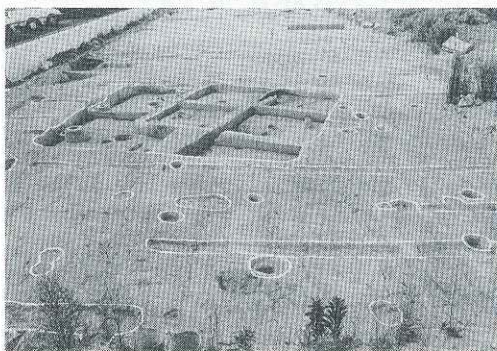
今回の調査で確認された遺構・遺物には古墳時代（4～5世紀）と平安時代～鎌倉時代（12～13世紀）の2時期のものが見られる。いずれも耕土直下の黄灰色～黄褐色シルト層のベース（標高：108.90m）上において重複して確認されている。以下に主たる遺構・遺物について、その概略を記述する。

（古墳時代）

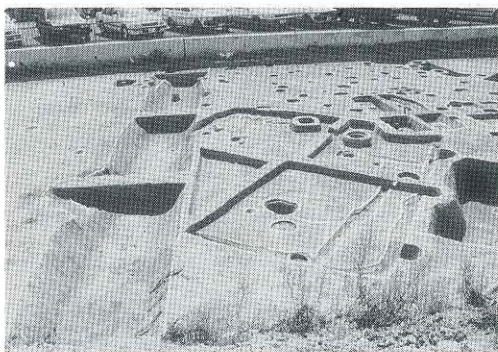
竪穴住居や掘立柱建物が確認されている。

竪穴住居（SH）は部分的な検出を含め、16棟が確認されている。いずれも方形もしくは隅丸方形形状を呈し、規模はおおむね一辺4～6mを測る。屋内構造の面から見れば造り付けカマドを有する類とそれ以外の類に大別

される。前者では通有、北辺もしくは南辺沿いにカマドを持ち、その右隅に円形の屋内土壇（貯蔵穴）を穿つ。後者では床面中央に地床炉を残し、南辺もしくは東辺沿いに方形の屋内土壇（貯蔵穴）を有する例が大半である。もちろん両者を折衷した様な住居もないわけではないが、機能的あるいは時期的にも主流ではない。床面中央はいずれも極めて固く踏みしまり、周囲の壁沿いに板材痕を残す溝跡（壁溝）が見られる。中には住居内部のしき



調査区南東部(南東方向より)



調査区中央部(北東方向より)



調査区北西部(北西方向より)

り痕跡を残す例もある。ここではSH10と12の概要を掲示しておく。

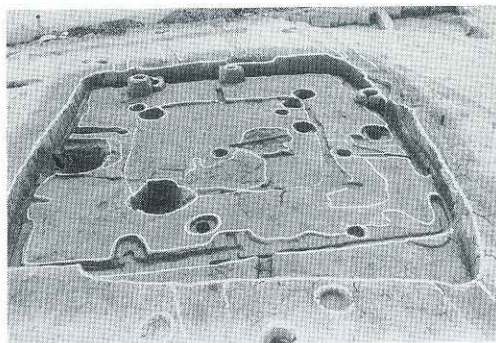
SH10は6m×5.6mの方形状を呈し、残存壁高は30cmを測る。固く踏みしめられた床面には4支柱穴が見られ、その中央には60cm×40cmの楕円形状の地床炉が設けられている。壁沿いには幅20～30cmの壁溝が廻り、南辺中央には一辺1m程度の方形土壌（貯蔵穴）が穿たれている。壁溝は必ずしも全周せず、北辺では幅45cmでとぎれる部分を持つ。この部分に出入口が設けられていた可能性が高い。その他、この住居については床面中央が周囲に比して5～10cm程度低く、壁溝沿いにベッド状の高まりを持つ点、支柱穴からも明らかな様に同位置での建て替えが為されている点などが指摘される。

SH12は5.7m×5.5mの方形状を呈し、残存壁高は0.5mを測る。固く踏みしめられた床面には4支柱穴が見られる。壁沿いには20cmの壁溝が廻り、支柱穴から延びる“しきり溝、とつながっている。南辺の東端近くには一辺1m程度の方形土壌（貯蔵穴）が穿たれている。北辺ほぼ中央には造り付けカマドが設けられている。残存状態は必ずしも良好でないが、煙道も住居内に構築されていたらしく、全体ではL字形を呈し、一見“オンドル風、の特殊な形状が復元される。その他、この住居では床面上に散乱する炭化材の痕跡が見られ、焼失住居であったことが指摘される。

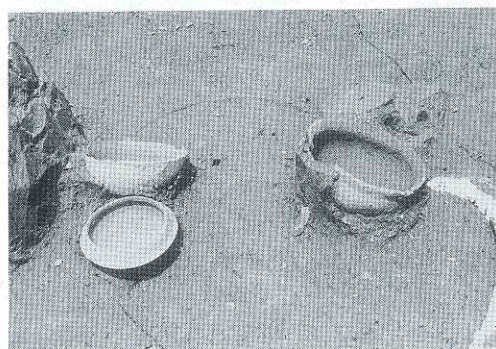
これらの住居からは当然日常生活で使用された古式土師器や須恵器等の土器類が多量に出土しているが、その他、勾玉（滑石）や白玉（滑石）などの石製品、鉄鏃や刀子等の鉄製品、土器造り用粘土塊も含まれている。

ところでこれらの住居すべてが一時期の所産でないことは遺構の重複関係からも明らかである。おそらく調査区内では以下の様に一時期2～3棟の住居が約200年間にわたり継続した結果として理解される。

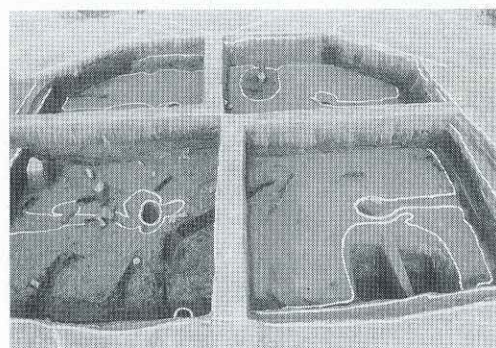
SH10、04・08→？→？→SH05→S



SH10(東方向より)



SH10 土器出土状況



SH12(南方向より)



SH12炭化材出土状況

H06、11、18→SH12・14→SH02・03→SH09→SH01、07

掘立柱建物（SB）は2棟見られる。出土遺物に恵まれず、時期は特定し得ないが、他遺構との重複関係からおおよそ4世紀後半～5世紀前半に位置付けて大過ない。SB01は東西棟の2間（3.8m）×2間（3.6m）の側柱建物である。柱穴掘り方は径50cmの不整円形状を呈する。SH07・08と重複し、前者に先行し、後者より後出する。SB02は一部のみの確認に留まるが、東西5.1mを測る。SH15と重複し、先行する。

（平安～鎌倉時代）

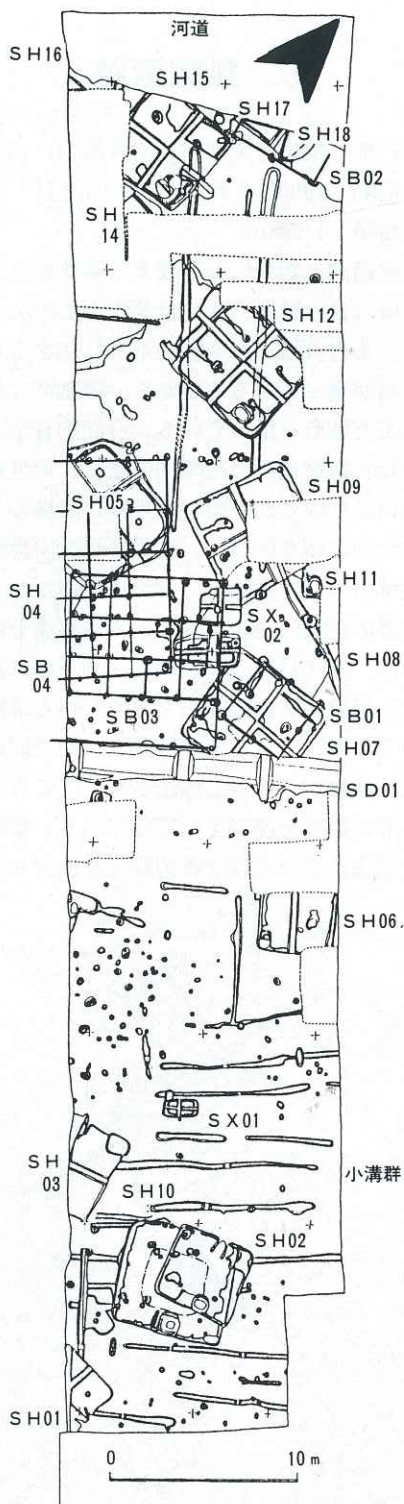
調査区中央ではほぼ東西方向に延びる区画溝（幅員1.5m）が見られ、それを挟んで南北両側に当該期の遺構（掘立柱建物・溝・土塼）が確認されている。

掘立柱建物（SB）は区画溝（SD01）の両側に見られるが、南側では建物を明瞭に復元し得ない。北側では桁行5間×梁間4間の総柱建物が重複して認められる。SB03は推11.4m×8.6mの略東西棟の建物、SB04も同規模の略南北棟の建物である。柱穴掘り方は径50cm程度の円形状、柱穴径は20cm程度を測る。なお、SBの北側には4.2mの間隔で併行して延びる幅40～50cmの2条の小溝が見られる。これは屋敷地から北へ向う「道路状遺構」の可能性もあろう。

小溝群は調査区南部で認められる幅30cm程度の溝状遺構である。耕作痕であろう。

土塼（SX）は区画溝の両側で各々1基ずつ見られる。いずれも「墓的性格」の遺構と考えられる。SX01は1.8m×1.0mの長方形形状を呈する。深さは20cmで、底に木棺板材痕を残す。SX02は3.5m×1.7mの略長方形形状を呈する。埋土内に多くの石塊（5～10cm四方）を残す。いずれの土塼からも多数の供献用の土器（黒色土器碗・土師皿）が出土している。

（大崎）



調査地遺構図

⑨ 狐塚遺跡

調査地 栗東町大字川辺字東浦431-1他

調査期間 1990年4月23日～8月25日

調査面積 1,564m²

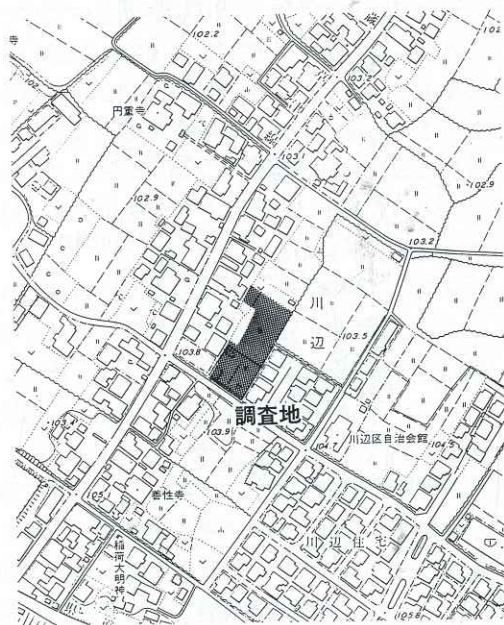
狐塚遺跡は野洲川の形成する扇状地に位置し、南には金勝川、北には葉山川が西流している。また背後には金勝山系より連なる丘陵の先端が迫っていることから、遺跡地は起伏に富んだ地形を呈している。今回調査を行ったのは、狐塚遺跡の西端に位置し、近世東海道沿いに形成された現在の集落に隣接している。今回の調査区(D・E区)では、中世末の屋敷跡および古墳時代の旧河道がみつかった。

中世の屋敷は、幅0.8～3mの区画溝を伴っており、特にD区の屋敷地を区画するSD-1は、屋敷の防御の役割も果たし得る規模のものである。SD-1で区画された空間には、掘立柱建物が7棟以上検出された。これらはそれぞれ数度の建替えを行っており、細い時期や変遷については今後の詳細な検討を要す

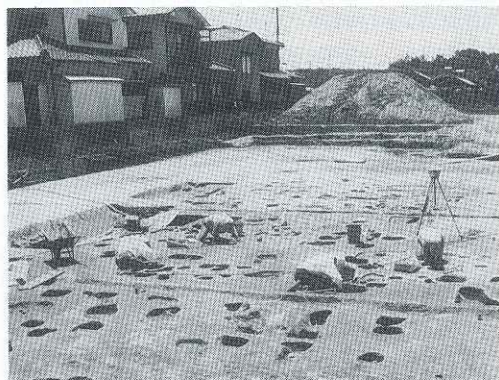
る。また、方形の土壇が14基検出されており、1.55×2.1mから3.6×4mの大型のものまである。ほかに、屋敷地の南端では井戸が一基検出され、これは石組の下に桶をすえる構造のものである。D区の屋敷地の遺構は15～16世紀のものが主であるが、SD-1を掘り直した溝(SD-15)は江戸時代のものである。

E区では湧水が著しく検出が困難であったが、掘立柱建物1棟以上、方形土壇8基、およびこれらを区画する溝がみつかった。いずれもD区と併行する時期のものである。

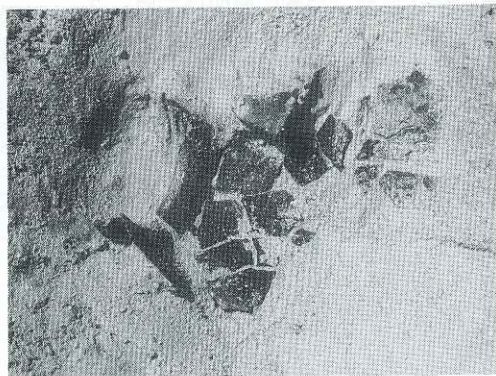
今回検出された屋敷跡からは多彩な遺物が出土している。建物群を区画する溝からは、信楽焼甕・播鉢、土師質焙烙、青磁碗・皿、瀬戸・美濃系天目茶碗、土師器皿、瓦などが出土した。土壇や井戸からも陶器や瓦の出土がみられるが、なかでもSK-1からは瓦質花瓶が出土しており注目される。



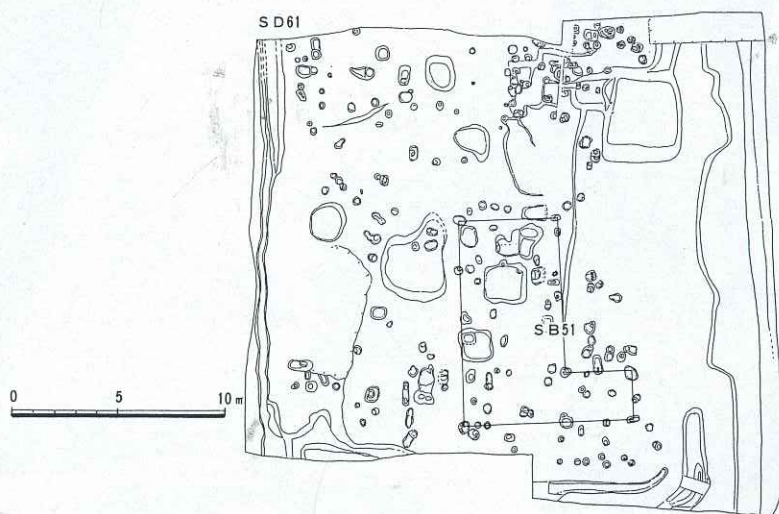
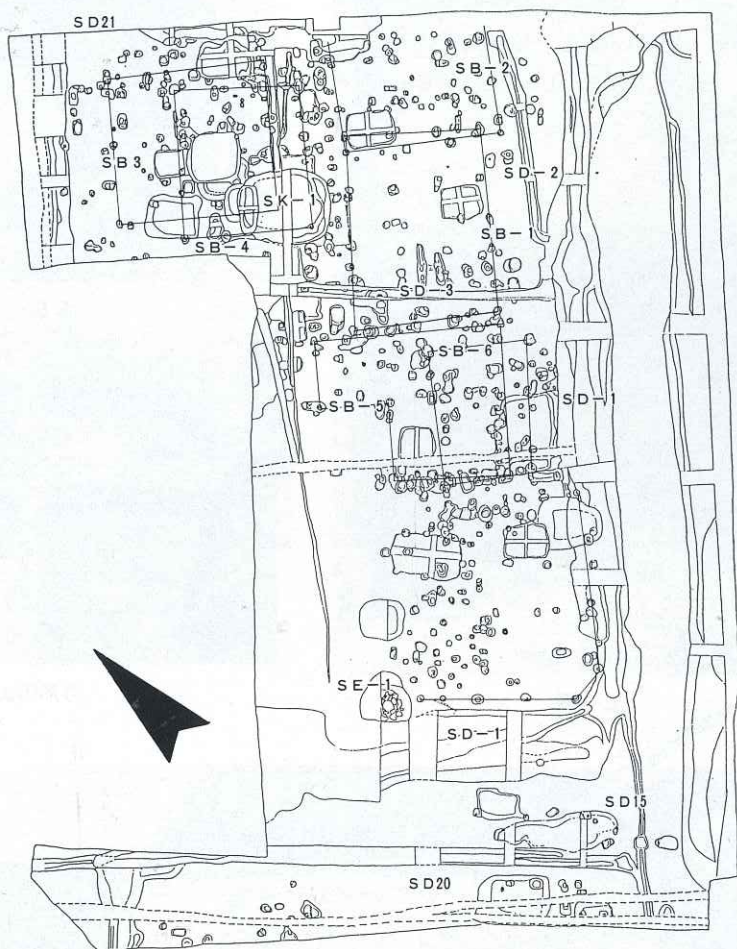
調査地位置図



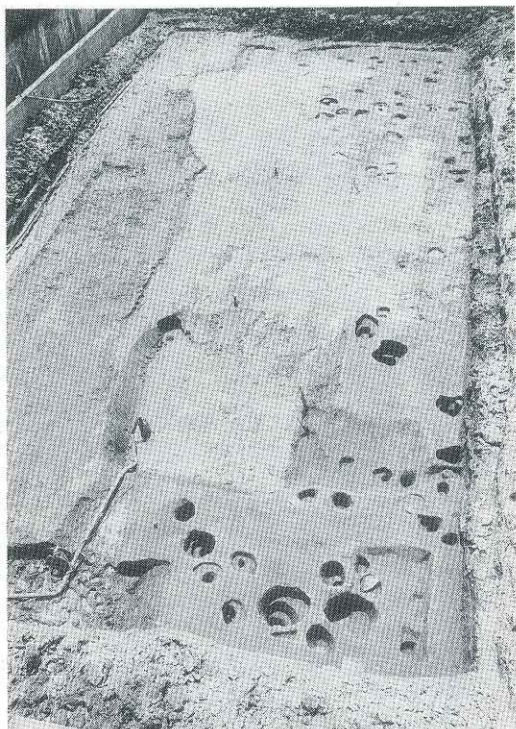
作業風景



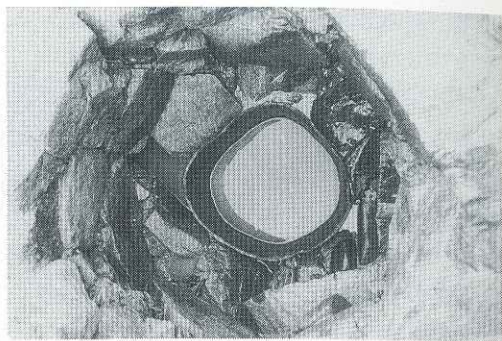
流路の土器(古墳時代初頭)



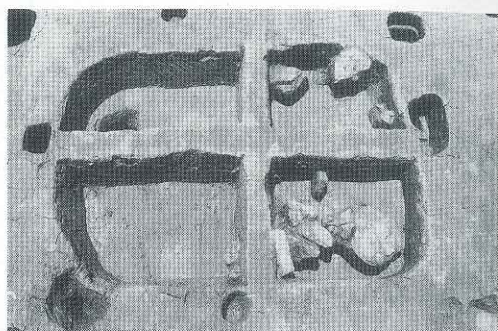
調査地遺構図



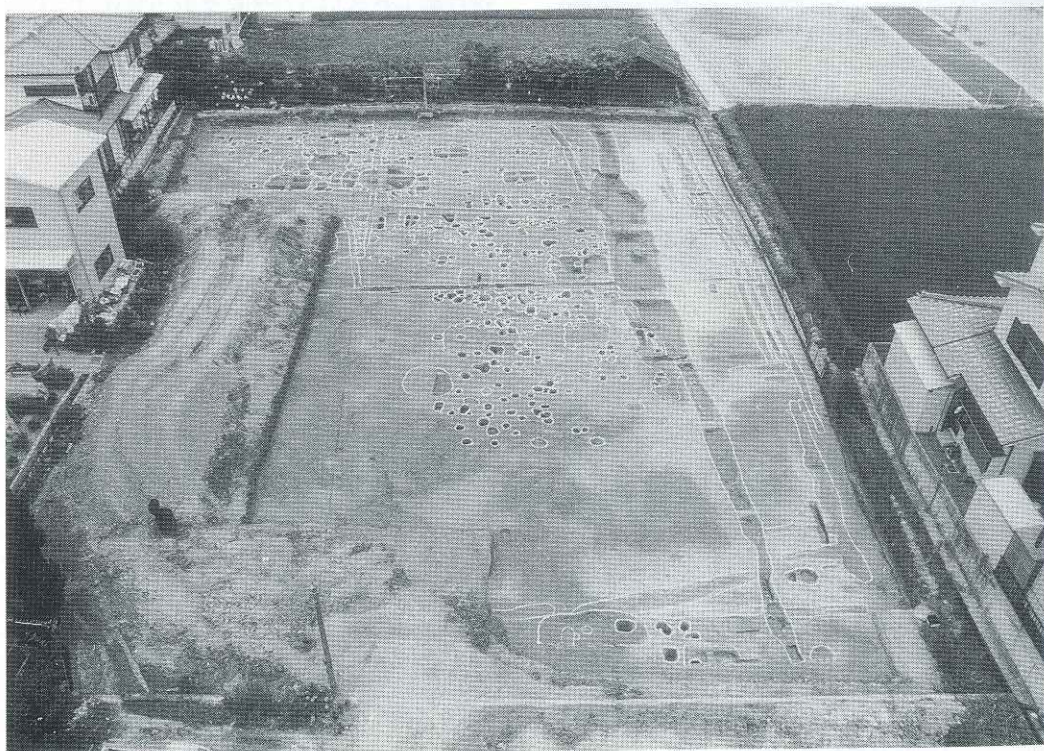
E 区



SE-1



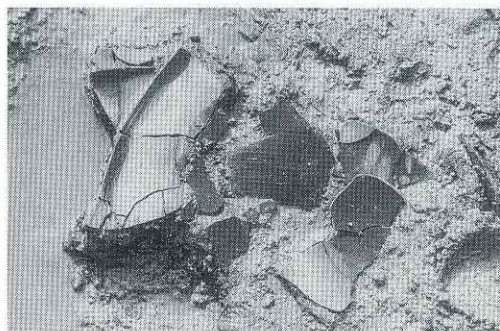
方形の土坑



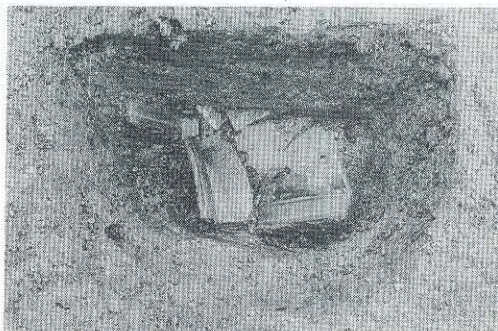
D 区 全景

1988、89年度の調査では、D、E区の東に隣接して、13～14世紀の集落が確認されている。今回の調査区では、これに続く中世末の屋敷地がみつき、集落の中心が近世東海道

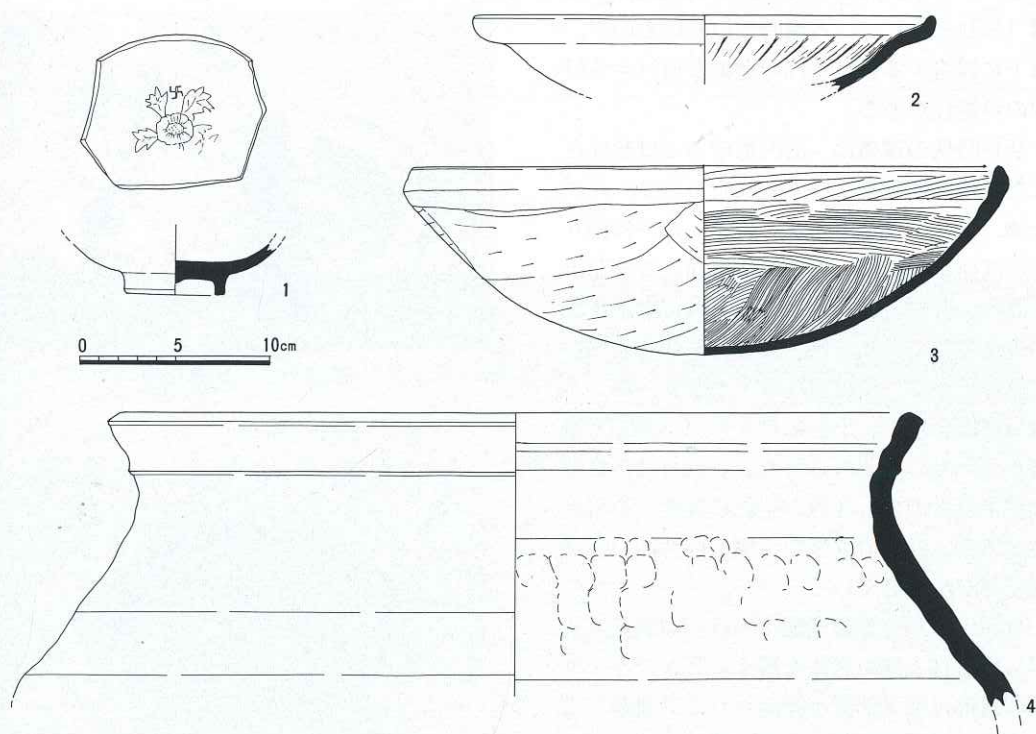
寄りに移動していることが明らかになった。これら狐塚遺跡の西端における調査成果は、街道沿いにおける集落の変遷を検討し得る貴重な資料であるといえる。(雨森)



SD1 出土焙烙(実測図3)



P97 出土陶器



出土土器実測図

(1. SD21 2. SD1・SD21
・P97 3, 4. SD1)

⑩ 狐塚遺跡

調査地 栗東町大字安養寺7丁目615-5

調査期間 1990年9月27日～11月8日

調査面積 320m²

本調査地は狐塚遺跡の東端に位置しており、縄文時代から奈良時代までの遺構・遺物が検出された。

調査地における地形は南東から北西にかけてゆるやかに低くなっており、低い部分には暗褐色土の堆積がみられ、縄文時代には沼沢地が広がっていたと考えられる。この沼沢地の沿辺であったと想定されるところで、土壇一基(SK-2)が検出された。これは平面プランが径118～146cmの楕円形の土壇で、深さは90cmを測り、底には径約20cmのピットが認められる。縄文時代晩期の土器が出土した。

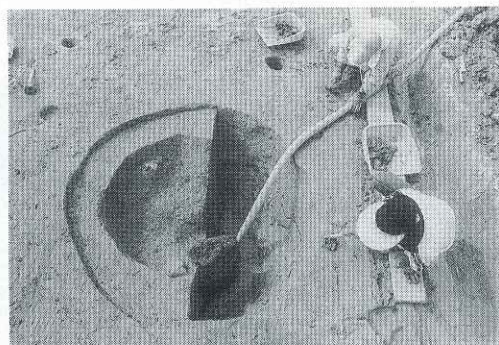
トレンチ中央において検出された屈曲する溝(SD-1)は、古墳時代以降のもので、以下に報告する奈良時代の遺構と併行する時期の可能性はある。

奈良時代の遺構は、沼沢地のあとに形成された流路の埋没後につくられたもので、井戸、土壇、ピットが検出されている。井戸は掘り方の直径が約170cm、深さは検出面から約73cmを測る。井戸の底には井桁に組んだ桙が1段のみ遺存しており、桙内には20～40cm大の石数個とともに、須恵器坏身・土師器坏身、木製品が出土した。土器には「と」「大殿」と墨書されたものが認められた。これらは奈良時代前半のもので、井戸の祭祀に関連する可能性がある。井戸の東側の土壇も同時期の土師器坏身が出土している。

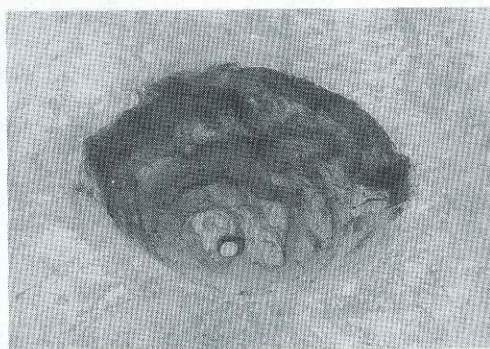
今回出土した墨書土器からは、本調査区周辺に律令官人層の居住を窺うことができよう。狐塚遺跡は栗太郡衙と推定される岡遺跡と白鳳寺院と考えられている手原遺跡とのほぼ中間に位置し、官衙に関連した遺構の広がりを知るうえで貴重な資料である。(雨森)



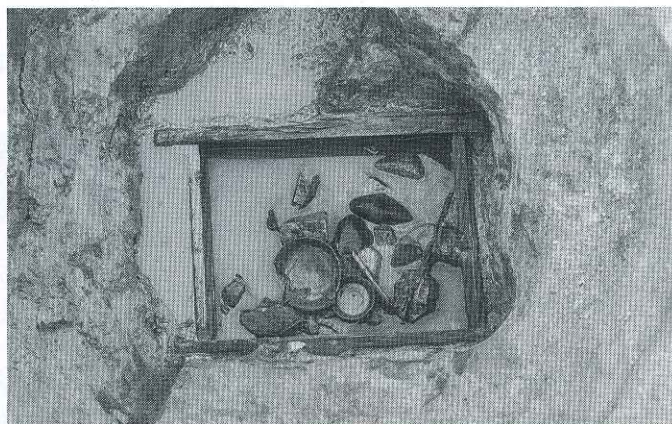
調査地位置図



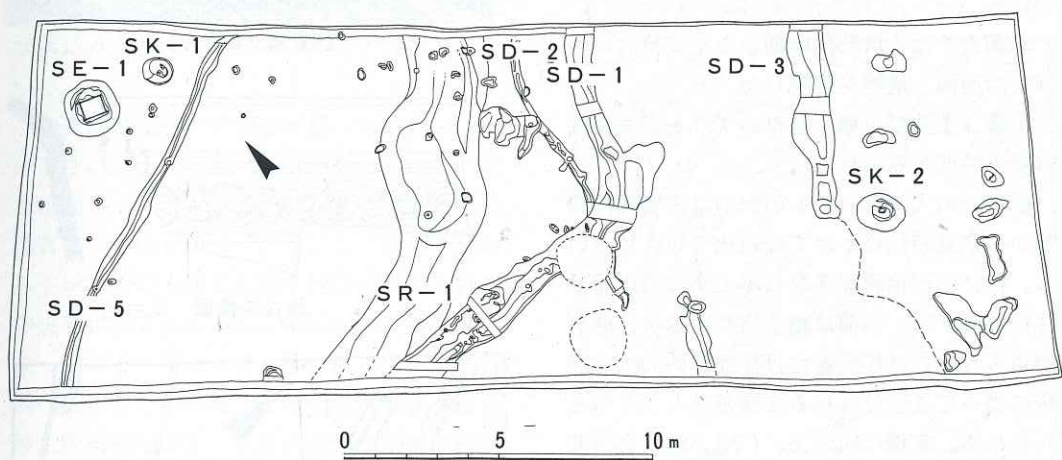
SE-1 調査風景



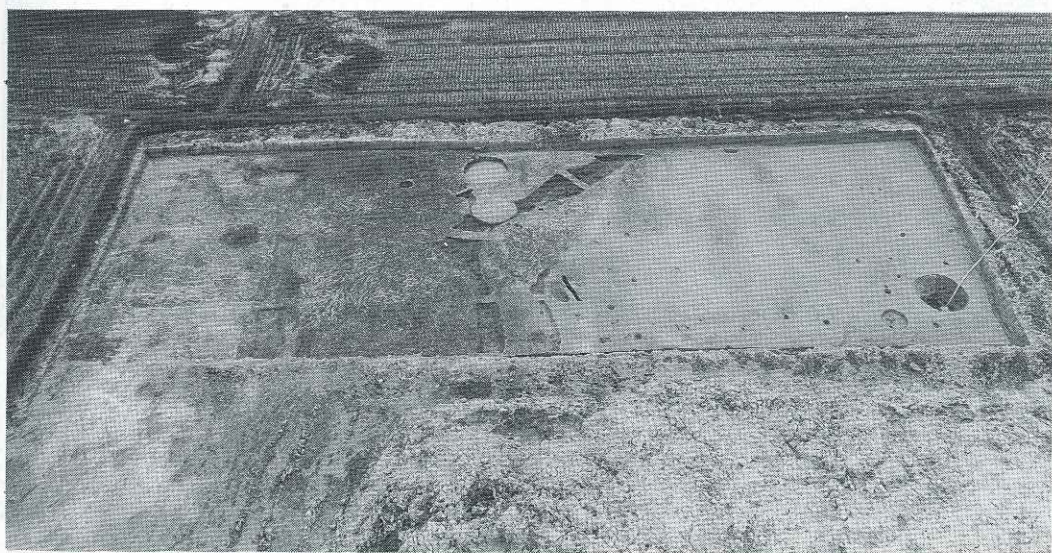
SK-2



SE-1
土器出土状況



調査地遺構図



狐塚遺跡全景

⑪ 椿山池ノ浦遺跡

調査地 栗東町安養寺6-581-1

調査期間 1990年2月26日～4月30日

調査面積 250m²

本調査地は椿山古墳周濠に接する地点にあたる。椿山古墳は墳丘長99m、周濠を含めると全長135mを測る帆立貝形古墳である。前方部が削り取られた時点で実施された調査では三角板革綴短甲1領、鉄剣9口等が出土している。

本調査では古墳時代中期から平安時代にかけての遺構、遺物を確認した。

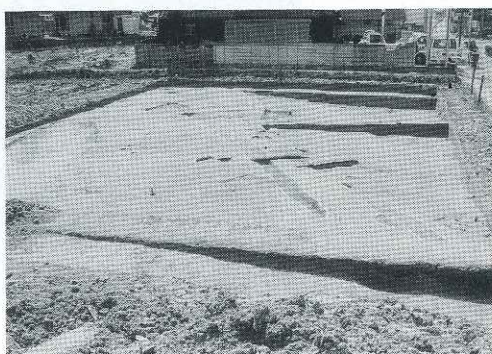
小溝3条及び土壇8基はいずれも奈良時代以降の時期と思われる。

調査地の大半を占める沼沢地は古墳時代中期から奈良時代にかけての遺物を包含している。特に沼沢地肩部底から出土する須恵器は注目に価する。器種は甕、高杯形器台、甕が認められる。高杯形器台は杯部径約33cm、突帯によって4区分される文様帯をもつものとみられる。文様は組紐文、(?)、波状文、波状文で飾される。埴輪片も1点出土している。

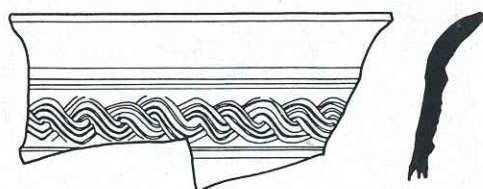


調査地位置図

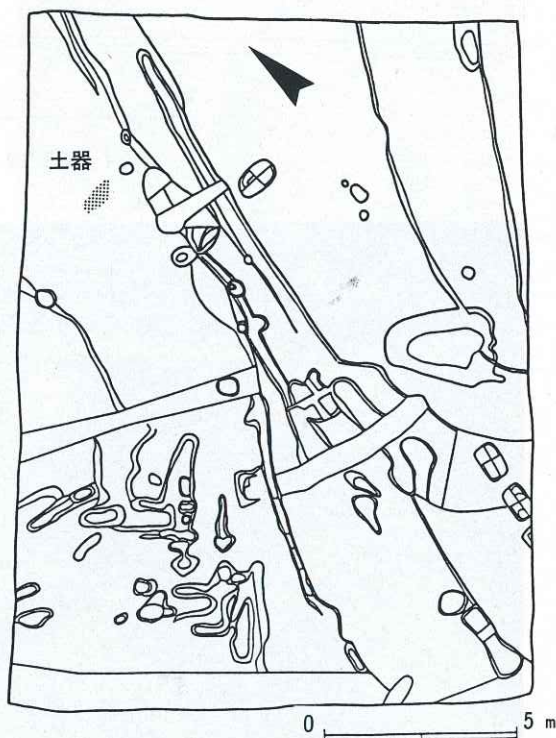
口状のたがと横ハケが認められる。須恵器及び埴輪は5世紀前半の時期に属し、椿山古墳に関連するものと思われる。(清水)



調査地(北から)



器台口縁部 S=1/2



調査地遺構図

⑫ 椿山池ノ浦遺跡

調査地 栗東町安養寺6丁目

調査期間 1991年5月14日～5月24日

調査面積 150m²

本調査地は、県内でも有数の椿山古墳の周濠の北側に隣接する。昨年度の付近の2カ所の調査で古墳時代の落込み、奈良時代の建物跡等の発見があり、当初から椿山古墳に関するなんらかの遺構の発見が期待されていた。結果は、トレンチのほぼ全体にわたる沼沢地状落込みと、その底部から小溝が検出されている。

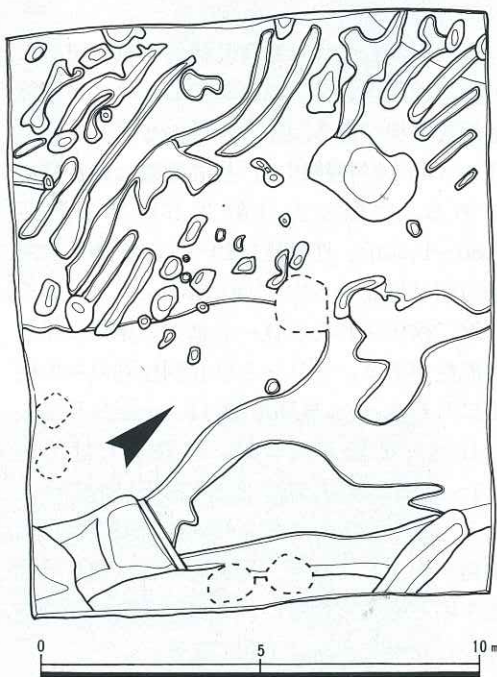
調査地は直前まで家屋が建っており、0.4mの宅地の盛土の下部で旧水田面が現れた。旧水田面からさらに0.4mの深さでは淡灰褐色粘質土が全体を覆っており、この層の下部からトレンチの東側と北隅で地山が検出された。中央部は深さ約0.4mの沼沢地状の落込みとなっている。落込みは、幅12m以上で東から西へ広がると思われ、上層から淡褐味明灰色砂、淡褐色粘質土、淡青灰色砂、褐味灰色粘質砂土が堆積していた。底面はほぼ平坦で、



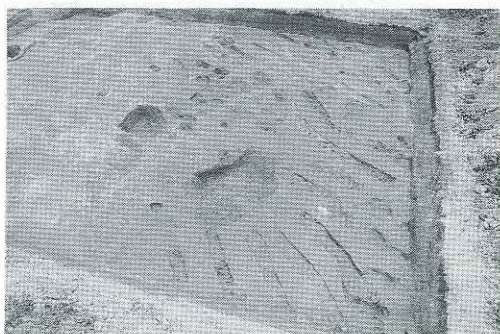
調査地位置図

幅0.2～0.4m、深さ0.05～0.1mの淡灰色粘質土が入る小溝が0.6～0.8mの間隔で多数検出された。この小溝は南北方向に揃っており、田畑等の耕作痕と思われる。

小溝からは13世紀後半に比定される黒色土器片等が出土しており、落込みはこの年代以降に埋没したものと思われる。その他、底面からは、6世紀後半頃の須恵器の蓋、奈良時代の須恵器坏があり、上層堆積土からは、縄目タタキが残る平瓦、底部に回転糸切り痕のある黄緑発色の緑釉碗等、ほとんど破片ではあるが多彩な遺物の出土があった。(平井)



調査地遺構図



トレンチ全景(北より)

⑬ 手原遺跡

調査地 栗東町大字手原 3 丁目929-2、928

調査期間 1990年 2月18日～3月16日

調査面積 140m²

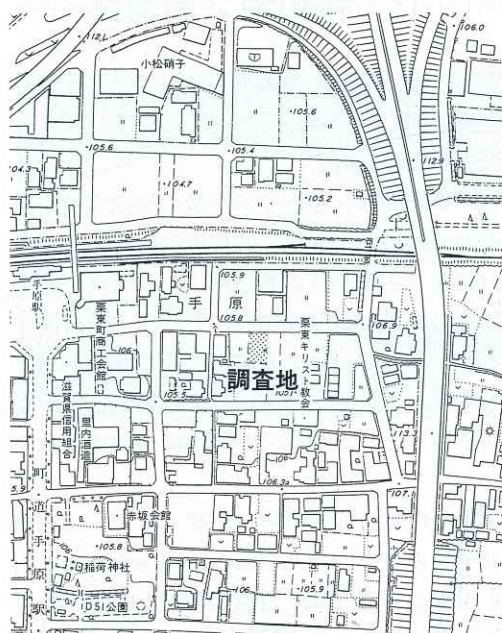
本遺跡はJR草津線手原駅周辺に位置し、古瓦が散布することや、条里地割とは異なるほぼ真南北方向の地割が遺存していることから、従来より古代寺院や官衙跡と想定されている。昭和56年以降に行われてきた調査では、白鳳時代から中世に至る遺構・遺物が検出されている。

今回の調査では、奈良時代～中世の遺構・遺物が検出された。奈良時代のものには掘立柱建物2棟がある。うち1棟(SB-2)は、3×3間の総柱建物で、柱間距離は約2.15mである。柱掘り方は隅丸方形で1辺が0.60～1.60m、柱痕径は20～30cmを測る。主軸方向は磁北から約2°西にふれる。トレンチ北端で検出されたSD-2はこの建物に伴う可能性がある。SB-1は北側柱列のみの検出にとどまった。柱間距離は1.4mとSB-2に比べて間隔がせまい。柱掘り方は1辺0.7～0.8mの隅丸方形で、柱痕径は約20cmである。SB-1、2とも柱穴より須恵器、土師器が出土しており、建物の年代は奈良時代後半頃と考えられるが、2棟の建物が同時に存在したかどうかは不明である。

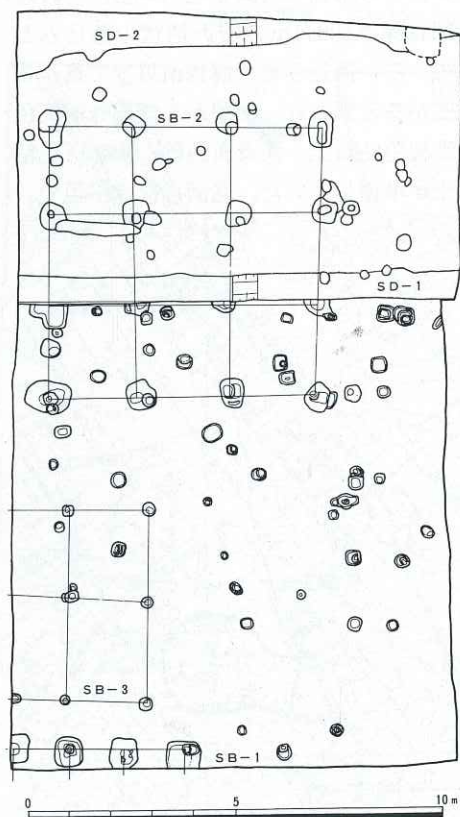
SB-3は2×2間以上で、柱掘り方は径約30cmと小規模である。SB-1、2以降のものと考えられるが、詳しい時期は不明である。

SD-1はSB-2の柱穴を切る溝で、須恵器、土師器、土錘とともに黒色土器が出土しており、中世のものと考えられる。

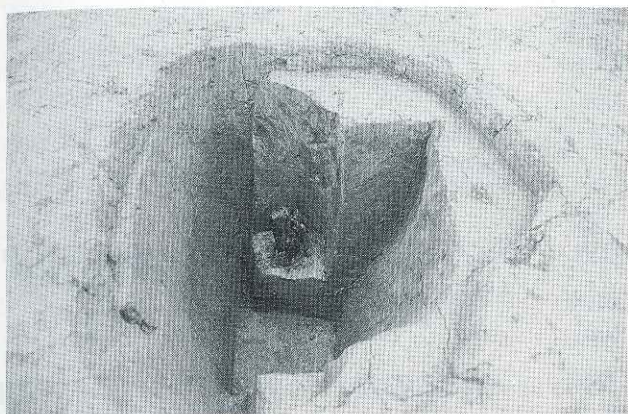
過去の手原遺跡の調査では、規格性の高い総柱建物群が検出されているが、今回の調査でも同様の建物が見つかり、手原一帯における律令制期の総柱建物群の広がり的一端を知り得る資料を得られた。(雨森)



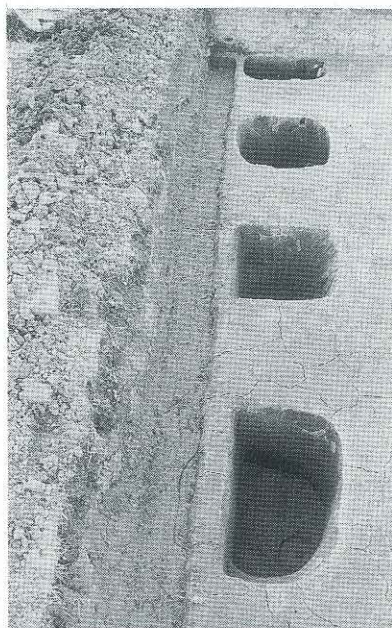
調査地位置図



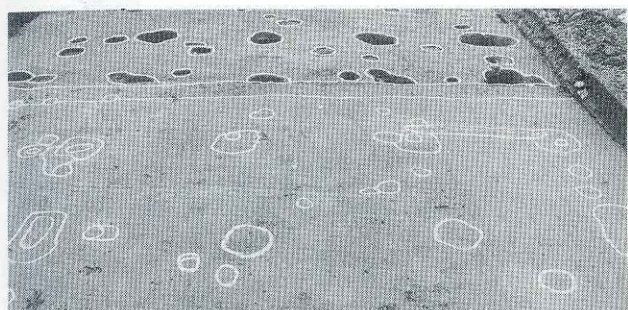
調査地遺構図



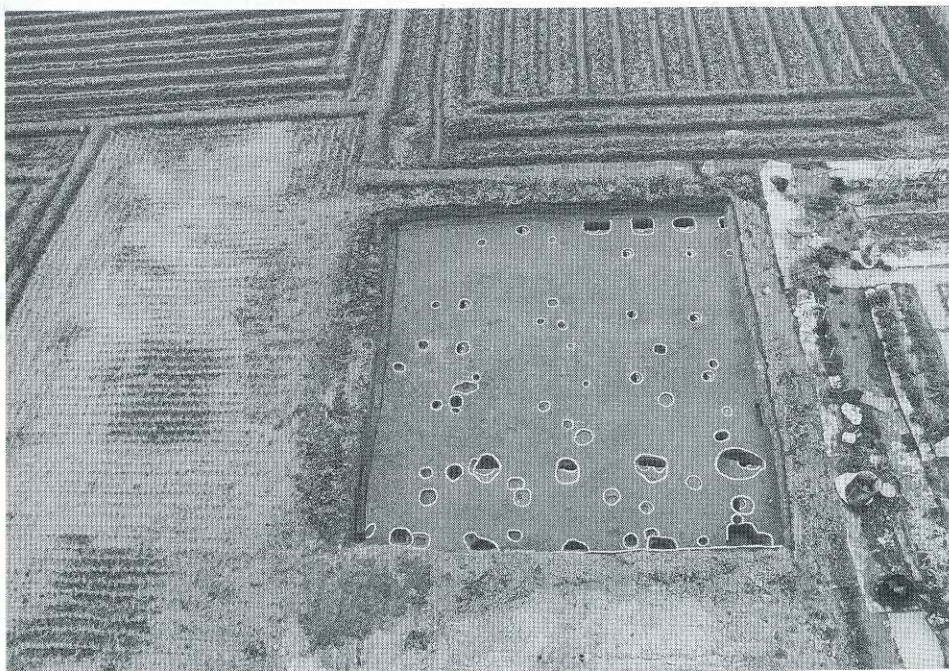
SB-2の柱穴



SB-1 (東から)



SB-2 (北から)



トレンチ全景 (北から)

⑭ 蜂屋遺跡

調査地 栗東町大字蜂屋字ニナアセ597-1

調査期間 1991年1月16日～2月4日

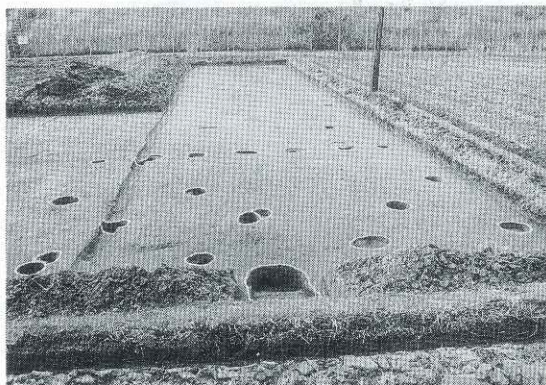
調査面積 300m²

本調査区は蜂屋遺跡の西端に位置し、野尻遺跡、下鉤東遺跡、上鉤遺跡に接している。

調査区東端で掘立柱建物2棟、土壇1基が検出された。建物は3×2間(SB-1)、2×2間(SB-2)のものがあり、方位を変えて建て替えたものであろう。土壇は幅60cmで、長さは調査区域外にのびるため不明、深さは40cmでまっすぐ掘り込まれている。これらの遺構の年代は平安時代後期頃と考えられる。

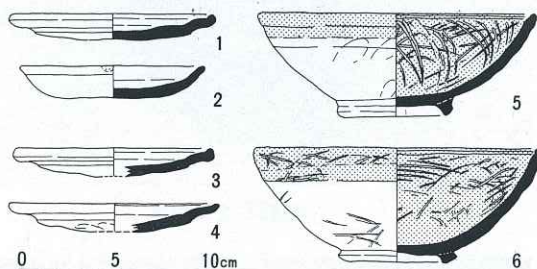


調査地位置図

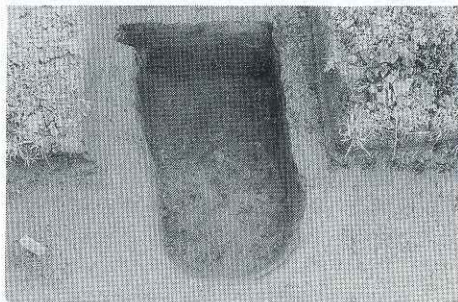


SB-1・2 (南東から)

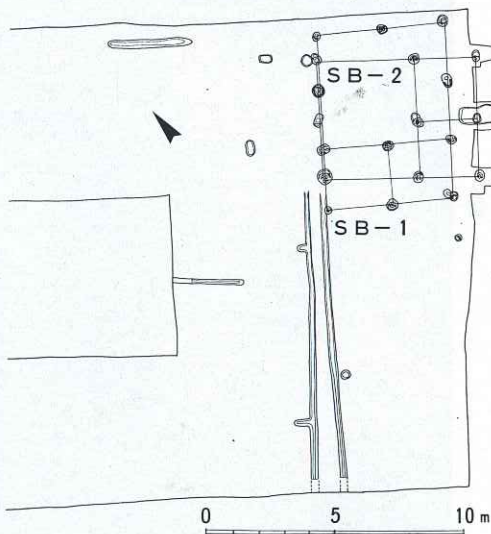
今回の調査では、蜂屋、野尻、下鉤一帯の中世集落の広がりを知り得る資料が得られた。北接した地点(野尻遺跡)で検出された古墳時代の豪族居館と考えられる遺構に関連した遺構・遺物はみつからなかった。(雨森)



出土土器 1. P-10(SB-1)
2. P-13(SB-2) 3, 4. SK-1
5, 6. 包含層



SK-1 (北西から)



⑮ 蜂屋遺跡

調査地 栗東町大字蜂屋字坊之前608他
調査期間 1990年11月6日～1991年1月19日
調査面積 約870m²

今回の調査は、町道蜂屋上鉤線建設工事に伴って実施した発掘調査である。調査対象地面積は約1,600m²である。

調査対象地は、蜂屋遺跡の西辺にあたり、野尻遺跡と西接する。野尻遺跡では、88年度調査において古墳時代の豪族の居館跡を発見している。今回の調査地は、この居館跡より東方約150m程に位置することから、関連遺構の発見が期待された。

調査にあたっては、対象地地形の制約から、北半分にNトレンチを、南半分にSトレンチを設定し調査を行った。以下、その概要を報告することとする。なお、Wトレンチは、Sトレンチのサブトレンチである、遺構は認められなかったことから今回は割愛する。

層序 調査地で認められる基本的な層序は大別すると次の3層である。上層から、層厚0.2m程の現代耕作土層、層厚0.4m程の黄灰色系粘質土層の奈良時代及び中世期の遺物を包含する整地層、そして、南から北へと変化する黄褐色粘質土層、茶褐色粘質土層の堆積土層、灰色砂礫系河川氾濫原の地山層である。今回検出した遺構は、基本的にすべてこれらの地山層で確認した。

遺構 検出した遺構は、奈良時代の流路・土塀、鎌倉時代の溝・土塀などである。以下、ここではトレンチごとの遺構についてのその概要をのべることとする。

(Nトレンチ)

S D01 現水田面より-1.1mの灰色砂礫層の地山層で検出した東西溝。幅12m、東西検出長3.5m、深さ1.5m程を測る。埋土は、大きく2層に分けることができる。上層から、暗灰色系粘土・砂質土・シルト層と、滞水層の灰色系粘土層であり常に水が流れていた状況が窺える。遺物の包含は認められない。な



調査地位置図 (1 : 7,500)

お、SD01北側ではその後の堆積が2時期認められる。埋土は、灰色系の砂質土層及び粘土層である。上層の砂質土層中では、古墳時代の遺物の二次堆積がみられた。

SK02 SD01の埋没後穿たれた土壌。南北2m以上、東西0.6m、深さ0.5m程を測る。最下層の暗灰褐色粘土層で、奈良時代初めの須恵器の坏数点が一括で出土した。

(Sトレンチ)

SD01 現水田面より-0.8mの黄褐色粘質土層の地山層で検出した南北溝。幅1.3m、南北検出長48m、深さ0.3m程を測る。2段溝であり、下段の溝は幅0.25m。埋土は上段部に灰色粘土層が、下段に灰色砂層が堆積する。遺物の多くはこの下層の灰色砂層上面より出土した。

SD02 SD01と同じく地山層の黄褐色粘質土層を穿つ東西溝。SD01より古い。幅3m、東西検出長3.5m、深さ0.8m程を測る。埋土は大きく2層に分かれるが、いずれの土層にも遺物は認められない。

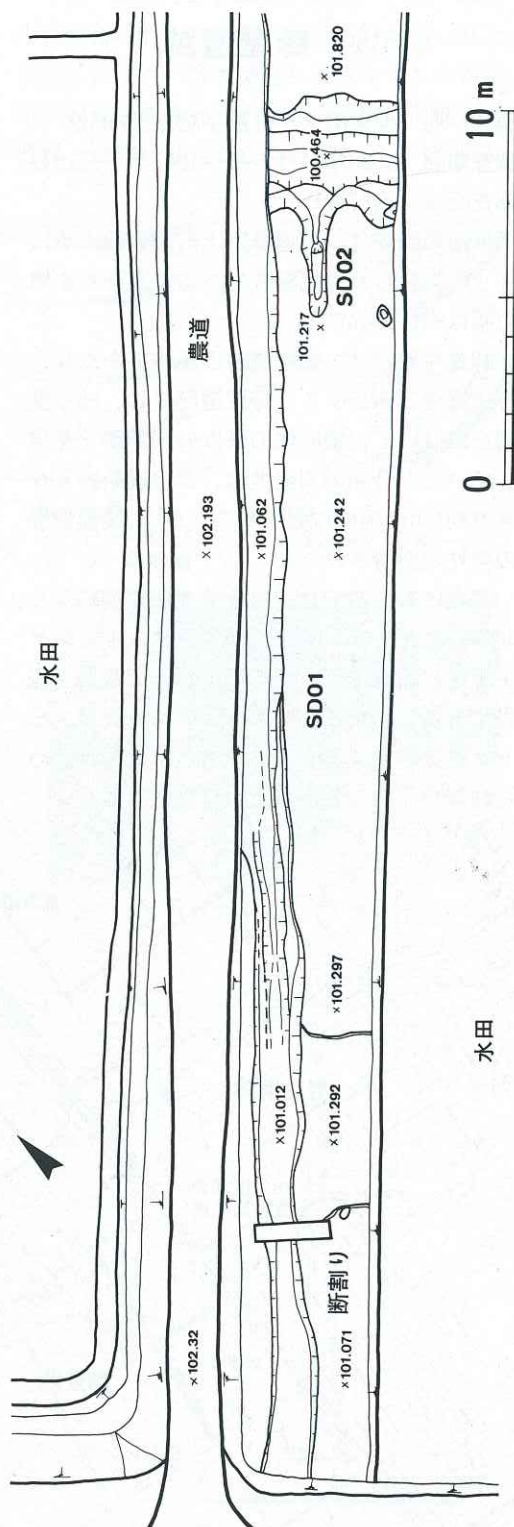
SK04~08 トレンチ中央部で検出した柱穴。径0.5~0.6m、深さ0.25~0.3m程を測る。Wトレンチを設定して関連遺構の検出を図ったが、遺構としてのまとまりは認められない。

遺物 今回の調査で出土した遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などの土器のほか、瓦類と獣骨などがある。

量的には、コンテナで6箱分程がある。そのうち2箱分程がSトレンチSD01出土遺物のものであり、あとの残りのほとんどが遺物包含層出土のものである。遺物包含層のものはそのほとんどが2次堆積のものであるため、その遺存状態は概して悪く細片のことが多い。

時代的には、古墳時代から鎌倉時代にわたるものであるが、その中心となるのは、Nトレンチでは奈良時代のものであり、SトレンチではSD01出土の鎌倉時代のものである。

今回は、その整理作業が未了なため、主要



Sトレンチ遺構図

遺構の遺物のみを図化した。

まとめ 前述の通り今回の調査では、当初予想した豪族の居館跡関連遺構は認められなかったものの、以下の成果を得ることができた。

遺構的には、N・Sトレンチの人為的な東西溝を検出したことである。これらは、狭長なトレンチであるためその全容は窺えないものの、その検出状況から当時の土地区画利用状況の一端を示すと思われるものである。

また遺物的には、今回は全体に2次堆積の包含層出土の遺物が多い中で、SトレンチのSD01より獣骨が、2次焼成を受けた土師器皿と焼木片と一括して出土していることや、遺物包含層からの出土であるが、鉄鉢型の須恵器などの一般集落ではあまりみられない遺物がみられることも注目される。

当蜂屋周辺は、野尻遺跡の豪族の居館跡や蜂屋寺などその具体的な内容の不明な遺跡が集中する地域である。今後周辺地域の綿密な調査により、当地域周辺の様相が一層明らかになることに期待したい。
(猿向)

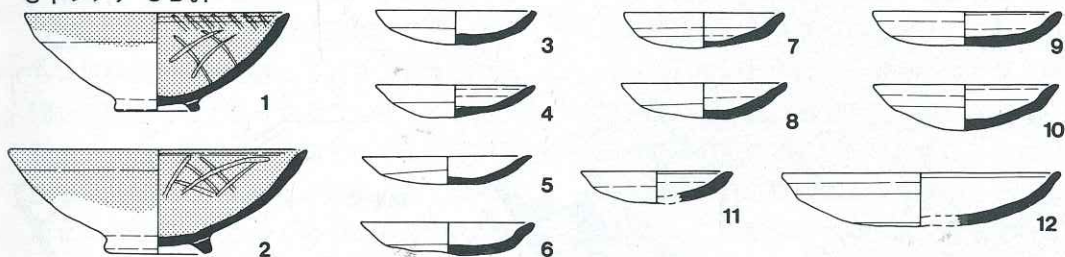


Sトレンチ SD01遺物出土状況

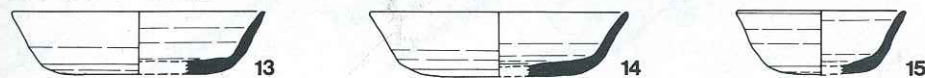


Sトレンチ SD01出土軒瓦

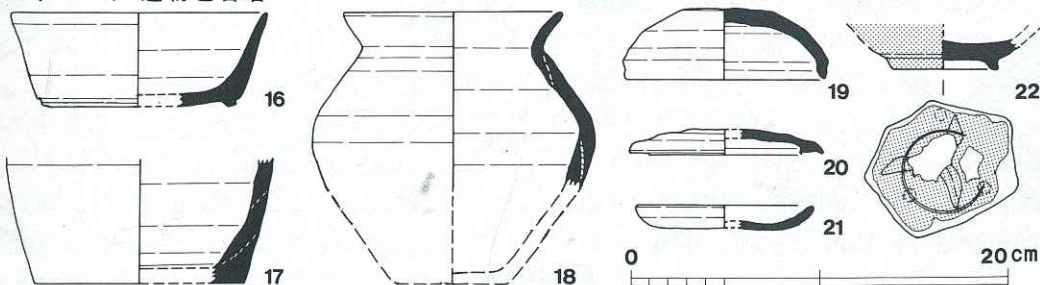
Sトレンチ SD01



Nトレンチ SK02



Nトレンチ 遺物包含層



出土土器実測図

⑬ 野尻遺跡

調査地 栗東町大字綾字黒狭間138他

調査期間 1990年4月1日～1991年3月31日

調査面積 12,900m²

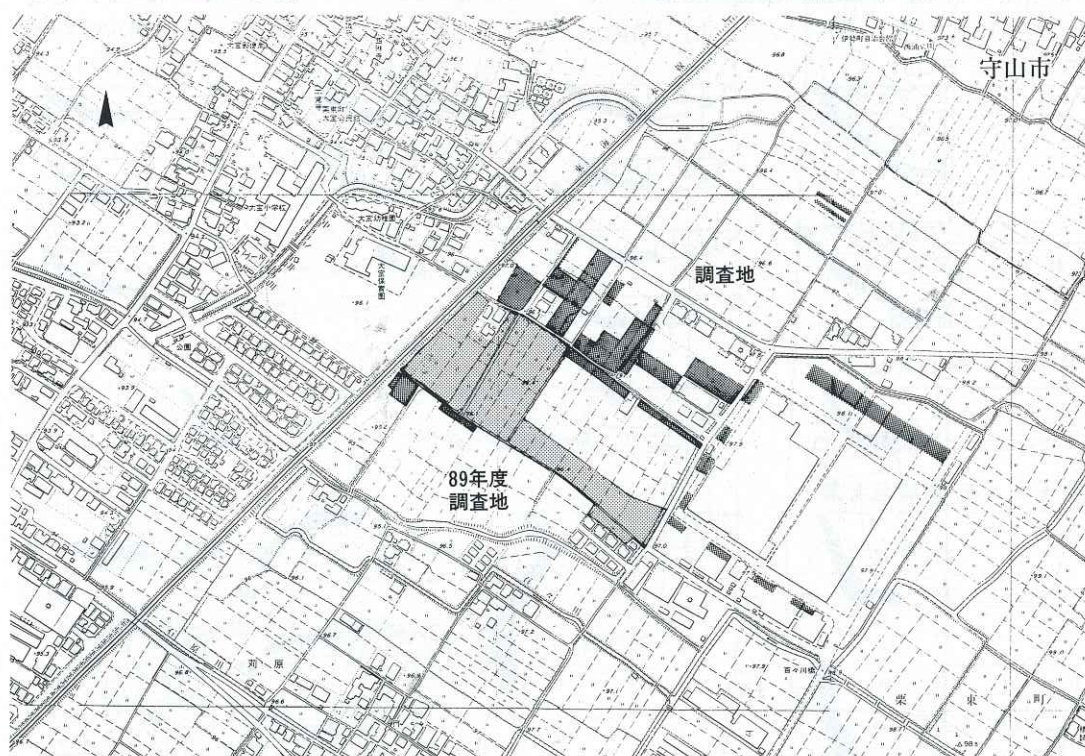
野尻遺跡は、標高1,200m程の鈴鹿山系から源を発し、琵琶湖へ西流する野洲川が形成した標高100m程を測る扇状地の扇端と氾濫原との境に位置する。過去の調査からは、縄文時代後期から近世に至る遺構・遺物を確認しているが、その中心は弥生時代後期から古墳時代であることが判明している。また、88年度の調査では一辺約50m四方の方形溝で区画された古墳時代の居館跡を発見しており、当時の古代豪族を知るうえで重要な知見を得た。今回の調査は、J R東海道本線栗東駅前土地区画整理事業の第2期工事に伴う発掘調査である。調査対象面積は、昨年度調査地の北接部分の約23,500m²である。

調査にあたっては、対象地に合わせ1～16のトレンチを設定した。また、対象地形の制約からトレンチによっては、それぞれ東西南北に分け、2-Eトレンチ・2-Wトレンチ・2-Nトレンチとした。

以下、その概要を報告することとするが、現在、整理作業が未了であることから、今回は略報とし、その詳細については、また期を改め報告することとする。

層序 調査地で認められる基本的な層序は、大別すると次の3層である。上層から、層厚20cm程の現代耕作土層、奈良時代及び中世期の遺物を包含する層厚20cm程の黄灰色系粘質土の盛土層、そして、比較的安定した黄褐色粘質土層・弥生時代末から古墳時代の遺物を包含する茶褐色粘質土系沼沢地堆積土層・灰色系粘土と砂礫の河川氾濫原の地山層である。

遺構の検出にあたっては、各遺構面の遺存状況に合わせ行ったが、そのほとんどは基本的には前述の各地山層上面で検出した。



調査位置図

遺構 検出した遺構は、弥生時代後期の土壌、古墳時代後期及び奈良時代初めの土壌・溝、中世期の掘立柱建物・耕作痕の他、近世期の井戸状遺構・暗渠排水路・建物などである。ここでは、主なトレンチの主要遺構についてのその概要をのべることとする。

(1 トレンチ)

本トレンチは、対象地形の制約からA～E区に分けて調査を行った。全区とも現代耕作土層除去後直ちに地山面において、近世・近代の井戸状遺構・土壌・暗渠排水路及び、中世期の耕作痕を検出した。この耕作痕は、後世の削平が地山層まで及ばなかったトレンチ南端のA・B区のみで確認した。

本調査地は、基本的に後世の削平が地山層以下さらに及ぶ場合、そのほとんどが近世期以降の削平を受けており、発見される遺構は近世期以降のものに限られる。つまり、調査前の現況地形から、検出される遺構の内容はある程度窺うことができるといえる。

また、近世期の井戸状遺構は、昨年度総数48基検出したものと同様のものである。今回も調査地内において総数45基検出した。これらは規格性を持ち位置しており、基本的には同一の形態をなすようである。径5～6m、深さ2m程の本体に、側溝と径2m程の円形土壌が付属する。溝同士が連結するものの、南北方向の溝に取りつくものもある。状況的には、農業用の灌漑の施設と考えられるものの、管見のかぎりでは類例は知らない。遺構は依然トレンチ外に拡がるようである。

(2・6 トレンチ)

6 トレンチは2 トレンチと西接する。ここではあわせて報告することとする。

両トレンチでは、近世期の掘立柱建物・井戸状遺構・土壌・暗渠排水路・溝、古墳時代の土壌などを検出した。掘立柱建物は、5間×1間以上の南北棟建物である。近世期の整地土層で検出した。これ以外のものは、すべて現代耕作土層直下の地山層で検出した。

(4 トレンチ)

4 トレンチでは、現代耕作土層直下の黄茶灰色粘質シルトの地山面において安定した遺構面を確認した。検出した遺構には、鎌倉時代の掘立柱建物・土壌・柱穴のほか、時期不明の土壌・柱穴等がある。

S B01 3間以上×3間以上の東西棟の総柱建物である。柱間距離は2.4mと2.7mを測る。柱穴掘り方は、1辺0.3mの隅丸方形。柱根は径0.15mを測る。

S B02 S B01の西側で検出した3間×2間以上の南北棟の総柱建物である。柱間距離は、梁間方向で2.1mと2.7m、桁行方向で2.1mと3.9mを使い分けている。

S B01・02は、現在の土地区画方向に一致するものの、柱穴の埋土は異なることから、2棟の併存は考えられない。

S B03・04 ほぼ正方位に位置する掘立柱建物である。03は1間×2間以上の南北棟建物、04は1間×3間以上の東西棟建物。梁間方向で03より0.6m程広い同形態の建物である。

以上の遺構のほか、時期不明の土壌・柱穴を多数検出している。これらは、遺物の出土はみられないものの、土層層序および、埋土の分析から、概ね弥生時代末期から古墳時代初めの頃のものと思われる。また、トレンチの北部において噴砂による地震跡を2箇所確認した。この噴砂については、通産省地質調査所 寒川 旭氏の指導を得て調査を行うことができた。

(その他のトレンチ)

その他の各トレンチでは、中世期の整地層上面で当時の耕作痕を認めたほか、前述の通り、基本的には現代耕作土層直下の地山層において、近世期以降の井戸状遺構・暗渠排水路・土壌などを検出したにとどまる。

8 トレンチで検出した中世期の耕作痕は、中・近世遺物包含層の黄灰色粘性土の整地土層下で検出した。その条の方向性や規模から2時期を認めることができた。

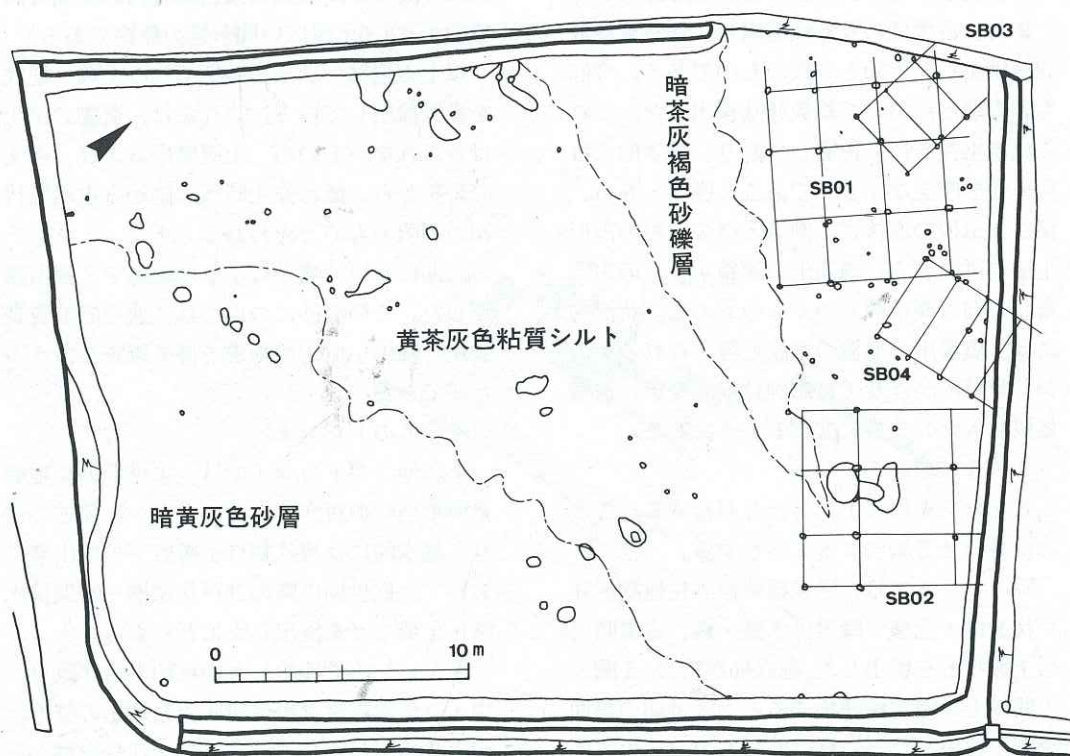
遺物 今回の調査で出土した遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・近世陶磁器などの土器のほか、少量の瓦類・銭貨・鉄製品などがある。量的には、コンテナで5箱分程がある。そのうち、2箱分程が遺構出土遺物であり、あとの残りは中世・近世期の遺物包含層出土のものである。これらの遺物包含層のものはそのほとんどが二次堆積のものであるため、その遺存状態は概して悪く細片のものが多い。

時期的には、弥生時代末期から近代にわたるものであるが、その中心となるのは、遺構出土遺物では弥生時代末から古墳時代初めと鎌倉時代のものであり、遺物包含層出土遺物では、平安時代末から鎌倉時代のもので近世期のものである。これら遺物については、現在、整理作業が未了であるため、今回はその詳細については割愛する。

まとめ 以上、調査の概略を述べた。最後に若干の整理を行いおわりとしたい。

(地震跡) 野尻遺跡88年度調査において数箇所の小規模な断層として11世紀以降の地震跡を検出している。今回の噴砂は、遺構との切り合い関係が認められないことから時期は限定はできないものの、前回検出したこの地震跡と有機的関係にあることには間違いないだろう。栗東町においては、噴砂は初めての検出である。今後、多くの資料が増えることに期待したい。

(遺跡の性格) 当調査地は、その地形的制約のみならず、近世期の井戸状遺構群によってそれ以前の時期の多くは、概ね攪乱を受けその全体を窺えるものは少ない。しかし、そのうち少なからずは、弥生時代及び鎌倉時代のものに集中するようである。ただ、その存在は希薄である。今後の広範囲な調査にその全体像が明瞭となることに期待したい。(猿向)



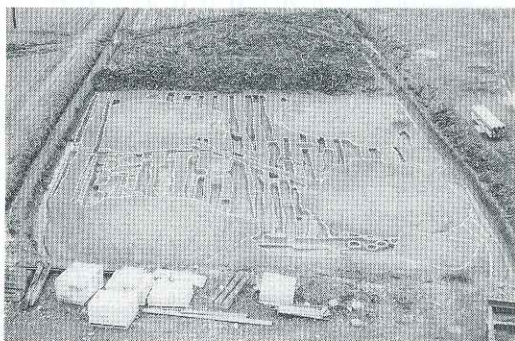
4 トレンチ遺構図



4 レンチ SB01検出状況



4 トレンチ 噴砂調査風景



11-E トレンチ 遺構完掘状況



11-W トレンチ 遺物出土状況



調査地全景 (北が上)

⑪ 野尻遺跡

調査地 栗東町大字野尻字樋ヶ上852、853

調査期間 1991年8月22日～11月13日

調査面積 1,627㎡

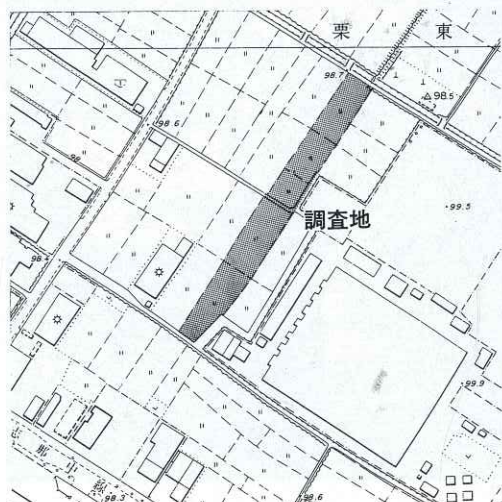
本調査は栗東町の計画する道路改良工事に伴うものである。

周辺の既調査では、弥生時代を中心とした遺跡が多く確認されたが、今回の調査区内で最も古いものは東西を横断する大溝で、古墳時代のものであると考えられる。溝の底の部分からは、特に明確な一個体を成すものはないが、多数の須恵器片、質のもろいものだがヒスイ製の小勾玉（長さ1.5cm）、磨製石斧片（残存長片3cm）が発見された。この溝自体は人為的に造られたものとは思えずまた、関連が指摘できるような遺構は調査区内には見られず、区外に拡がる可能性がある。

南から北に向かってのびる十数本の細い溝は、畑作の耕作痕である。大戦以前に、牛馬に頼らず人の手でここを耕していた婦人がおられたという話があり、その痕であろう。

調査区北・南端から馬の歯・骨が点在して出土した。遺構に伴うものではなく性格は不明だが、若干の量であった。

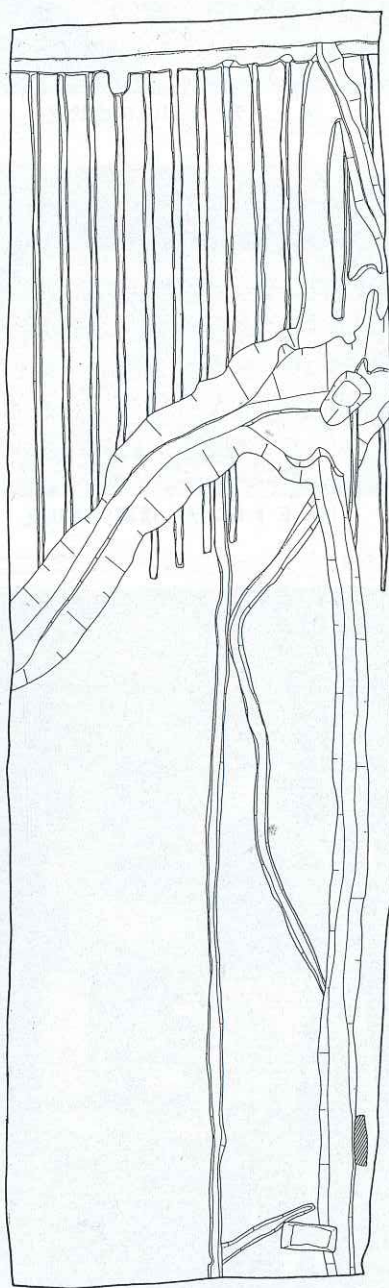
本遺跡で特筆すべきは中世の木櫃墓である。



調査地位置図

これは調査区の北西（図中の斜線部分）から検出されたもので、長さ2m、幅0.5m、高野槨（推定）材、厚さ4cmのものを使用し、副葬品に土師小皿14枚を持つ。遺物から12世紀後半のものと思われる。

側板は掘り方いっばいに埋め込まれ、中に



調査地遺構図

は2枚の底板を敷き、その上にむしろの様な植物繊維に包まれた遺体が置かれていた。

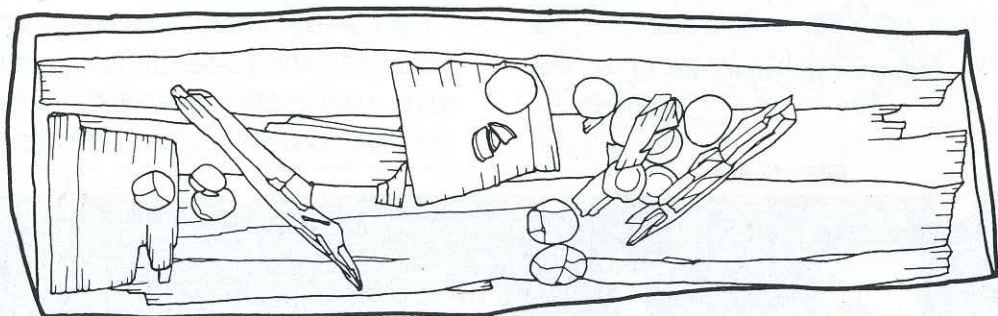
骨はほとんど残っていなかったが、わずかに頭蓋骨と膝骸骨の部分が、半ば溶けた状態ながら判別でき、遺体は南西方向に頭を向けて埋葬されていたとわかる。天井板は1枚でその上に更に2枚以上の小板を渡して並べ、上に土師皿がのせられていた。

副葬品は全て棺の外に置かれていたことに

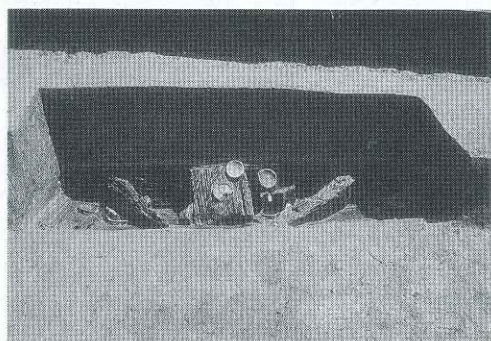
なる。小皿のうち2枚にはスス跡があり、灯明皿として用いられたものである。しかしその灯が葬送儀礼に伴うものかは不明である。

中世には村落の発達とともに、墓地の拡大・変化がみられ、血縁・同族などによる一定区画への埋葬などが多く報告されてくる。

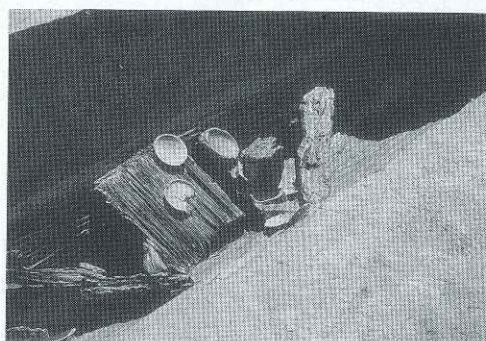
今回の単独の木櫃墓というのは、遺存状態もよく稀少な例といえよう。(橋本)



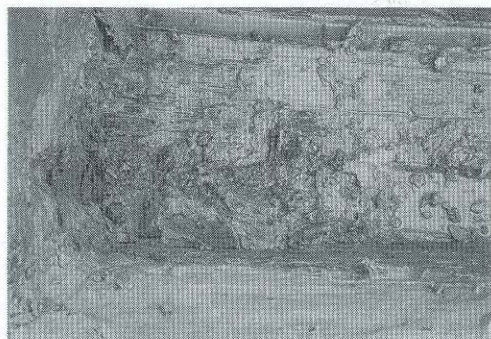
木櫃墓略図(縮尺は不同)



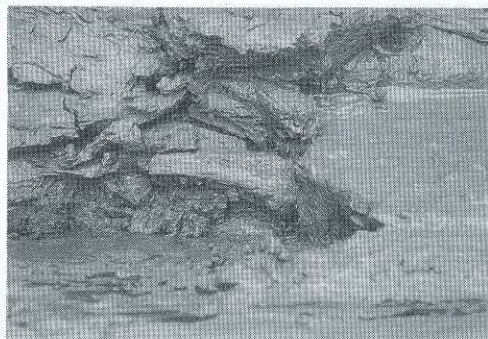
木櫃墓全形



木櫃墓中央部分



溶解した頭蓋骨



膝関節の部分

⑱ 縄 遺 跡

調 査 地 栗東町縄640他

調査期間 1990年4月13日～1991年3月31日

調査面積 2,769m²



調査地位置図

本調査では周溝状遺構、掘立柱建物群、柵、井戸、溝、土壇、ピットを多数検出することができた。遺構は時期区分すれば4期に大別される。

第Ⅰ期（古墳時代以前）

周溝状の遺構。平面形は方形を呈するものとみられる。2基あり、コーナー部に陸橋部をのこすものがある。周溝状遺構に関する遺構は認められない。

第Ⅱ期（10世紀末葉頃）

土壇1基(B区土壇1)。浅い皿形の底を呈する土坑で、黒色土器碗を出土する。

第Ⅲ期（11世紀末葉～13世紀後半頃）

掘立柱建物群の全てがこの第Ⅲ期に属する。



調査地全景

第Ⅲ期は遺構の軸方位や重複関係から4小期に分けられる。溝1～3によって区画される2小期、溝4によって区画される2小期が認められる。

a・b期(12世紀前半～13世紀前半)

3区画の屋敷地が認められ、併せて10棟の掘立柱建物、井戸2基、柵列が存在する。

c・d期(13世紀前半～13世紀後半)

2区画以上の屋敷地が認められる。c・d期併せて9棟の掘立柱建物、井戸1基、土壇、柵2列が存在する。

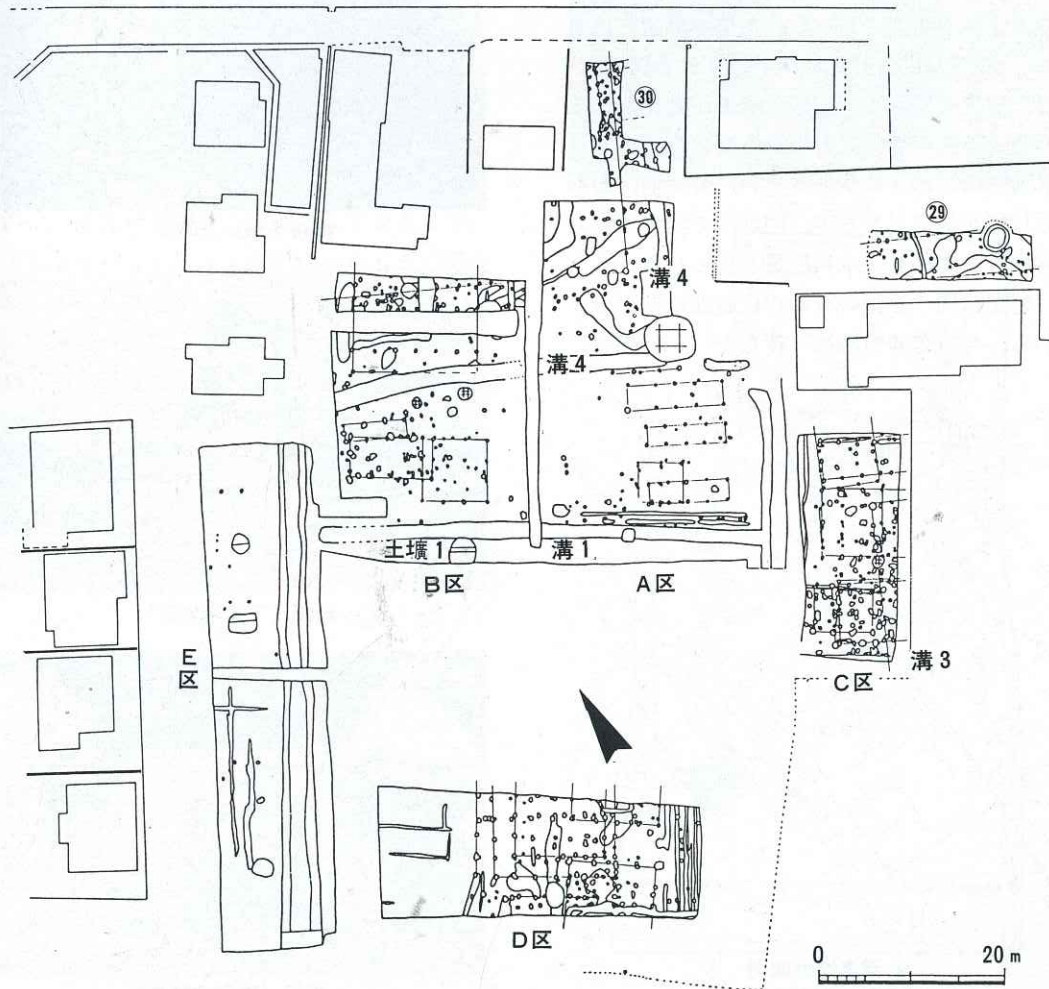
第Ⅳ期(15世紀頃)

幅約3mを測る堀状の遺構。

この他径5mを測る掘り方を有する井戸状

の遺構1基が認められたが、近世以降の時期と思われる。

本調査のまとめとして、最後にⅢ期とした遺構について少し説明を加えておく。とりわけc期(13世紀前半～半ば)の時期と考える遺構は、溝1を埋め平地化した後に屋敷地を再編している。2区画(以上)の内1区画は溝と柵を巡らすものであり、他方は大型の建物、中型の建物、床を持たない建物、1間×4間程度の狭長な建物が配され则认为られる。これらを住む人々の階層差や用途区分と見ることも可能かと思われ、中世集落を知る上で興味深い。(清水)



調査地遺構図

⑬ 下鈎遺跡

調査地 栗東町大字下鈎字舟場831、832-1

調査期間 1990年6月1日～6月30日

調査面積 479m²

本調査は貸事務所建設に伴うもので、付近遺跡は弥生～古墳時代のものが多い。

現況は水田に盛土した駐車場で、遺構面は水田下0.2mで耕作土直下であった。

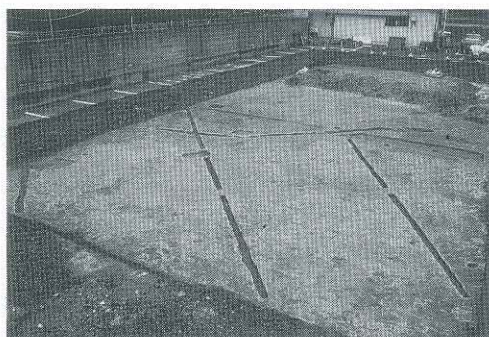
顕著な遺構としては、ほぼ東西正方向に流れる暗渠排水が3本検出された。

暗渠は木の皮を上下2枚に重ねた形をしており、中からは須恵器小片が出土したが、時期確定は不可能であった。本遺跡周辺では他に、下鈎甲地区・野尻地区（いずれも隣接区）で、樹皮を用いた、同様の暗渠が発見されている。下鈎甲地区のものは縦横の交差があり本遺跡のものよりやや大きい。野尻地区のものは幅が倍ほどあるが、同地区で検出された耕作痕と関係した水利施設と見られる。

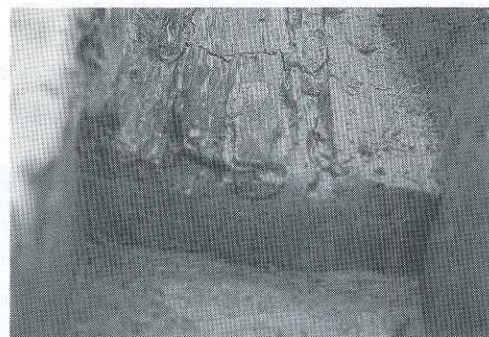
暗渠は同一企画のものが広範囲に広がっている、今後の資料増加を待ちたい。（橋本）



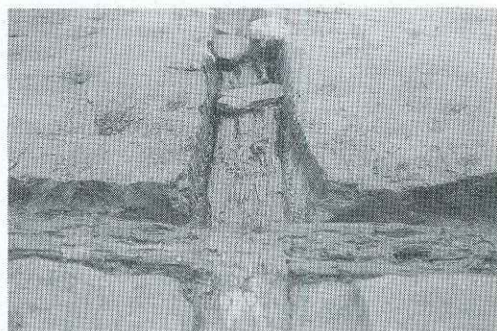
調査地位置図



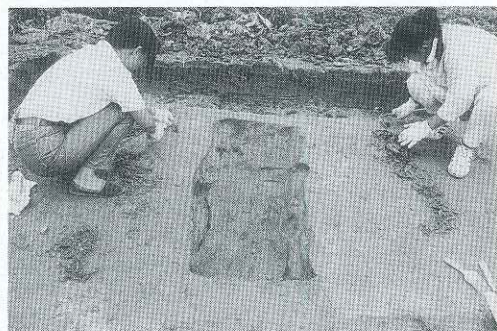
下鈎遺跡全景



樹皮を用いた暗渠



暗渠（下鈎甲地区）



暗渠（野尻地区）

②0 下鉤遺跡

調査地 栗東町大字下鉤字西浦689-1

調査期間 1990年7月11日～8月11日

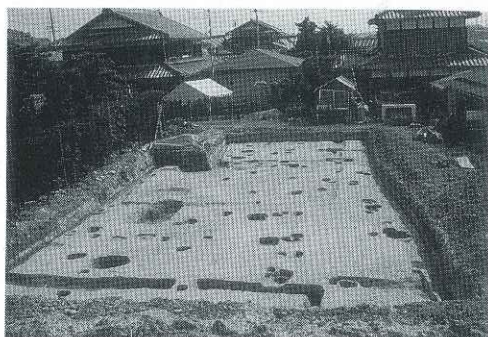
調査面積 232m²

料理屋店舗増設に伴い、現在ある店舗裏地の調査を行った。現況は畑となっていたが、周囲の建設工事時の影響で遺構面直上までと遺構面自体にも多少の攪乱が見られた。

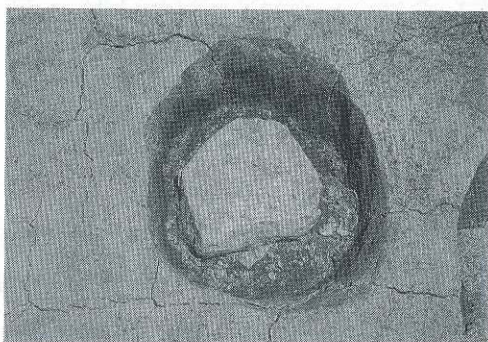
検出されたのは区画溝といくつかの柱穴でそのひとつには根石が確認された。その大きさから推して、直径10～13cmほどの柱をもつ建物が想定できるが、前後の柱穴の並びはまちまちで、この建物の規模・方向は不明である。

応仁の乱以後の動乱続く室町時代、その長享元年に、將軍足利義尚の陣所として「鉤」は歴史に登場する。近江六角氏討伐を名目に鉤への滞在は將軍がこの地でなくなるまで、1年3ヶ月にわたり、古記録からもその威容がうかがえる施設であったと思われる。

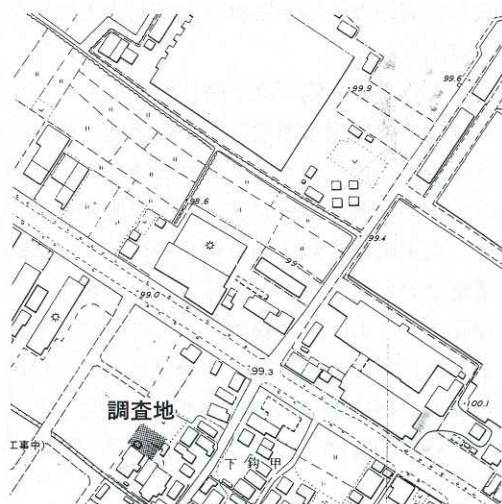
本遺跡が直接この「鉤の陣」と関わっていたという確証はないが、中世の一時期特異なにぎわいを見せていた地であることは念頭におかねばならないだろう。(橋本)



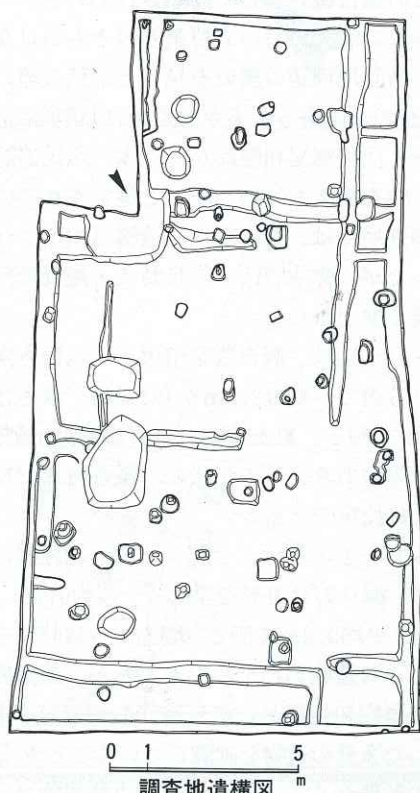
下鉤遺跡全景



根石



調査地位置図



②1 下鉤東遺跡

調査地 栗東町大字下鉤字高畦・角屋

調査期間 1990年4月23日～5月26日

調査面積 352m²



調査地位置図

下鉤東遺跡は、古墳時代から室町時代にかけての複合遺跡として周知されている。

過去の調査において特筆すべきものはないが、当該地周辺の歴史を見ると、調査地の東方約200mにある永正寺付近は、1486年に室町幕府9代将軍足利義尚が佐々木六角氏追討のため陣を構えた「鉤の陣」と推定されている。当調査地では、室町時代の遺構は検出されなかったが、弥生時代・奈良時代・鎌倉時代の遺構を検出した。

SD-1は、調査区を南東から北西方向に流れる溝で、幅は2.5mから1.0m、深さは約0.6mを測る。出土遺物には青磁椀、土師器、獣骨等があり、その年代は、鎌倉時代（13世紀）に比定できる。

SB-1・2は、2間×2間の総柱式の建物で、掘り方は方形を呈し、一辺約0.7m、柱痕は、平均0.2mを測る。埋土からは時期を決定しうる遺物の出土はなかったが、遺構面上層の遺物包含層から奈良時代の須恵器を中心とした多量の遺物を確認していることや、掘り方の形態から、この2棟の掘立柱建物は、奈

良時代の倉庫跡と考えられる。

また、両建物は、方位を異にするが、同時期もしくはごく近い時期に存在したものと思われる。

SD-2は、調査区の北東—南西方向にのびる大溝で、その規模は、幅3m、深さ1.5m

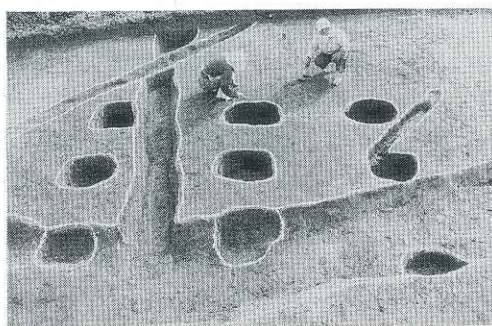


調査風景

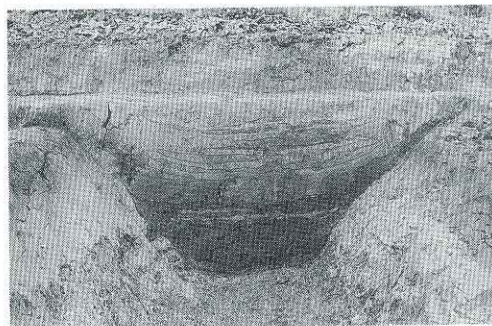
を測り、断面形態は逆台形を呈する。堆積土は粘質土層と砂層からなり、最下層にはスクモが少量混ざる。また、黄色粘土と茶褐色粘土がブロック状に入る土層が溝の肩部に平行して残存していた。これは、溝を掘削した時に出土した排出土と思われるが、これが盛土として土塁のような機能を有していたかは不明である。

出土遺物は、この排出土中から弥生時代後期の甕が一個体破砕された状態で出土した。また、溝の埋土中からは用途不明の木製品が一点出土した。

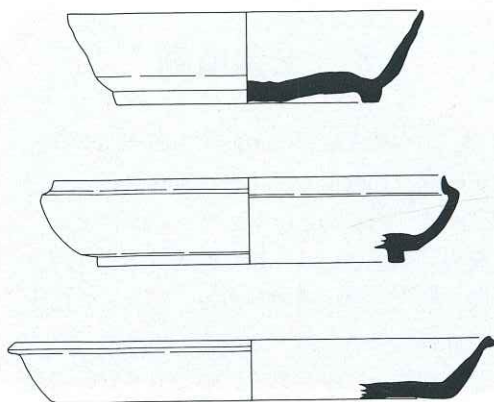
さて、この大溝が弥生時代後期のものとなれば、その規模と断面形態から集落を囲むような環濠の可能性も考えられ興味深い。弥生時代後期の環濠集落は、守山市の服部遺跡の他、栗東町域では、当遺跡の西に接する下鉤遺跡において、幅3m、深さ2mを測る溝が確認されており、環濠集落の存在が想定されている。下鉤東遺跡で今回発見された大規模な溝も、周辺地域の調査が進むことによりその性格も明らかになるであろう。（佐伯）



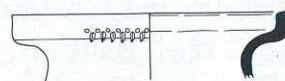
SB-1



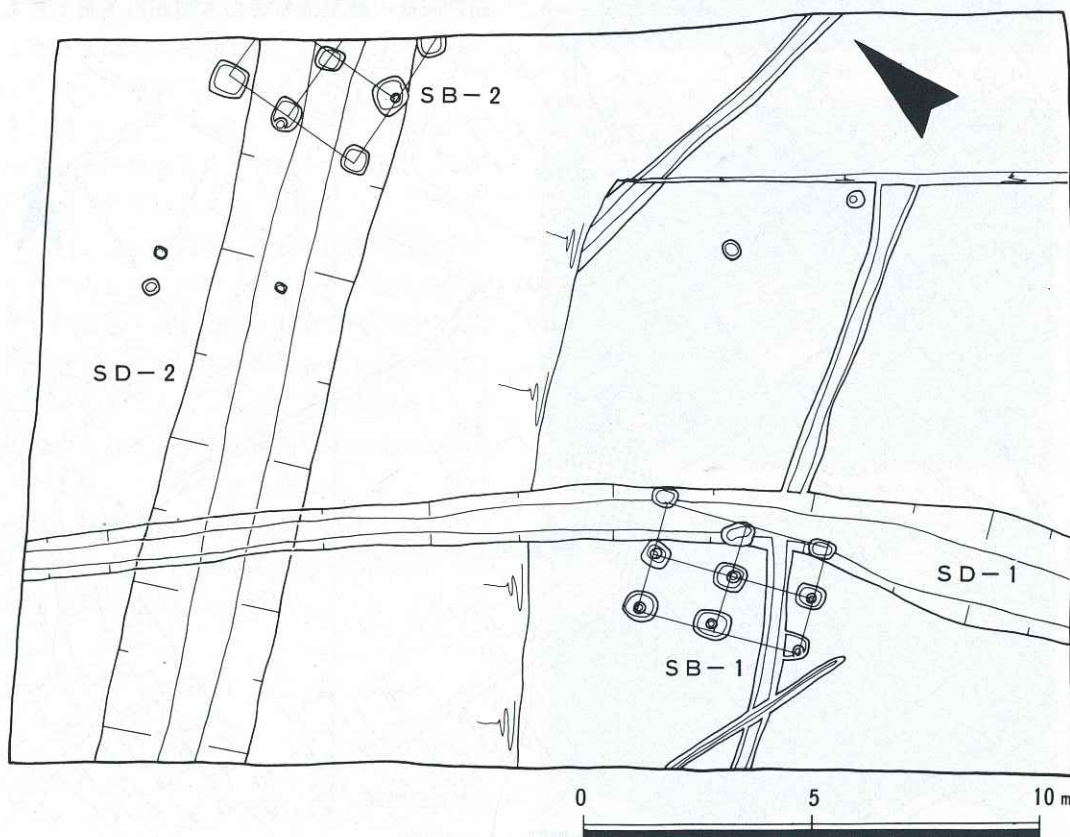
SD-2 土層断面



▲包含層出土土器 S = $\frac{1}{3}$



▲SD-2 肩部出土土器 S = $\frac{1}{3}$



調査地遺構図

② 上鉤遺跡

調査地 栗東町大字上鉤字中田夫233番地

調査期間 1991年1月4日～3月8日

調査面積 約560㎡

検出した遺構には、掘立柱建物跡、井戸、土壇、柱穴、溝状遺構がある。これらの出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・陶器・磁器がある。中でも平安時代後期から室町時代に比定できる遺物がその主体を占め、中世集落跡の一端を窺うことができたといえよう。

土層の堆積状況は、基本的に現耕作土・床土・地山となる。調査区北半部では、地山の攪乱が著しい。地山は、Ⅰ・茶褐色粘質土層、Ⅱ・橙色砂質土、Ⅲ・礫層の三層まで確認した。Ⅱ・Ⅲ層はⅠ層にブロック状に入っており、旧地形に起伏があることを推測させる。

周辺地の既往調査から旧河川跡、あるいはかなりの時代を遡る包含層である可能性も高いが、今回、その確認はできなかった。ここでは、仮に地山として報告しておきたい。

前述の遺構に見られる土の色には、大きく分けて灰色砂質土・橙色砂質土・黄灰茶砂質土・黒色粘質土がある。遺構の時期差は、その切り合いから黒色粘質土のものと他のものとに分けられ、前者が古い。しかしながら、出土遺物からは、時代の大きな隔たりは見られない。また、黒色遺構の平面プランは、不透明なものが多数あり、検出作業に際して困難を極めた。

検出した遺構には、掘立柱建物跡1棟、井戸2基、土壇、溝状遺構が多数ある。

土器には、前述の器種があり、その器形には甕形土器・坏身・坏蓋・皿・碗等が見られる。特に黒色土器の碗が多量である。他に籠、曲物底板・建築部材等の木製品も多量である。



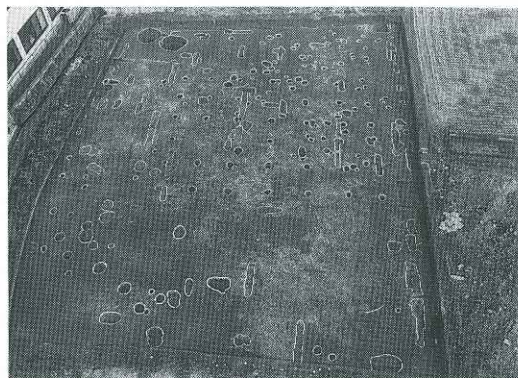
調査地位置図 (1 : 2500)

掘立柱建物跡は、一部柱が欠けるが、5間×6間で大規模である。1間は約2mある。柱穴は、円形で、検出時に30cm前後、また、その深さは、検出面より、50cm前後のものが多い。

井戸は、隣接して2基発見された。SE-1、SE-2とも、検出時の平面形は円形、その規模は、2m前後である。また、基底面までの深さは約2mある。両者とも曲物の木枠がしっかりと残存していた。各々の埋土については、SE-1は、ほぼ底部まで、砂利の二次堆積層で占められ、短期間の内に埋没した可能性が高い。対して、SE-2は、断続的な埋没状況がその土層堆積状況から窺える。後者は、黒色土器碗の完形品等が多数出土し、配置された形での出土状況を示していた。また、籠等の木製品も多く見られた。概して出土遺物が多い。前者については、底部より建築部材等が若干で、出土土器も少ない。また、土器の完形度という観点からもSE-1に比して極端に少なかった。なお、SE-1二段、SE-2三段の木枠をもつが、10~15cm前後の円礫をまわりに敷きつけてしっかりと固定されていた。

このように、顕著な遺構は掘立柱建物跡と井戸であるが、大半占めるものは黒色柱穴である。磁北・またはそれに直交する形での配列が見られるが、建物等構成することはできない。このことは、掘立柱建物等構成するものではあろうが、黒色遺構自体の検出の困難さが影響している可能性が高い。また、出土位置は特定できなかったが、弥生土器が出土しており、当期の遺構あるいは包含層の存在が考えられる。

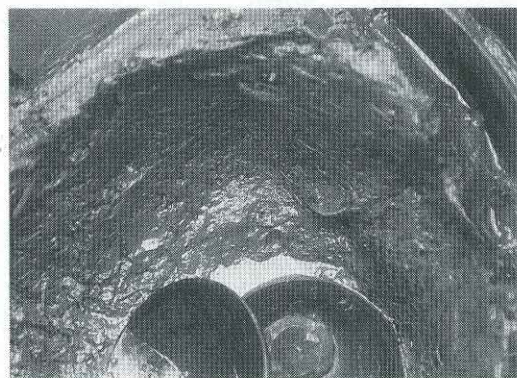
(木村)



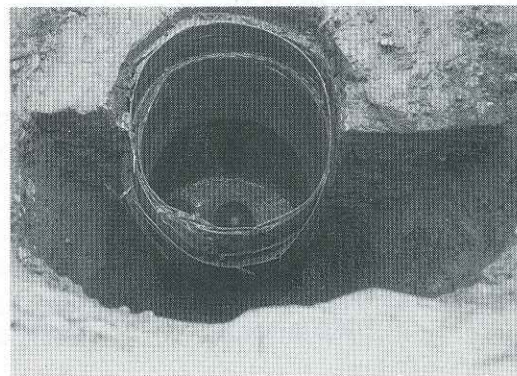
遺構完掘(南から)



出土遺物(南から)



SE-2 出土遺物(北西から)



SE-2 完掘(西から)

②3 中沢遺跡

調査地 栗東町大字中沢字引切172他

調査期間 1990年3月6日～6月13日

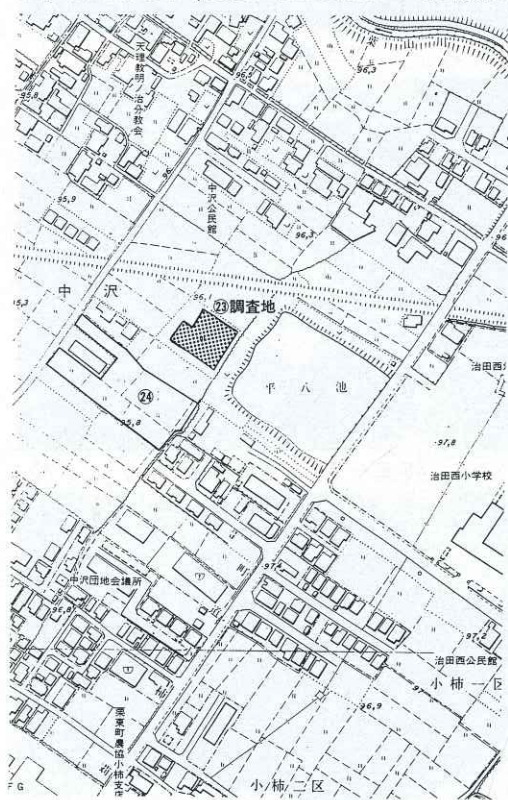
調査面積 1,200m²

中沢遺跡は葉山川中流域左岸に位置し、弥生時代中期から古墳時代を中心とする遺跡として知られている。今回の調査でも弥生時代の河道、古墳時代の墳墓、掘立柱建物、溝等が検出された。

遺構検出面は全体的にほぼ平坦地であるが、SX-03の南西部は深さ0.5mの低地になっている。この低地の上面は褐色味のある灰色土が厚く堆積し、SX-03の周溝の上層まで広がる。

墳墓

SX-01は、東西9.5m南北9mの周溝(区画)墓である。幅1.2～1.5m深さ平均0.5m、

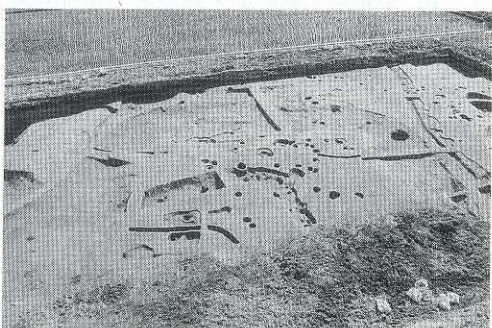


調査地位置図

断面椀形の溝を巡らす。溝の堆積土層は大きく2時期に分けられ、上層の黒褐色粘質土層は、下層の灰褐色砂質土層がある程度堆積した時点で再度掘り返された状況を示している。南西辺では陸橋部が残され、後のものは溝端が南西にくびれ土壌状を呈する。周溝からの出土土器は、古墳時代後期のものが多いが、中期のものも数点ある。埴輪片が1点あるが外からの流入と思われる。SX-03は、一辺約10.5mの方形墳と思われる。幅約3m深さ平均0.2mの溝を巡らす。周溝の断面は皿状を



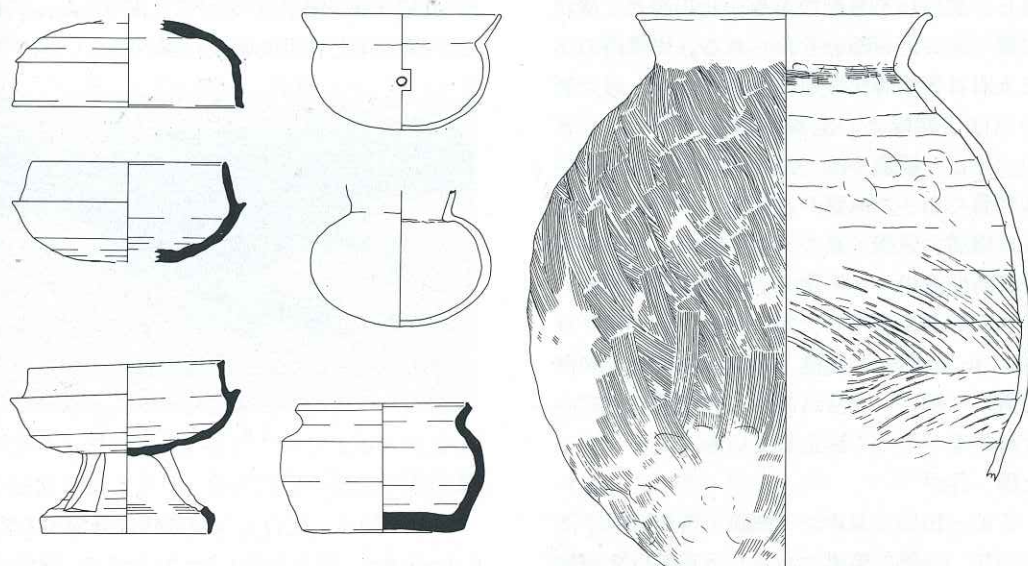
SX-01



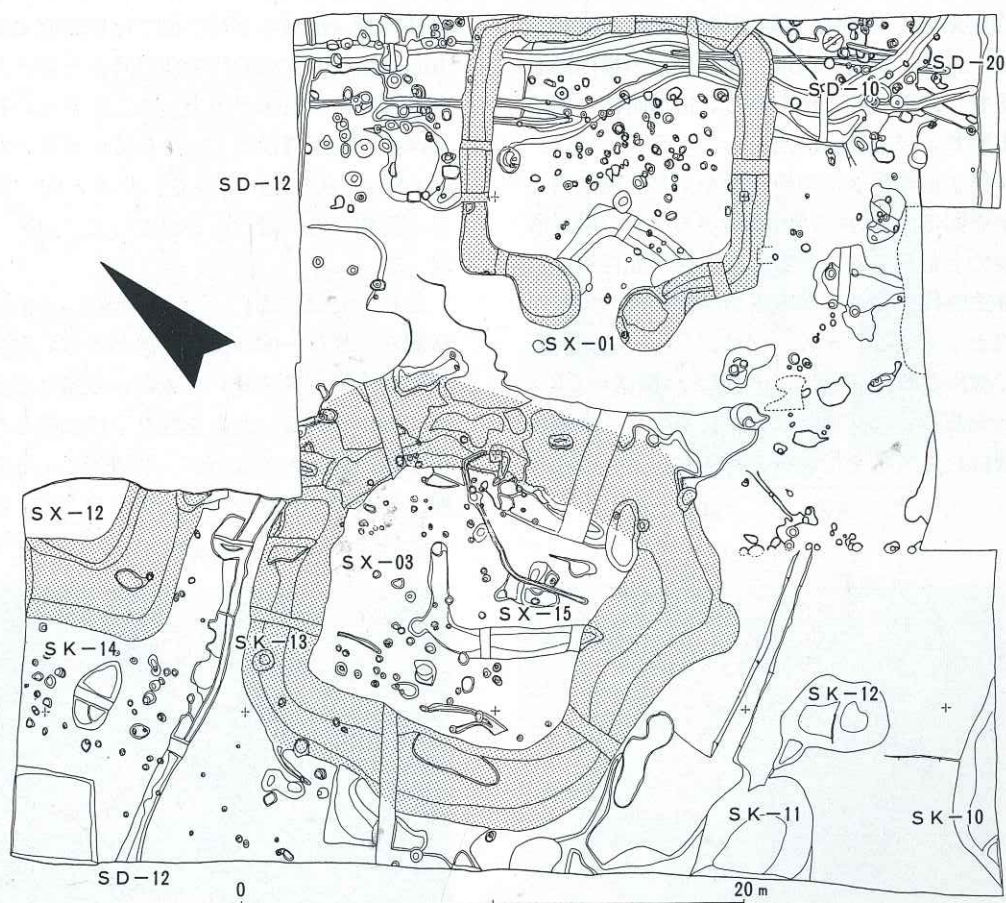
SX-03付近(北東より)



SX-12



SX-01出土土器実測図 S=1/4

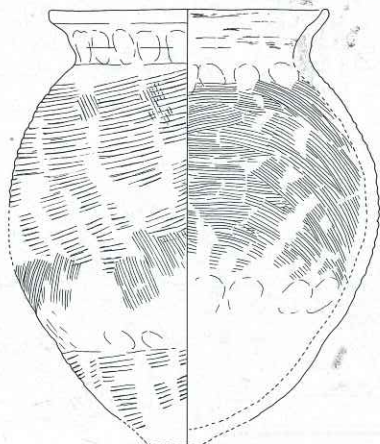


調査地遺構図

呈し、溝底は不整形である。北辺溝で土壌状に深く落ち込む部分もみられる。周溝内の出土土器は古墳時代後期のものが多く、最上層からは後期後半の土器が出土している。SX-12は、幅約3m、深さ0.5~0.9mのL字状の溝である。溝壁が急角度で落ち込んでおり、周溝（区画）墓の一部と思われる。古墳時代前期後半から中期の土器が多量に出土している。SX-15は、幅0.8~1.2m、深さ平均0.3mを測る。小規模であるがSX-12同様周溝の一部の可能性がある。古墳時代中期の土器がまとまって出土している。

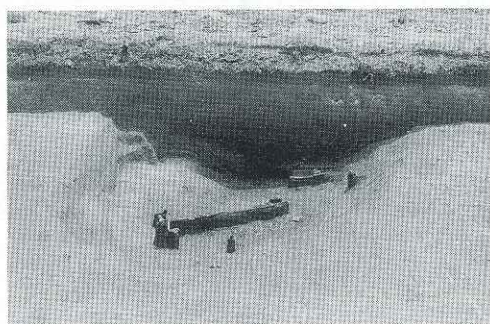
土壇・井戸

SK-10は、トレンチ南端の低地の最下部にあり、一部の検出であるため規模等の詳細は明らかでない。溝の可能性もある。古墳時代前期から中期の土器が出土している。SK-11は、長径5m以上短径4mの楕円形を呈し、深さ約1mを測る。古墳時代中期の土器および木製品が出土した。SK-12は、長径4m短径3mの楕円形を呈し、深さ約1mを測る。深さ0.75mで段がありその肩は横板で土留めされている。井戸の可能性もある。弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器が出土している。SK-13は、SX-03の溝底で検出された。直径0.8m、深さは溝底から0.8mを測る。ほぼ垂直に掘られており、堆積土層はレンズ状を呈する。SK-14は、長径3



SK-12出土土器実測図 S=¼

m短径1.5mの楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。弥生時代中期後葉の土器が出土した。



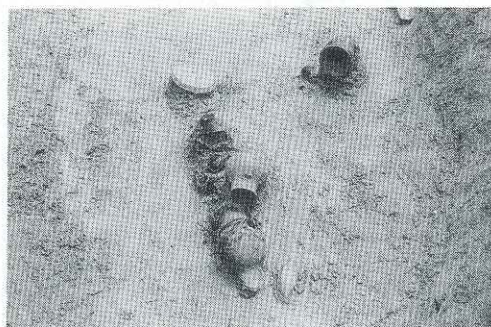
SK-11

溝

SD-10は、蛇行しつつ数状に分流する幅0.4~0.8m、深さ平均0.3mの小溝で、13世紀以降の土器片が僅かに出土している。SD-12は、幅0.4m深さ平均2mでほぼ真直に南西方向に流れ、古墳時代中期以降の土器とともに蛤刃石斧、石剣が出土した。これらの石器は本来の弥生時代のものである。SD-20は、幅0.8m深さ0.25mを測り、北東方向へ流れる。石鏃（尖頭器形）が出土した。

河道

SD-01は、幅1.5~5m深さ0.4~0.55mを測る。SD-04の支流と思われる。弥生時代中期後葉（Ⅳ様式）の土器が多量に出土する。SD-04は、北岸を掘り下げ調査しただけで幅は明らかでないが、堆積土である砂の検出範囲から幅6~10mを想定できる。深さ1.4~1.8mを測る。弥生時代中期後葉を主と



SD-06弥生後期の土器

して、縄文時代晩期および弥生時代前期～中期中葉（Ⅰ様式新～Ⅲ様式）の土器が数点出土している。SD-06は、幅約5m、深さ0.9mを測る。弥生時代後期の土器がまとまって出土した。また、南側の低地はより大きな河道跡と思われる。

柱 穴

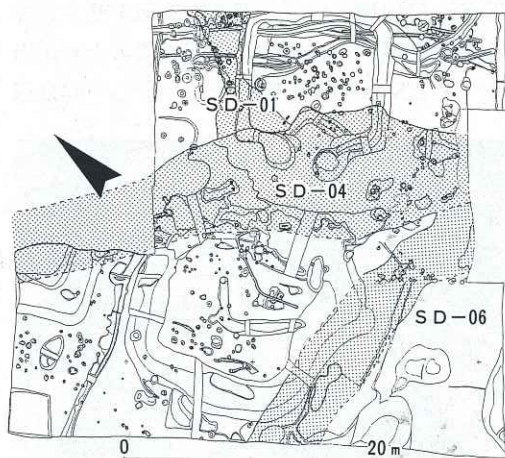
各所で柱穴群が検出され、10棟以上の掘立柱建物群になるとみられる。墳墓の周溝に切られるもの、古墳時代中期の土器を出土するものがあることより墳墓と併行または直前の集落跡と思われる。また、弥生土器を出土する柱穴も若干あり、弥生時代の集落が重複している可能性もある。

まとめ

今回は弥生時代の集落跡を明確には検出できなかったが、土壌の検出、出土土器の量か

らみて近辺に弥生時代の集落跡が存在することは確実であろう。次の古墳時代には河道が埋没し、掘立柱建物による集落が営まれると同時に、墳墓が造営される。本調査で検出された4基の墳墓にどの程度の盛土があったかは明らかでない。SX-01・12・15の周溝は溝幅に対して深さがあり、弥生時代の周溝墓（区画墓）の形態が踏襲されているものだろう。SX-03については全体の規模に対して溝幅が広く、溝底も不整形であることより、おそらく溝による区画よりも、溝掘削で得られる土で高く盛土する高塚の形態を重視しているものと思われる。

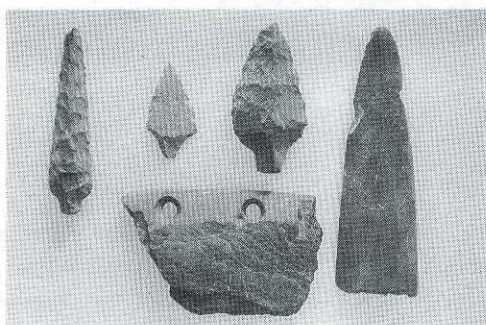
本調査では、一地域の墳墓の変遷として、古墳時代中期までは周溝墓（区画墓）の形態が受け継がれるが、後期には高塚の形態に変化することがわかった。（平井）



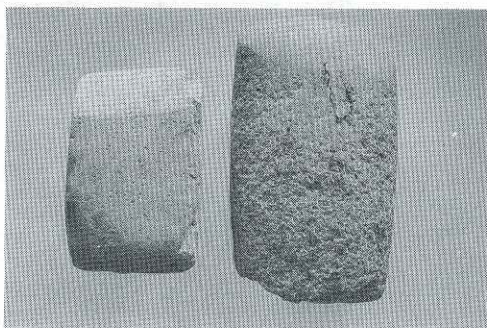
弥生時代の河道



SD-01およびSD-04(河道)



上3点：石鎌 右：石剣
下：石包丁



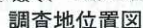
左：扁平片刃石斧 右：蛤刃石斧

24

調査期間 1990年11月22日～継続調査中

継続調査中であるが、T-2・T-3についてはほぼ終了しているため概要を紹介する。

SX-01は南側に陸橋部をもつ直径約14mの円形墳である。周溝内の土層は大きく2時期に分けられ、上層土が隣接するSX-02の周溝堆積土と同質土であることより、SX-02の造営時に再掘削され、外側へ広げられたと思われる。SX-02もほぼ同規模の円形墳



墳墓の北側及び西側は平坦な地形になっており、溝、柱穴群等が検出された。SD-05は深さ0.7mを測り、弥生時代中期(Ⅳ様式)の土器がまとまって出土した。SD-06は、深さ約1.2mで砂が厚く堆積し、弥生時代後期(Ⅴ様式)の土器が出土している。この溝の時期、堆積土、流れの方向から、㊸調査地のSD-06が続くものと思われる。SD-07は、埋没直前に、SD-08が流れ込み、東側ではSX-01に切られる。深さ約1mを測り、弥生時代末期から古墳時代中期までの土器が出土する。SD-04は深さ0.8m、SD-03は深

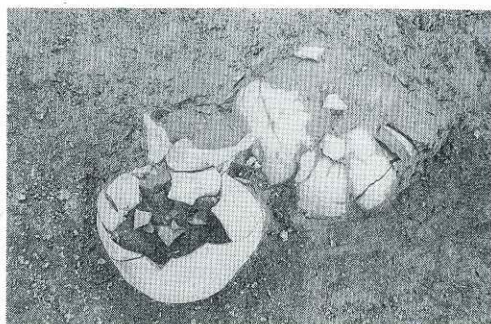
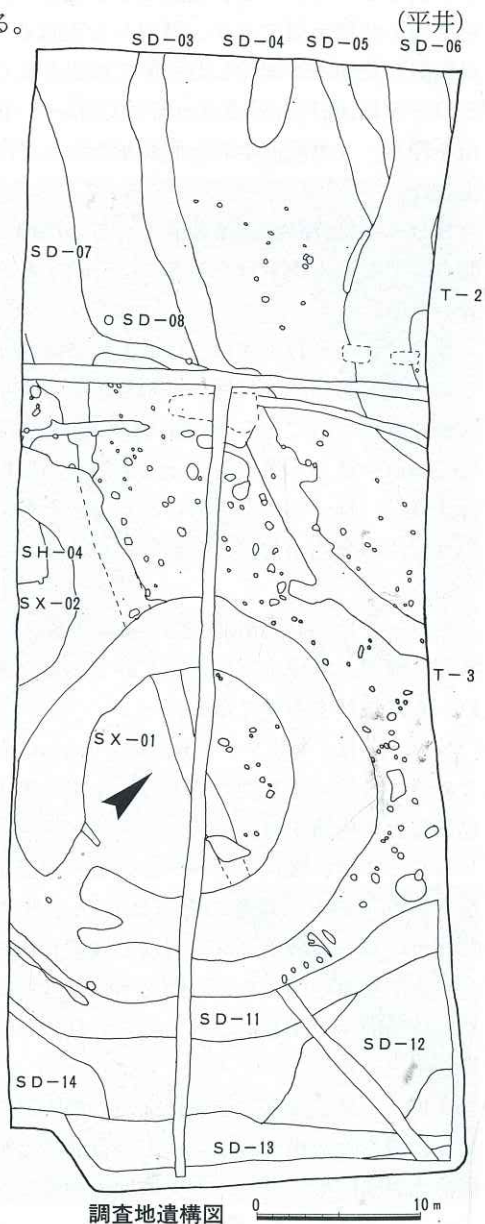


T-2・3 全景(東より)

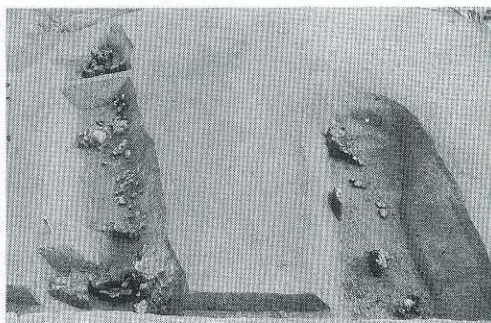
さ0.3mを測る。前者は弥生時代末期～古墳時代前期、後者は古墳時代中期である。SD-08は、古墳時代中期から後期の小溝で、㊸調査地のSD-12が続くものと思われる。

SH-04はSX-02の造営以前の竪穴住居である。ほとんど削平されており、床面の痕跡が検出されたのみであるが、かろうじて方形であることが認められた。

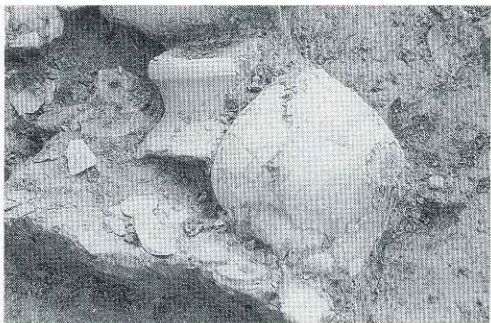
出土遺物は、土器類、木製品の他に碧玉製管玉、石鏃、滑石製有孔円板等が出土している。



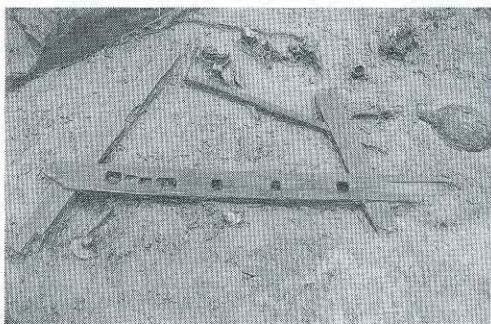
SX-01 溝内出土の須恵器



SD-05 SD-04



SD-05 弥生時代中期の土器



SD-14 出土木製品

②5 霊仙寺遺跡

調査地 栗東町大字霊仙寺字南松馬鹿

調査期間 1990年10月26日～11月30日

調査面積 1,000m²

霊仙寺遺跡は、一級河川の中ノ井川の北部平地に広範囲に広がり、今日までの調査で、縄文時代から近世までの多様な遺跡であることが明らかになっている。特に、本遺跡の西端に位置する地点では縄文時代中期と、弥生時代前期から中期の遺構が検出されており、遺物も多く出土した。また、本調査地の北部では弥生時代中期、奈良時代から中世の遺構群、西に近接する地点では、弥生時代前期から中期の流路が調査され成果をあげている。

今回の調査地は、霊仙寺遺跡の南東端に位



調査地位置図

置し、南は中ノ井川に面している。北半は水田面より0.3mで遺構面に達し、南半は中ノ井川に向かって緩やかに傾斜し0.6mで遺構面に達する。

検出された遺構は、溝、土壇状遺構、柱穴、また、溝により方形に区画された墓地と思われる遺構等がある。

SX-1は、溝SD-6により作り出された15m×7m以上の方形の区画で、その形態から墓地と考えられる。基盤となる青味青灰色土層も沖積土層であり、層内から正立または傾斜した樹木が埋没した状態で検出された。SD-6は、幅1.2m～2.3m深さ0.2m～0.45mを測り、5世紀前半の土器がまとまって出土した。

SD-1は、深さ0.3mの溝であるが溝幅は明らかでない。南半はやや浅く、分流する部分もある。

SD-3・SD-4は、ほぼ直角に屈曲する同一溝と思われ、付近の地割りに沿った小区画を成すものであろう。幅約0.4m、深さ平均0.15mを測り、須恵器・土師器等の小破片を含むが、唯一年代を求められるものとして、13世紀代の黒色土器碗の底部破片があるのみである。

SD-5は、幅1.4m、深さ0.5mの断面「V」字形の溝で、堆積土はほとんど砂である。SD-6に先行する溝である。

SD-7は、幅0.7～1m、深さ0.3mの溝である。SX-1を切り込み付近を覆う黒灰色粘質土が堆積する。

SP-1は、後世のSD-1により上部を削平されており、残存の直径は0.8m、深さ0.45mを測る。埋土はレンズ状に堆積しており、底部層は地山である石礫を多量に含む。平安時代前半の須恵器の瓶子と思われる小破片が出土した。

SK-1は、長径3m短径2mの楕円形を呈し、深さ0.25mを測る。検出時は溝状の黒褐色土が楕円形に巡り、中央に地山が残る状

況であったが、結果は土壌状となった。強風等で倒れた樹木の根が起き上がった痕跡と思われる。

SK-2 は、直径1m、深さ0.3mを測る。埋土は底部がやや暗色である程度で単一層と思われる。刺突列点文を施した土器の小破片が出土している。弥生時代の壺の破片と思われる。

その他に10数カ所の小柱穴があるが、建物としてのまとまりは見られず、遺物も出土していない。

トレンチの南端はかなり攪乱されており、中ノ井川に向かって急激に落ち込む地形を整地した痕跡と思われる。(平井)

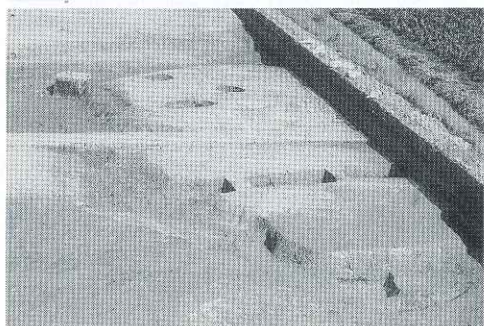
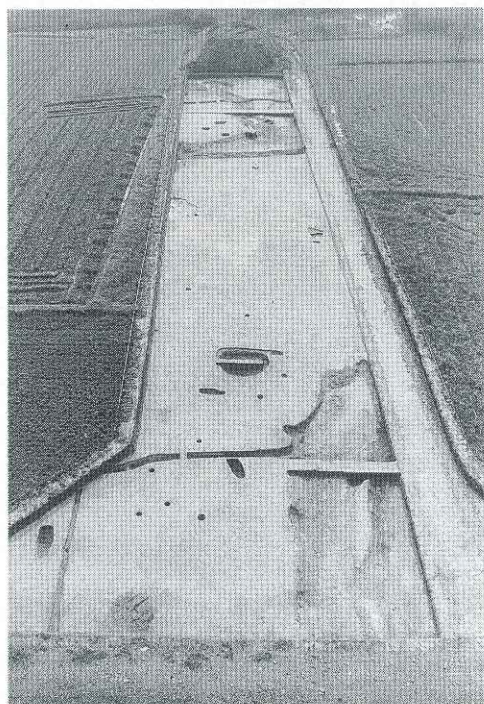
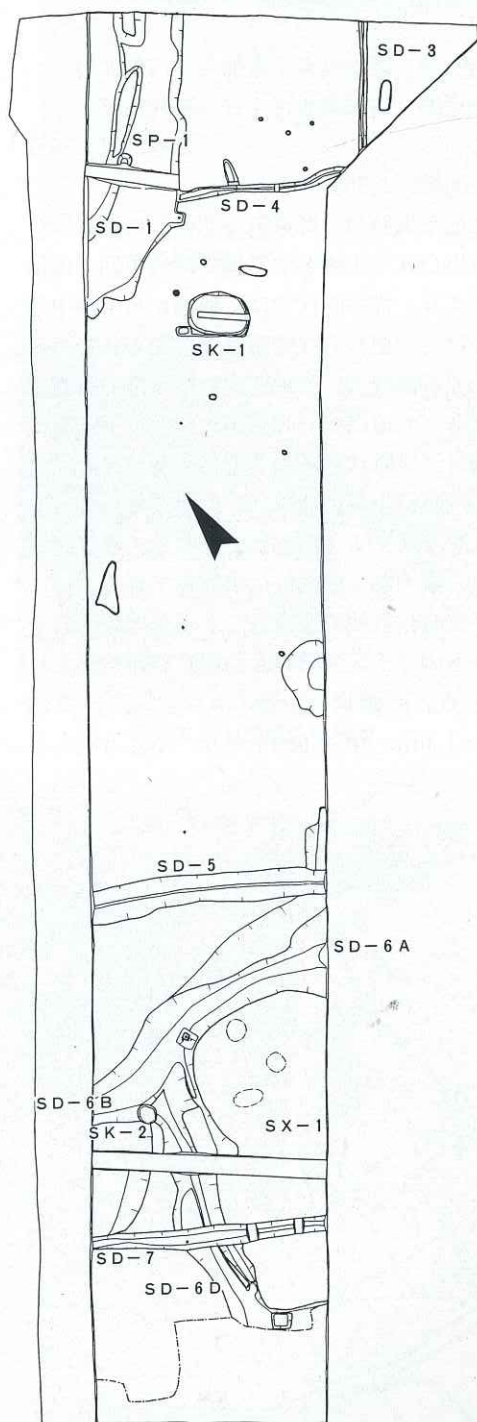


写真 上：全景 下：SX-1



調査地遺構図

②6 霊仙寺遺跡

調査地 栗東町大字霊仙寺字西畑93他

調査期間 1990年6月4日～10月19日・

11月27日～29日

調査面積 2,300m²

霊仙寺遺跡は、栗東町の北西部に位置し、北白川C式を主体とする縄文時代中期の遺跡に始まり、弥生時代では、前期から中期中葉にかけての拠点的な集落として知られている。

今回の調査は、宅地造成に伴う事前調査で、検出された遺構は、弥生時代中期、平安時代後期、江戸時代以降の3つに大別できる。

弥生時代中期の遺構は、土壌2基、ピットが少々存在する。出土した土器は、壺、甕があり、畿内第4様式併行に比定できる。

平安時代後期の遺構は、本調査地の中心をなすもので、区画溝をもつ屋敷跡が検出されている。区画溝は、残りのいい部分で幅1.2～1.6m、深さ60cmを測り、南北方向には、



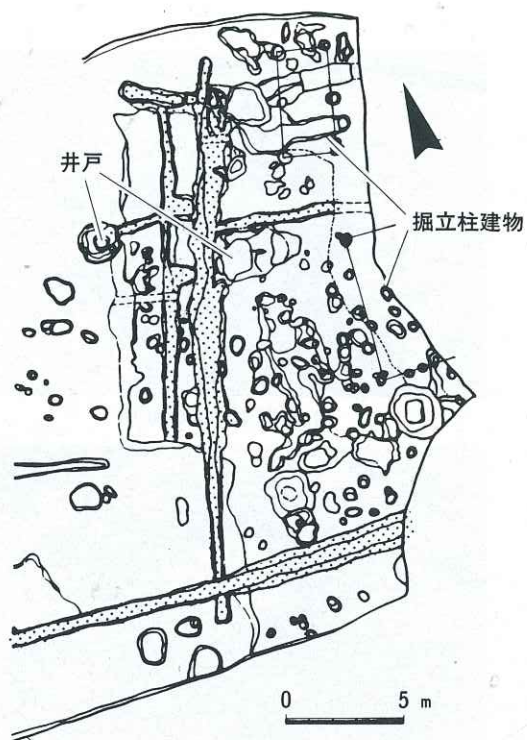
調査地位置図

2本の溝が並行してのびている。区画溝内及び周辺には、3棟以上の掘立柱建物、井戸、土壌等が確認されている。また、井戸や土壌のいくつかは、意識的に石を使って埋められた痕跡が認められる。出土遺物は、12世紀後半頃の遺物を中心とした、土師皿、黒色土器碗が大半を占める。注目される遺物としては、「安畠」と墨書された土師器碗、篠系と思われる須恵器碗が出土している。これらの遺物は、区画溝をもつ屋敷跡の遺物より古いものである。

江戸時代以降の遺構としては、方形状に巡る溝、貯水施設、井戸、耕作痕等が存在する。なかでも貯水施設は、発掘例が少なく、江戸時代の農民の生活を知るうえで重要なものである。平面形態は、楕円形の掘り方に、長方形の枠組をもつ。規模は、掘り方推定約9m、中枠部分約4×3m、深さ約2.3mを測る。枠の構造は、上下2段に組んだ丸太材を、四方に立てた柱に組み、その外側には、板材を南北方向に14枚、東西方向に10枚ずつ並べている。下方に組んだ丸太の下には、厚さ約15cm、幅約50cm程の板を、東西方向の西側にもつ。さらにその下の南西隅に曲物を設置している。用途としては、普段は、井戸と同様な使われ方をし、彼岸の時期になると、種籾を水に浸す場所（種池）として利用された可能性が高い。このことを示す根拠として、下層に種籾がかたまっていた出土したこと、枠の上に、種籾を吊り下げるために使用したと思われる、丸太がみられたこと等があげられる。種池は、通常村の規模に応じて、いくつときまっており、共同で管理がなされていたらしい。同様な施設として、灌漑用の用水（貯水池）があるが、将来資料が増加することによって、構造の違いを指摘できるであろう。（近藤）

参考文献

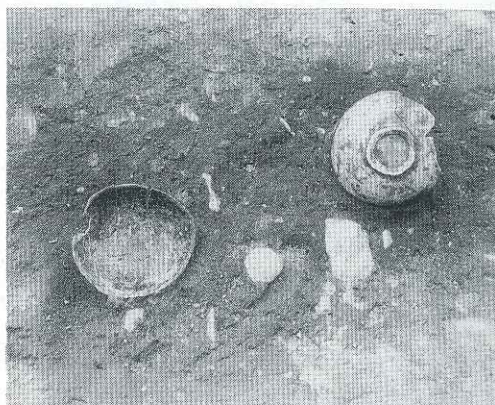
清水隆久『日本農業全集』第26巻 農山漁村文化協会 1983



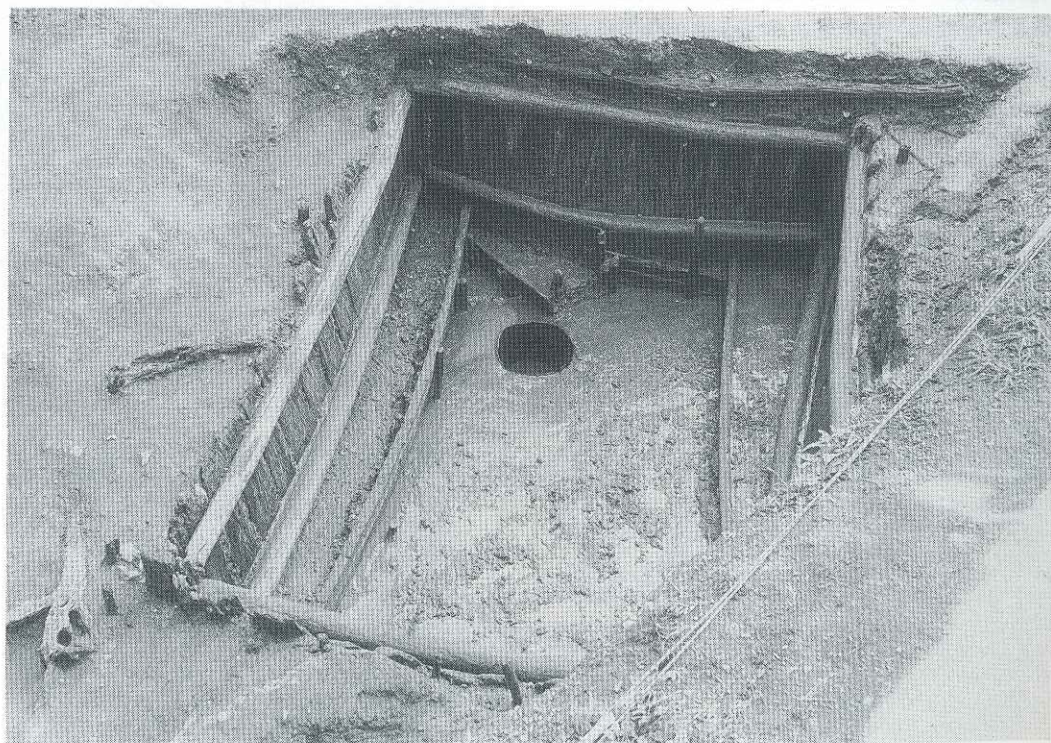
C地区遺構図



C地区屋敷跡（西方向よりみる）



区画溝出土の黒色土器碗



江戸時代の貯水施設（北方向よりみる）

27 小柿遺跡

調査地 栗東町大字小柿字南里326-1

調査期間 1990年3月13日～4月24日

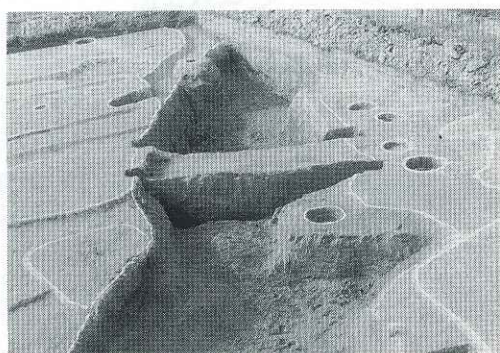
調査面積 約920m²



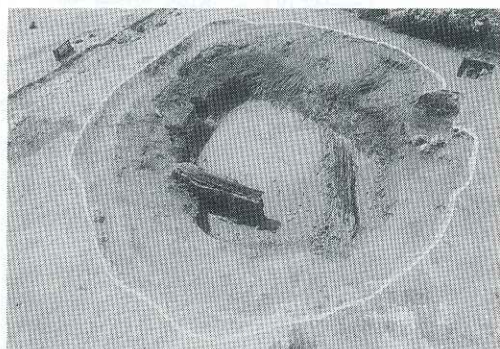
調査地位置図

今回の調査では耕土直下（標高：99.50m）で露呈する黄灰色シルト層上より旧河道跡や溝跡、井戸跡や土壌等の遺構が確認され、縄文時代から中世に至る様々な各時代の遺物（土器・石器・木製品）が出土している。

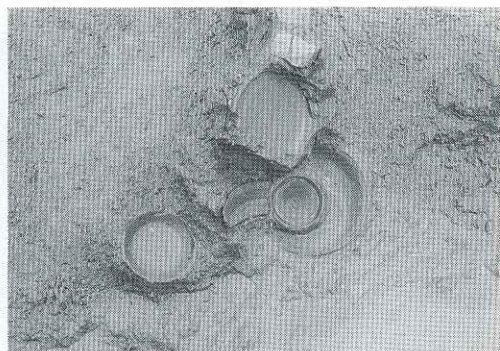
旧河道は調査区北端で確認された遺構で、現状幅員3.0m、深さ1.2mを測る。上層より7～8世紀代の須恵器、中層より弥生時代中期後半～古墳時代前期の土器が出土している。井戸跡は5m×4mの不整円形状掘り方中央に3.2m×2.0mのほぼ方形の掘り込みを有する。現状深さ1.2mで中・下層より桵板片や須恵器・土師器が出土している。時期は8世紀初頭の所産である。なお、その東側には心々距離6.0mを測り、東西方向に延びる2条の小溝（幅0.4m）が見られる。これは屋敷地から東へ延びる道路状遺構の可能性が高い。（大崎）



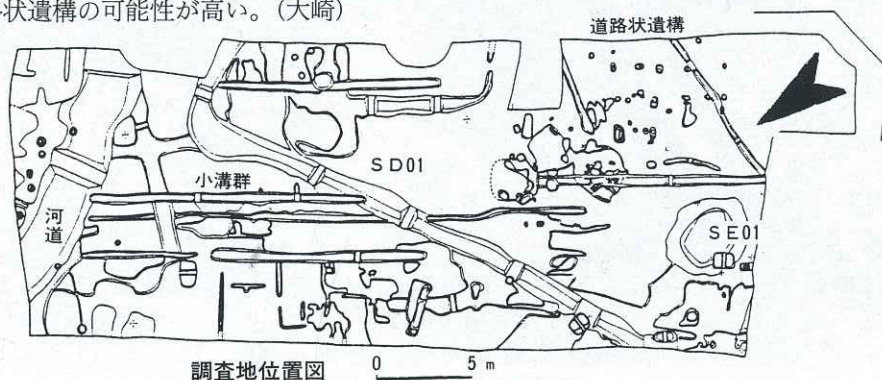
河道(南東方向より)



井戸(東方向より)



井戸出土遺物



調査地位置図

②8 小柿遺跡

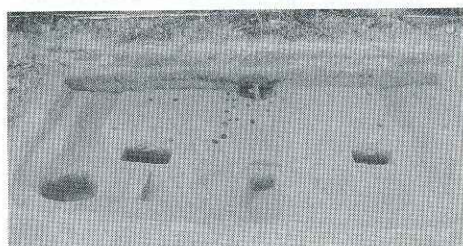
調査地 栗東町大字中沢字大月113-1

調査期間 1990年4月17日～6月1日

調査面積 約460m²



調査地位置図



SH-1全景（南東方向よりみる）

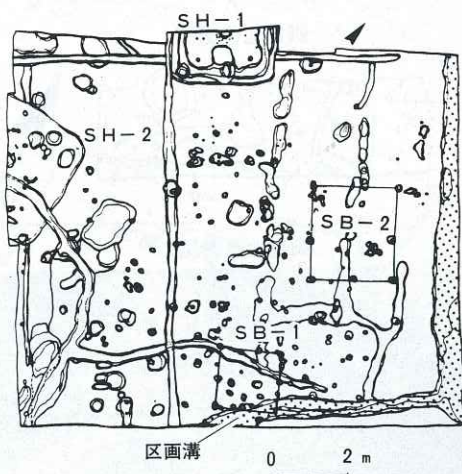


東方向から区画溝・SB-1・2をみる



作業風景（SH-2周辺）

今回の調査は、共同住宅建設に伴う事前調査で、検出した遺構は、弥生時代後期後葉から古墳時代前期（Ⅰ期）と奈良時代前期（Ⅱ期）の2つに大別できる。Ⅰ期では、竪穴式住居、掘立柱建物、溝、土壇等が確認されている。竪穴式住居は、2棟とも隅丸方形を呈し、大きさはSH-2（一辺約6.5m）の方が1m程大きい。構造は、中央に炉を持ち、隅に貯蔵穴と思われる土壇（SH-1では、甕、鉢がセットで出土）をもつ。また、支柱穴は2本しか確認されていないが、4本柱と推定される。SH-1と2の大きな違いは、SH-1に壁溝が存在することである。SB-1は、2間×1間（柱間約東西1.6m、南北3.2m）で、柱穴の深さが80～90cmを測る。Ⅱ期では、須恵器の坏蓋、土師器の皿等を出土したL字状に区画する溝が存在する。幅は、70～100cmを測り、深さは、10～20cm程の浅いものである。その内側には、2間×1間（柱間約東西2m、南北4.3m）のSB-2が存在する。埋土状態から、区画溝と同時期の可能性が高い。この他、時期不明の栗太郡条里に併行する溝と、柵列が存在する。（近藤）



調査地遺構図

②⑨ 縄 遺 跡

調 査 地 栗東町縄648他

調査期間 1991年1月8日～3月4日

調査面積 90m²

本調査地は⑮調査区東側に隣接している。検出した遺構とその時期については⑮調査区の区分(P40、41)に合わせ列記する。

第Ⅰ期 周溝状遺構2基。X-2はコーナー部分の確認であり、X-1より新しい。

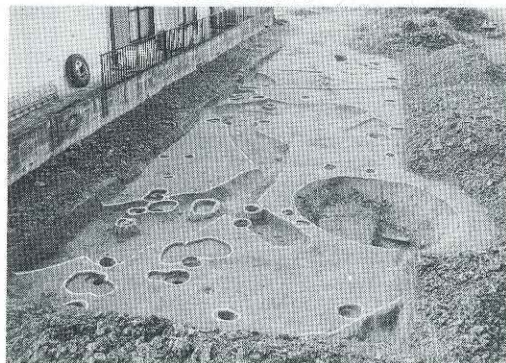
第Ⅱ期 直径2.5mを測る土壌1基。完掘していないが、埋土中から土師器、施釉陶器、黒色土器が出土する。

第Ⅲ期 建物または柵列とみられる柱穴列2カ所。軸方位からd小期の時期とみられる。

(清水)



調査地遺構図



③⑩ 縄 遺 跡

調 査 地 栗東町縄650

調査期間 1991年1月22日～2月6日

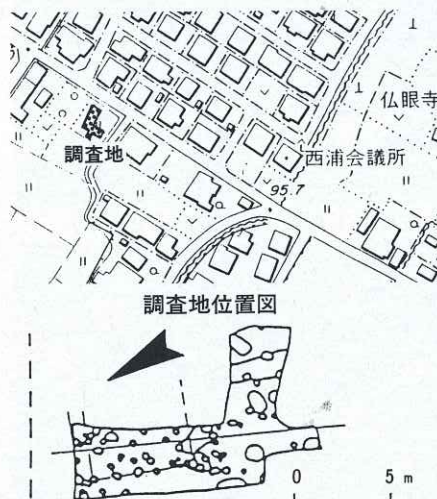
調査面積 56m²

⑮調査区北側に接する。検出した遺構は⑮調査区の時期区分(P40、41)、第Ⅲ期に該当するものと考えられる。

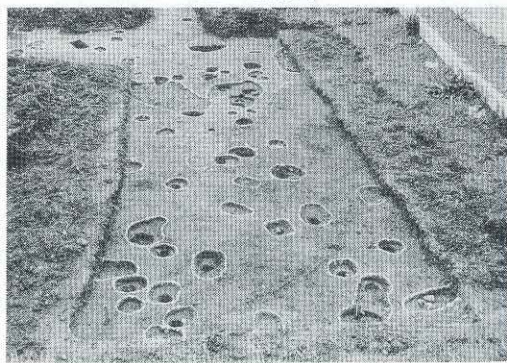
溝、柵はc小期(13世紀前半～半ば)と考える遺構であり屋敷地東側を画する施設である。溝内からは黒色土器、土師器のほか、白磁、青磁片が1点ずつ出土する。

この他3カ所で柱穴列を認めるが建物か柵か判断しかねる。時期については軸方位を基準にすればd期に属するものと考えられる。

(清水)



調査地遺構図



③1 岡遺跡・地山古墳群

調査地 栗東町岡・目川

調査期間 1990年6月19日～12月28日

調査面積 約2,600㎡

圃場整備事業にともない、1986年から調査が継続されている。第1次調査では、栗太郡衙跡の発見があり、注目された。今年度は、第5次調査にあたり、岡遺跡内でも郡衙域の西側に位置する地山古墳周辺地域で実施した。

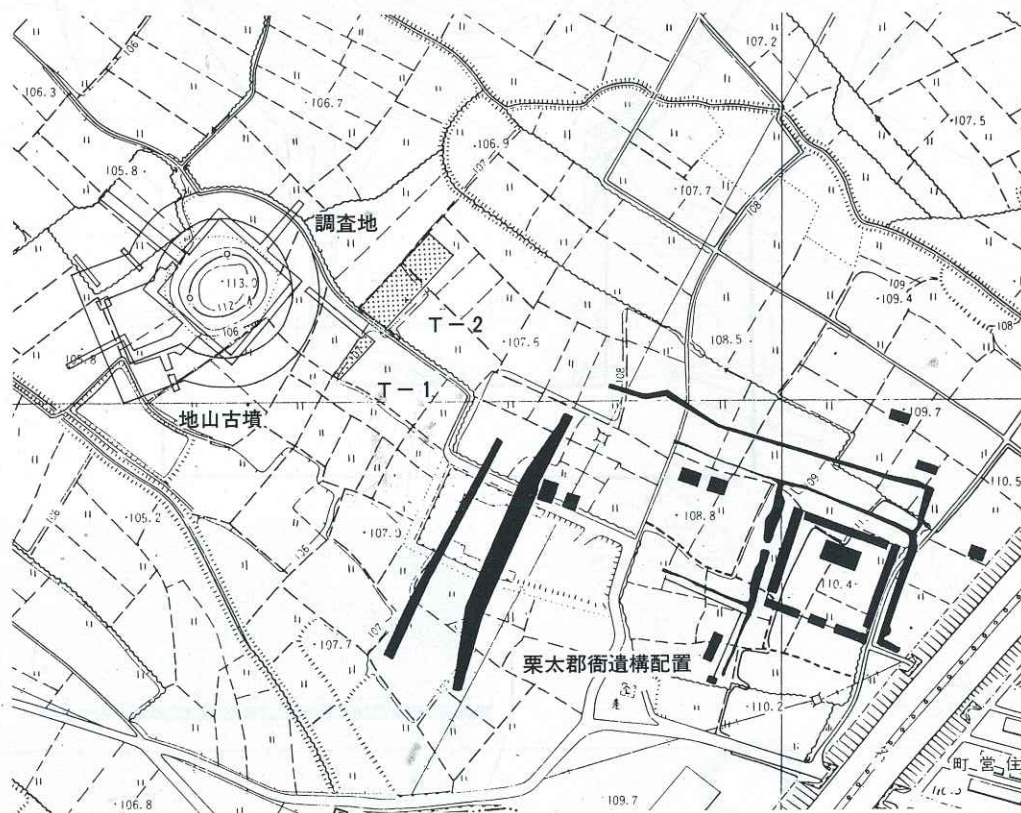
切り土部分の調査区T-1・2では、集落跡や周溝状遺構を検出、地山古墳では、墳丘周囲の水路部分トレンチにおいて、周濠を確認した。

地山古墳は、高さ約6m、直径56mの円墳と周知されていた。しかし、本調査により、

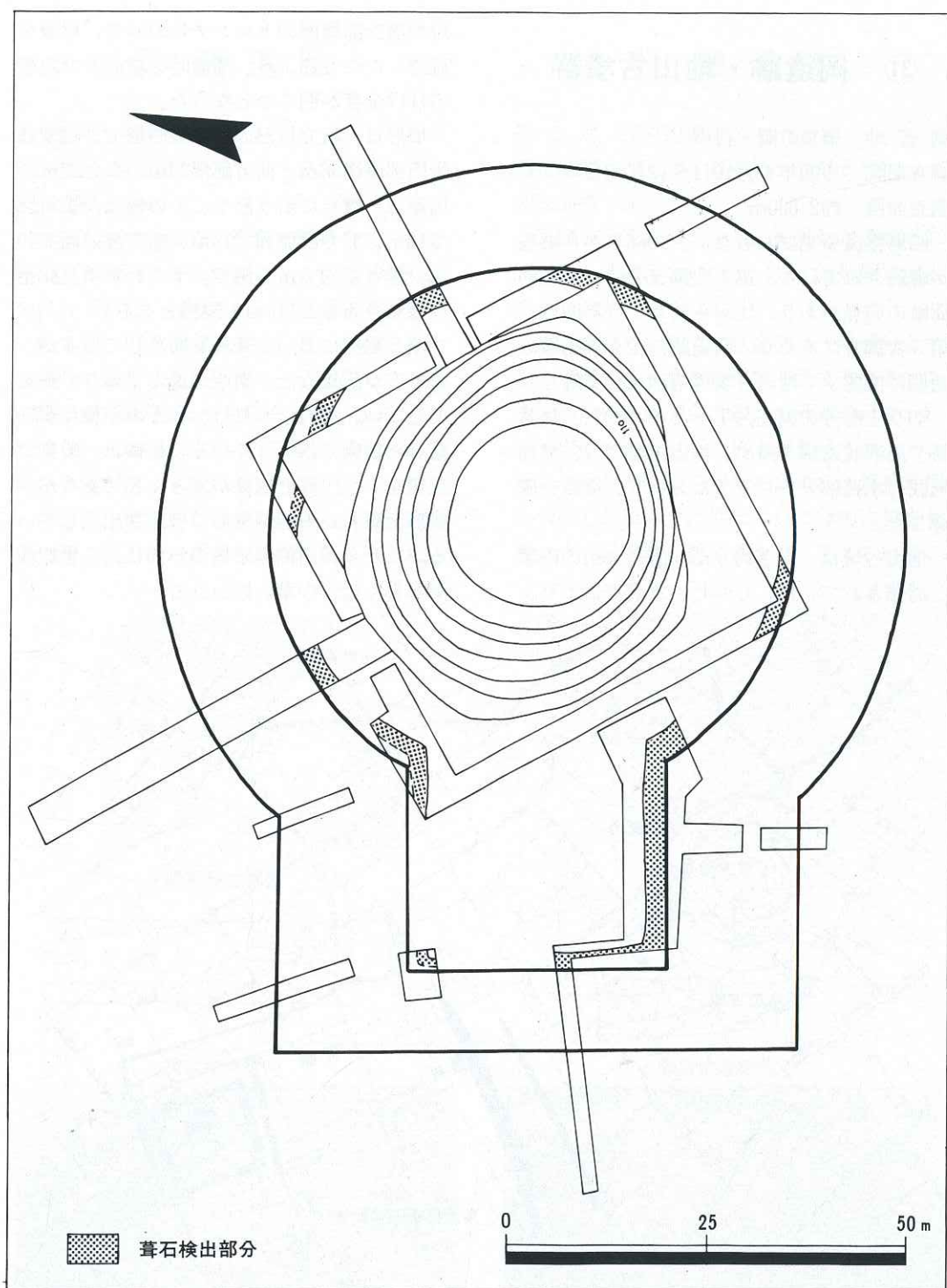
現況墳丘部周囲のトレンチにおいて、周濠を確認したことにより、築造時の墳形及び規模のほぼ全容が明らかとなった。

墳形は、帆立貝形の前方後円墳で、規模は後円部直径66m、前方部幅33m、長さ22m、周濠は、墳丘に沿う形で、その幅は、後円部で13m、前方部側面で15m、前方部前面で10m、深さは約2mを測る。すなわち墳長88m、周濠を含めると110mの規模となる。

墳丘裾部において葦石を検出しているが、葦き方が乱雑な上、崩壊が進んでおり、整然としない。葦石上からは、多くの埴輪片が転落した状態で出土している。埴輪は、軟質で黒斑をもつ円筒形埴輪がほとんどであるが、家形と思われる線刻をもつ破片も出土している。これらの円筒形埴輪の年代は、5世紀前葉もしくは、中葉と思われる。



調査地位置図



地山古墳トレンチ配置及び遺構図

T-1 切り土部分の調査である。

調査区南端で、幅2.5m、深さ0.5mの周溝状の遺構を検出した。その溝の埋土である黒褐色土層からは、多数の埴輪片が出土した。

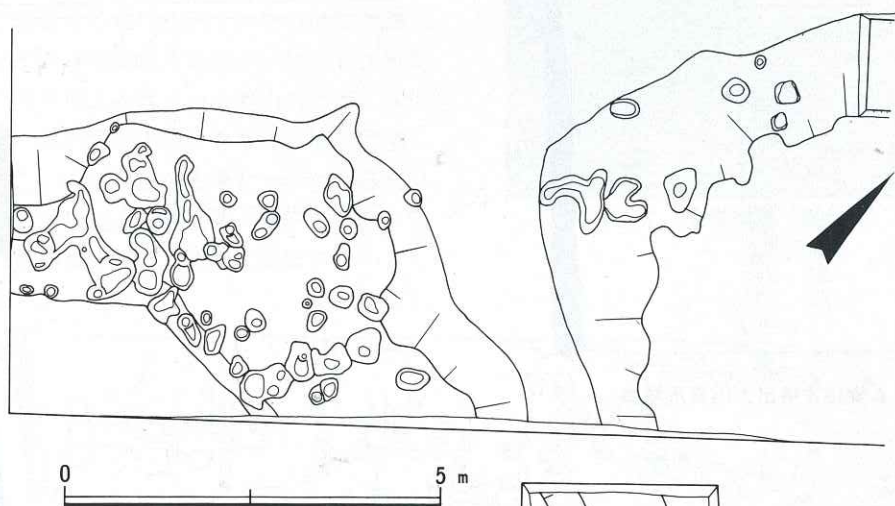
埴輪は円筒形埴輪の他、家、衣蓋、鶏、などの形象埴輪も出土している。これらの埴輪は、地山古墳出土の埴輪同様、すべて軟質で黒斑をもつものだが、円筒形埴輪の諸特徴は、古い様相を示し、その年代は、4世紀後葉と思われる。

この埴輪を出土した溝については、部分的な調査のため、その形態や規模等は不明である

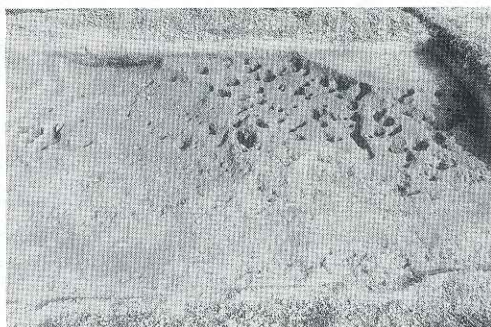
るが、古墳の周溝の可能性が高く、これを2号墳としておく。



鶏形埴輪出土状況



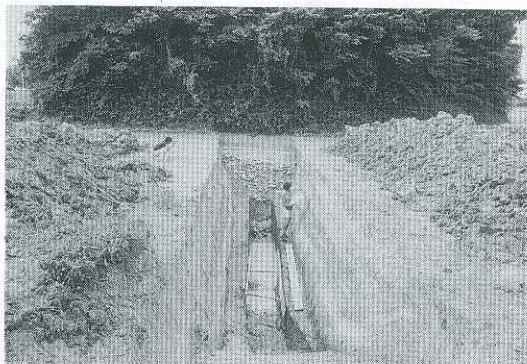
T-1 2号墳遺構図



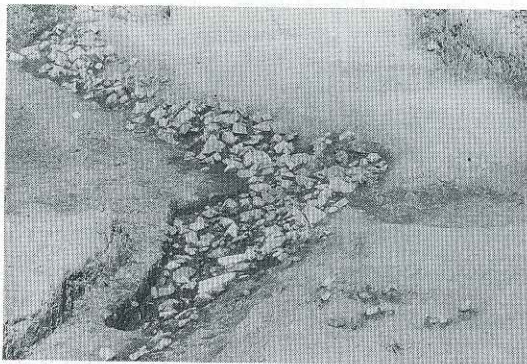
2号墳



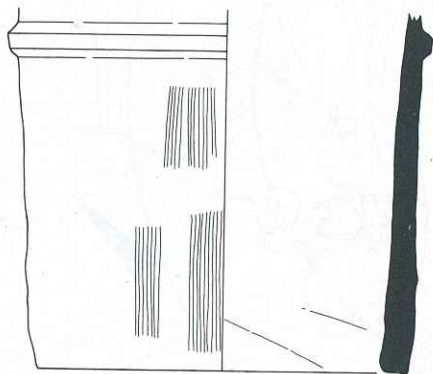
鶏形埴輪 S = 1/4



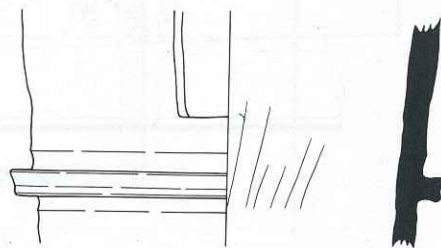
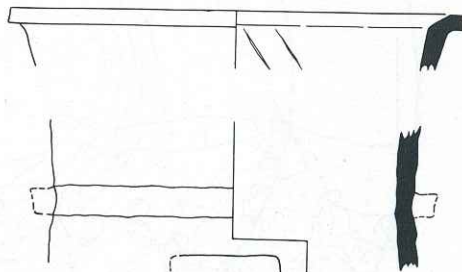
周濠調査風景（後門部北東側）



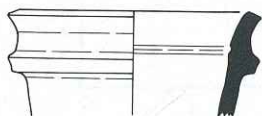
北側くびれ部（前方部から）



▲地山古墳出土円筒形埴輪



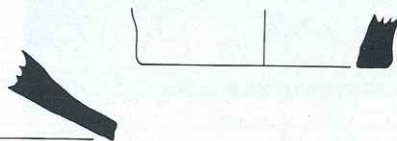
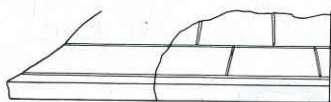
◆ 2号墳出土円筒形埴輪



▲軸受部

2号墳出土
衣蓋形埴輪

▼笠部



出土遺物実測図（ $S = \frac{1}{3}$ ）

T-2 1次調査で発見された郡衙域の西側に隣接した調査区である。包含層からは、8世紀を中心とした須恵器等の遺物が多量に出土している。遺構に大規模なものは見られないが、7世紀から13世紀に至る溝・掘立柱建物・井戸・土壇等を検出した。郡衙周辺における集落の広がりを考える上で貴重な資料となった。

その他、地山古墳周辺において、近世の陶磁器片と共に、サヤやトチン等の窯道具が多量に出土している。また地元には、江戸時代末から明治時代にかけて、この地で焼き物を焼いていたという伝承が伝わっており、古墳周辺で窯業生産が行われていた可能性が高い。

以上が調査の概略であるが、従来6世紀初頭の円墳と考えられていた地山古墳が、5世紀に遡る帆立貝形の墳丘をもつ古墳と判明した。また、帆立貝形の古墳としては、滋賀県下最大の当町椿山古墳に次ぐ規模であり、当地域の首長墓として、重要な位置を占めるといえよう。

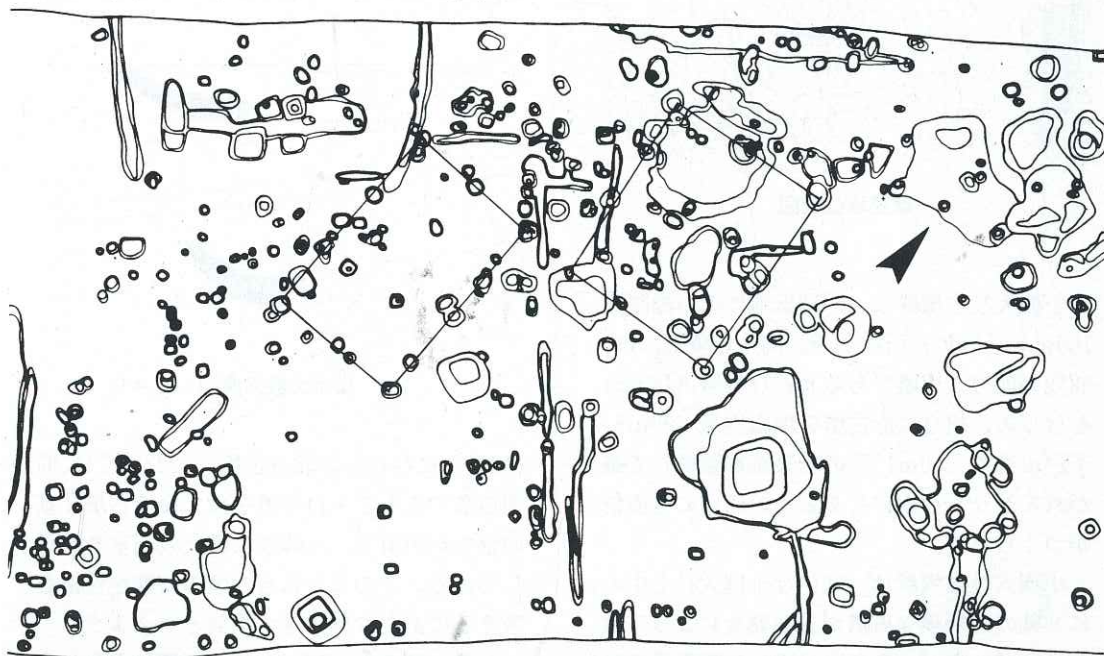
(佐伯)



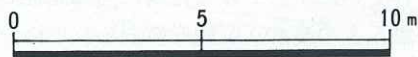
調査地全景 (右上は地山古墳)



T-2 完掘状況 (西から)



T-2 遺構図

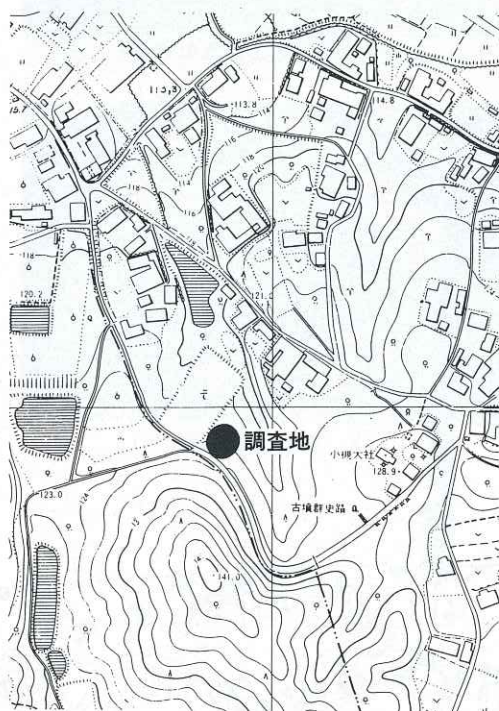


③ 小槻大社古墳群 第10号古墳

調査地 栗東町大字下戸山字宮ヶ谷

調査期間 1990年4月9日～11月2日

調査面積 98.5m²



調査地位置図

小槻大社古墳群は、沖積低地に近い標高約160mの丘陵地に所在する。同一丘陵上には、前期の前方後円墳である北谷11号墳（105m）をはじめ、帆立貝形古墳の地山古墳（88m）、下戸山古墳（60m）等の首長墓が連続して築かれており、後期になるとその周辺に古墳群がつかられる。

小槻大社古墳群は、式内社小槻大社を中心に9基の小規模な古墳が分布調査によって確認されていたが、それとは別に当調査地では、低い墳丘上の高まりが地形に表われていたため、古墳の存在する可能性が指摘されていた。

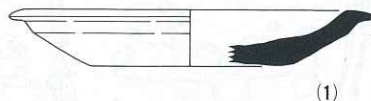
調査は、数カ所にトレンチを設定し、墳丘規模と形態、そして主体部の有無を確認することを目的として実施した。

古墳は、南北15.5m、東西13.5mの方墳で、墳丘上部は削平を受けているが、北側の溝からの高さは1.8mを測り、下方の0.7mは地山を削り出して整形し、その上部に盛土を施している。周溝は幅3～3.5m、深さ1mを測る。

墳丘中央部の表土直下から主体部である墓壇掘り方を検出した。主軸は墳丘長辺と同じく南北方向で、長辺6m、短辺3.2mの長方形を呈する。墓壇内からは二つの割竹形木棺状の痕跡を確認した。

出土遺物は、表土直下から8世紀の須恵器皿が1点(1)、周溝埋土より須恵器片1点(2)、墳丘盛土中から土師器片数点が出土したが、古墳の築造年代を決定しうる資料とはならなかった。

当古墳群については、他の古墳が未調査の段階であるため、詳細は不明であるが、南方



(1)

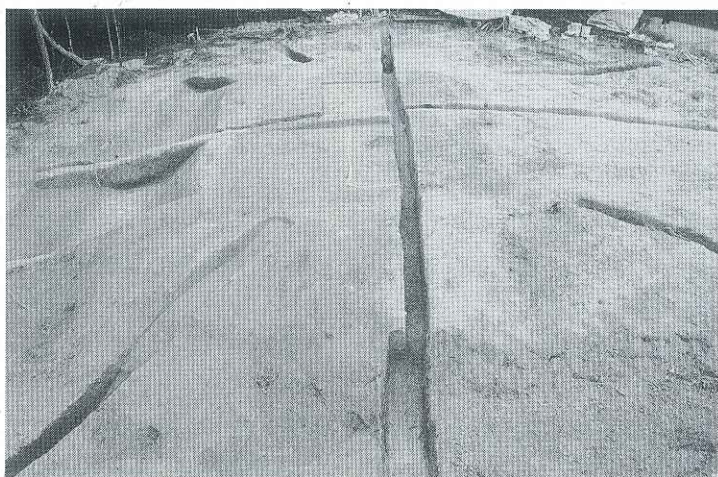


(2)

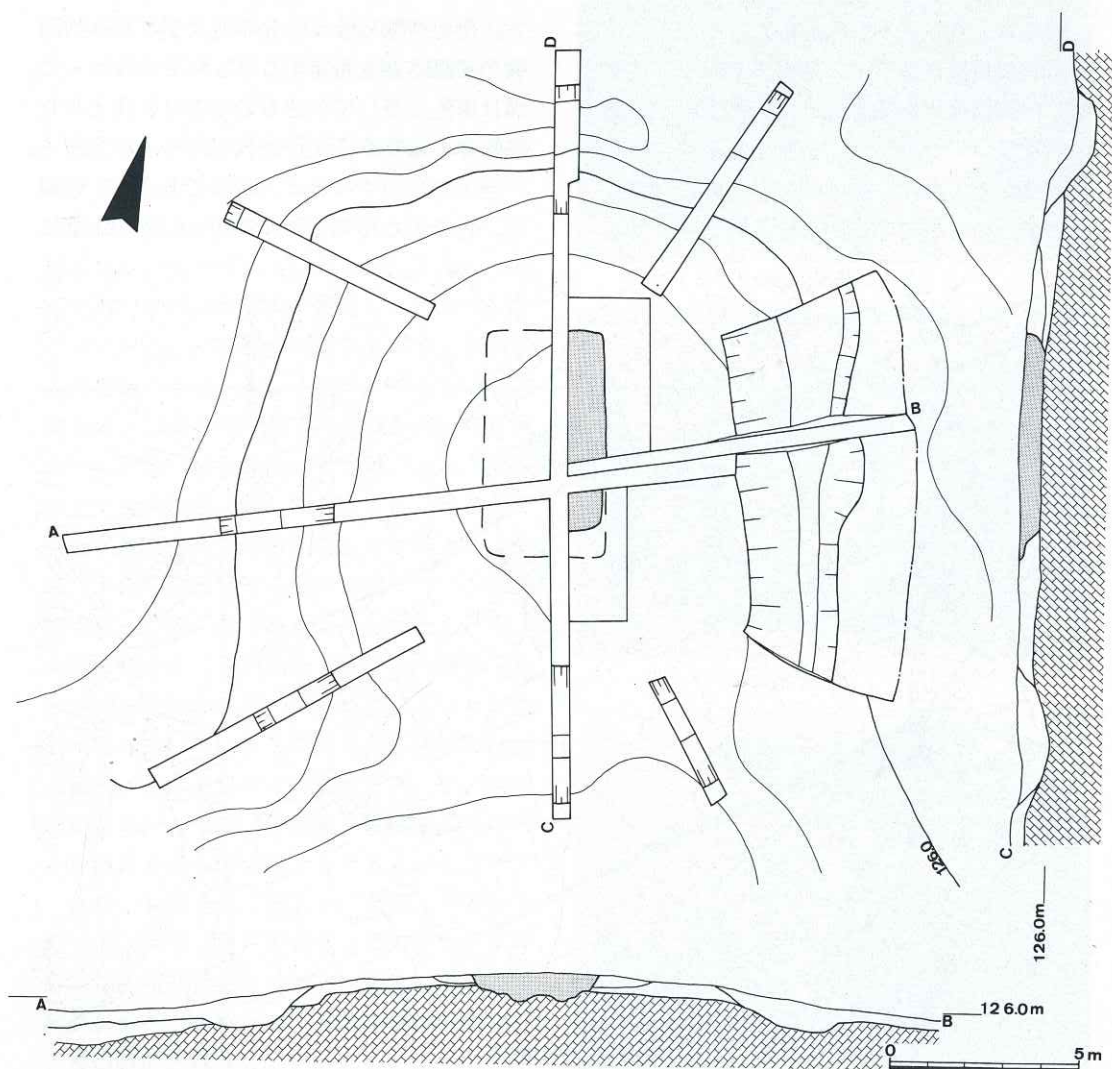
出土土器実測図 S = 1/3

約200mに存在した北谷古墳群においては、前期古墳である1・11号墳を除く後期古墳9基の全てが円墳で、主体部に横穴式石室を採用している。このことは当古墳の時期や性格を考えるにあたり興味深い事実といえよう。

なお、調査後土地所有者の理解のもと、埋め戻し保存されることとなった。（佐伯）



10号墳
(北から)



調査地遺構図

③③ 中村遺跡

調査地 栗東町大字御園字上砥山・御園地
先

調査期間 1990年4月9日～12月4日

調査面積 約7,000m²

団体営圃場整備事業に伴う第3次の調査は、最終年度にあたる。調査は、切り土面で、まず、仮にA～Dの4地区に分けて図示しておく。堆積土層の性格は、各区とも基本的に上層より、現耕作土・旧耕作土・床土・包含層・地山、で捉えられる。

調査は、A区より順次進めた。その方法は、基本的に重機によって、地山までいっきに掘削し、遺構検出作業を進めた。直上の包含層の取り扱いについては、全区とも薄く、分布に偏りがあるため、掘削時には、綿密な立ち会いを行い、遺物の集中部分等については、

のちに手掘りによった。

検出した遺構には、掘立柱建物跡・土塼(墓)・溝・柱穴・暗渠がある。これらの時期は、奈良時代末から鎌倉時代中頃にかけてのもの、また近世以降のものである。ただし、その中心になるものは、平安時代と考えられる。既往調査における成果については、全く新しい知見を加える発見はない。

A区では、掘立柱建物跡1棟、焼土塼1基、溝2条、柱穴・暗渠が多数発見された。掘立柱建物跡の現規模は、1間×3間であるが調査区外に広がるものであろう。焼土塼の平面形は、楕円であり、埋土は、炭層で構成される。出土遺物はなく、先年度に引き続き当遺構の帰属時期を特定することはできなかった。溝は攪乱を受けているものであり、出土した磁器等の遺物から江戸時代以降のものである。

当区で注目すべきは、暗渠であろう。暗渠は、竹を包む形で、小枝を敷き、その上部に



調査地位置図

石を配置するものが、特徴的である。竹の接続部分は、大小の組合せであり、かつ双方に2分割され、また、左右にずらされ、排水環境を良くしている。時期については、近世以降のものではあろうが、判断する資料に乏しい。東西方向のものが顕著であるが、北東—南西方向のもの、南北方向のものも多く見られ、切り合い関係が存することも考えておかなければならないが、その判断はできなかった。

B区では、土壇3基、溝2条、柱穴・暗渠多数が発見された。土壇には、焼土壇2基もある。柱穴は、数多く発見されたが、構築物の再構成はできなかった。溝に沿うような形で、その大部分は検出できたが、有機的なつながりは見いだせなかった。

暗渠は、南北、東西方向に数条見られるのみであった。

溝は、調査区の南北幅約50mにわたって、検出されたものがある。若干蛇行しながらも南北方向にほぼ直線的に流路をもつもので、この北端は、沼状遺構と続いており、当遺構の深さからも沼へ向かって流れていたことが窺える。二条の溝SD1とSD2は、ほぼ重なった状態で検出されたものである。二層の埋土をもつ時期の新しいSD2は、SD1が完全に流路としての機能を果たし終えてすぐに、また完全に埋まらない状況下で、一部底をさらう形で、作られたものと考えられる。いずれにせよ、相前後してSD1を踏襲したもので、集落内の欠かせない流路のひとつであったに違いない。これらの存続時期は、出土遺物がきわめて少ないこともあって、判断しがたいが、集落の隆盛極める平安時代中頃から鎌倉時代中期頃までと考えられる。

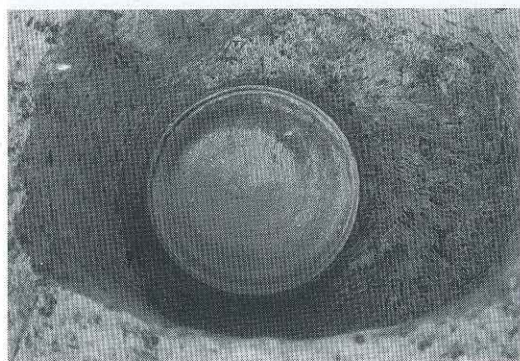
SD1も埋土は2層あり、上層と下層との境では、樹木・種子等が多く見られた。すなわち存続期間全般にわたって非常に緩やかな流れのものであったか、あるいは一時期流れのない時期が存在していたものであろう。下



遺構検出(南から)



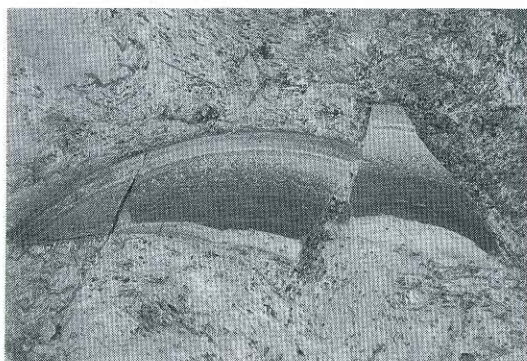
遺構検出(南から)



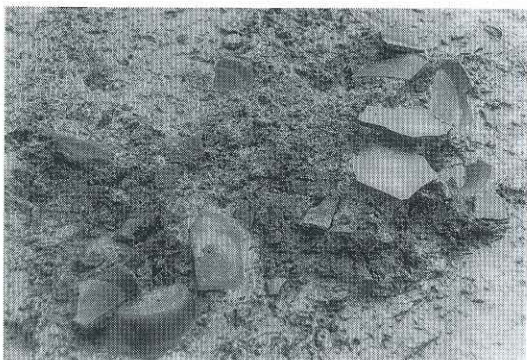
出土遺物(蓋)



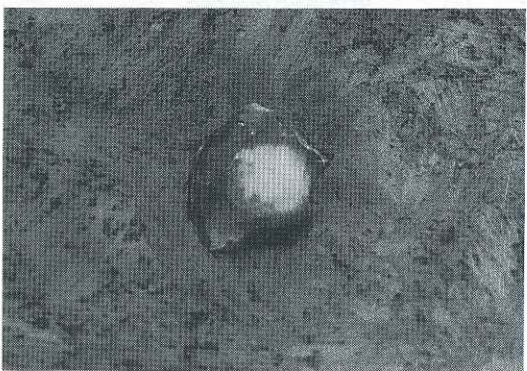
溝内出土遺物(北から)



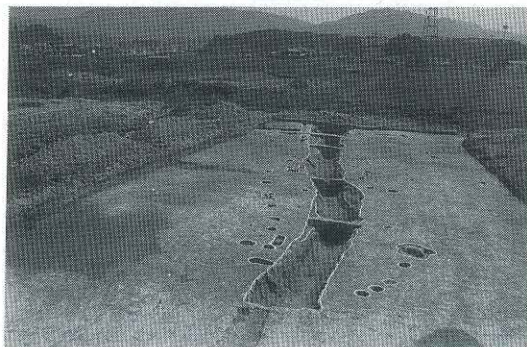
包含層出土遺物



包含層出土遺物



包含層出土遺物



溝完掘状況(北から)

層には、遺物が顕著ではないが、底部より唯一羽釜破片が出土した。脚部はないが、三脚付のものであろう。

C区では、掘立柱建物跡1棟、土壇墓1基、溝・暗渠多数が発見された。掘立柱建物跡は、1間×3間のもので、南北方向にその長軸をもっている。溝については、B区SD2のものと同様の埋土をもち、南東から北西にわたる流路で途中二股に別れる。溝について同様の埋土をもつものは、同一溝と考えられ、当遺跡における同様の溝は、前年度の調査結果からも複数の流路をもって、集落内を縦横に流れていたものと推測できる。溝内出土の遺物には、黒色土器の椀が部分的に集中して出土した。平安時代中期のものを中心にその出土位置は、検出面から基底面にまで及んでいる。また、別に耕作痕の可能性のある小溝が南北方向を主として縦横に発見された。

土壇墓については、南北方向にその長軸を持ち、約2×1mの規模をもっている。出土遺物には、土師皿1、黒色土器1があり、いずれも完形品である。検出面からの深さは、約50cmであり、基底面は、ほぼ平らである。埋土は、単層で炭も多く入る。暗渠は、南北方向に数条見られたのみであった。

また、その性格を特定はできなかったが、不整楕円形の土壇の両端に柱穴が列して検出された「遺構」がある。土壇自体は複数の埋土をもち、炭層がみられる。わずかな出土土器はもろく、一部、焼けていると考えられるものもある。すなわち、墳内において火の使用があったものと思われる。

この柱穴列と土壇が一括のものであるかどうかについては、同一のものであるとの積極的な証拠は見つからなかったが、柱穴が土壇を覆う形で配置されていることと、1間×5間で周辺に柱穴がないことなどから、土壇の覆い屋であると積極的に捉えておきたい。東西方向に長軸をもつ。土壇・柱穴の出土遺物から中世のものと考えられるが、掘立柱建物

跡等との有機的関係はつかみ難い。

D区では、掘立柱建物跡2棟、土壇2基、溝1条、柱穴・暗渠が多数発見された。掘立柱建物跡は、2基とも全掘していないが、2間×3間以上、2間×2間以上のもので、東西方向に長軸を持つようである。

土壇は約 1.5×2 mの不整形もので、基底面は凹凸が著しい。最大深は約0.7 mある。埋土は基本的に一層として捉えられ、出土遺物には多量の大形自然円・角礫、土師器等がある。また、他方の土壇は、深さ約20 cmで皿状の底面をもつ。出土遺物はない。

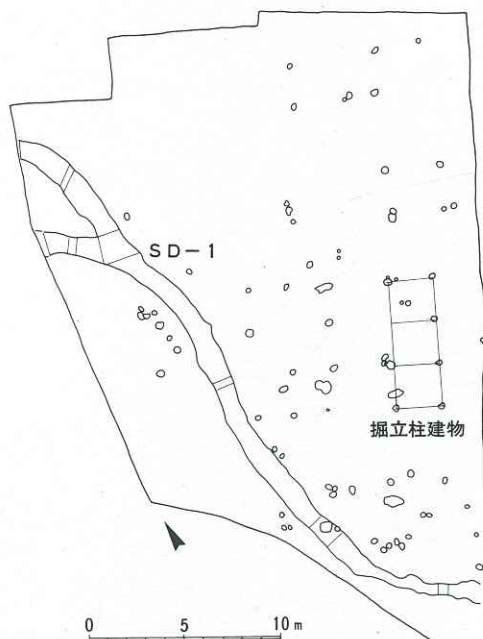
溝は、幅約40 cm、深さ20 cmで南北方向に流路をもっている。B区等で発見された溝とはほぼ同時期のものであるが、その性格は別として異なるものであろう。また、耕作痕と考えられる小溝は北東―南西方向またそれに直交して発見された。

暗渠については、その規模において、当時の田の大きさが、ある程度推定できる資料を提示した。

南部では包含層の堆積が厚く、多量の奈良時代の遺物がほとんどローリングを受けずに出土している。これは南への地山の傾斜が著しいために残存したものである。この中から、特筆すべきものとして、玉が出土している。古墳時代以前のものであろうが、器形及び時期は現在特定中である。

本遺跡では、D区で見られるように確実に存した奈良時代の遺物または遺構は、中世に入り集落を営むに当たり、開墾等で相当消失したものと考えられる。こののちこの地に確実に集落が営まれるのは、江戸時代以降になつてからのことである。

(木村)



B区 遺構略図(部分)



作業風景

発 行 日 平成3年3月31日

編集・発行 (財)栗東町文化体育振興事業団
滋賀県栗太郡栗東町川辺390-1
栗東町民体育館内

TEL.0775-53-4321

印刷・製本 宮川印刷株式会社
滋賀県大津市富士見台3-18

TEL.0775-33-1241